CRESC.

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＲＥＳＣ．

【Ｎコード】
Ｎ８１９７Ｊ

【作者名】
紅月

【あらすじ】
生きたい、確かにあの時私はそう願った。自称魔法使いの手を取った時、もう後戻りはできないと分かっていた。せめて、せめて悔いが残らないように生きられたのなら。そうやって戦って、終わった。で？それで、ここはどこなんだ、相棒？＊重いのは最初だけ。後はほのぼのだったりシリアスだったり、ゆるい恋愛だったり。

注意書き

え、今さら？という感じですが、注意書きです。
残酷描写や汚い言葉が出てくる、ということもそうなのですが。
ＣＲＥＳＣ．ですが…最初は短編でした。最初の１話分だけ読む気が失せるほど異様に長くてギッシリしているのはそのせいです。
それから、続きを書いてみたい、という私個人の願望で続きを書いていくことになりました。なので、１話の次の話からはがらっと雰囲気が変わります。内容も鬱方面ではなく、前向きな感じになっていきます。自己満足で申し訳ありません。
恋愛ものを書くのが苦手な私が練習ついでに書いている、というのもありますので、ちまちまと思いつきで更新していくつもりです。恋愛色も濃くなると……いいなあ、と思っております。
時系列はちゃんと上から下へ流れていきます。
初心者なのでいたらないところもたくさんあると思いますが、ちょっとした暇つぶしにでもＣＲＥＳＣ．を読んでもらえたら嬉しいです。

終わりと始まり（前書き）

最初の話はかなり鬱だ、と友人にも言われました。
大丈夫！という方もいるでしょうが、残酷な描写も、汚い言葉もあります。
ご注意くださいませ。
後、この話はかなりご都合主義です。
いやいや、これはないだろう現実的に考えて違うから！
というものも多々ございます。そのあたりはお手柔らかにお願いします。

終わりと始まり

テストが終わってほっとした私たちは、買い物をすることにした。もう三年生で、進路を決めなくてならない時期になった今、こうして友達と息抜きすることは楽しみだった。ショッピングモールを練り歩いて、電機売り場の前を通った時、私の足はきれいな床に固定されたように動かなくなった。

それを見たとき、まず呼吸が止まった。心臓がふくらんだように、張り裂けそうな錯覚に陥るほど鼓動する。見間違いじゃないのか、と目を凝らそうとする前にそのニュースは違うニュースに切り替わった。

暫く画面を見つめるが、天気予報の話が続いているだけだ。幻覚を見たような気分になってぎゅっと唇を噛みしめる。こんなときどうしていいかわからない自分を呪った。後ろから「どうしたの？」と能天気に訊いてくる友人たちを、もっと呪った。それさえも無意味なことだというのに。

「なんでもない」
「ほんとに？顔色悪いよ」
「あー……ちょっと母さんから早く帰れーってメールきててさ。ごめんね。後は3人で遊んでくれる？」

ありきたりな言い訳を吐きながら、お気に入りの真っ赤な携帯をいじる仕草をすれば、友人たちは納得したのか「わかった」と言いながら店の奥へ入って行った。後から、きゃらきゃらと楽しげに笑う声が聞こえたので、何の問題もないだろう。

携帯を握りしめながら、あたりを見回す。誰もいない。もう一度前のテレビを見る。滑稽なコマーシャルが流れていた。最近人気の芸人が面白おかしく話しながら、商品を紹介している。私はその場から踵を返し、家路を走った。コンクリートを蹴って、息が切れるのも必死な顔も気にせずに、必死になって走った。ブーツで来たのは間違いだった。せめてスニーカーを履いてくればよかった。そう、違う事を考えて不安を紛らわした。

駅のホームに入り、電車がちょうど来たところに乗り込む。座っていた人が不審そうにこちらを見ていたが、すぐに興味が失せたように視線がそれた。息が荒れていた。何のか知らないが汗がすごい。手で拭いながら、席に座る。掌を握り締めて、さっきのニュースのことを反芻させた。

今日未明、新総理大臣が発表しました。
過疎地域稀人（まれびと）市民を収監する、とのことです。政府組織の軍がただいま、全国に派遣されました。稀人とは、われわれに害をなす人間をいいます。わけもなく狂気に走るといわれる血であり、これにつきましては総理大臣も苦渋の決断で――――こちらは会見の映像です。

稀人を収監する。

頭ががんがん痛む。何を言っているんだと思った。私だって稀人だし、害をなす人間ではない。稀人とは本来、何百年も昔の話だが、罪を犯し、罰を受けた人が社会に復帰するために土地を貰い受け、そこで生活していた人たちのことだ。全国に多くある地域で、被差別市民だった。

尤も、現代ではそんなこともなくなった。だって人権などうるさくなって、そんなこと誰も口にしない。するはずもない。あってもインターネットの中だけで、理不尽に総理大臣が収監予告などもってのほかのはず。それなのに記者もアナウンサーも、人が変わったようにそれを平然と口にしている。それが当り前だというように。ぞっとした。どちらがわけもなく狂気に走る、だ！

以前と明らかに違う態度。法律の改定。人権の無視。

こうやって何か、日本がおかしくなったのは新しい総理に変わってからぐらいだったと思う。三年ほど前だろうか。テレビを見ていて、何かおかしいと思ったのはいつのことだっただろう。

アメリカと日本が手を組んで、軍事組織を結成するといったあたりからだろうか。もしくはずっと前からか。そういう人たちに限って、目が死んでいると思ったときだろうか。どれにしても、恐ろしいことだった。ニュースで報道されたということは、現実にそれが行われるのだろう。早く家につけ、と願った。

電車が止まって、開いた扉から勢いよく出た。度々人にぶつかるが、謝ってなどいられない。近くの市営の自転車置き場から自分の自転車を引っ張り出して、家へ急いだ。避けなければならない車も、人も、全部邪魔に感じた。庭へ自転車を放り出して、家のドアを開ける。汗が気持ち悪い。

「母さん！」

叫ぶように言って、玄関からリビングへ入る。そこで足が止まった。私の息切れする音だけが、静かな屋内に響いていた。母、父、

兄が、静かに食卓に座っている。驚いた顔をして、こちらを見た。鼻孔をくすぐる、料理のいいにおいが不自然なぐらい、殺伐としていた。嫌な予感がした。おそるおそる、彼らの目を見る。どこを見ているのだろうか、誰も私を見てなんかいなかった。肌が粟立ち、部屋が寒く感じた。

「今日は晩御飯いらない日じゃなかったの？」

困ったような顔をして近づいてくる母の手に、見知らないものがあった。小さな、透明の液体が入った小瓶だ。目が釘付けになる。それが何か、分かったような気がした。嘘だ、と叫びたくて喉が鳴る。叫ばなかったのは気力だ。ゆっくりと微笑んでみせて、「それ、何？」とやっとのことで訊いた。

「お願い、これを飲んで」

質問の答えになってない。

無理やり渡された小瓶からは、甘ったるいにおいがした。腕が震える。私は、家族から愛されていると思っていた。十分すぎるほど、過保護なほど可愛がられていたし、大切にされていると、思って、いた。

「家族の中の、若い女が死んだら、稀人は生まれないから、殺さないって」

とぎれとぎれに聞こえてくる言葉に、それは誰に言われたの、それは誰からもらったの、とは訊かなかった。だいたいわかる気がした。でも信じたくはなかった。もう軍が来たのだ。それにしても、『収監』から趣旨が『殺す』に変わっているじゃないか。全てが嫌

な方向に向かっている。まさか、冗談だろう、そう考える時点で、信じていないくせに。

本当にみんな、急に人が変わる。

たとえ軍に言われたからって、母は子供を差し出すような人ではなかったはずなのに。

この世界は狂って来ている。宇宙人が支配を始めていると聞いたら、あっさりそれを信じるぐらいには。今までの洗脳されてきた道徳はどこへいったのだろう。その答えは、今手の中にある小瓶が語っているような気がした。

「お茶と、一緒に飲みたい」

呆然としながら呟くと、誰もなにも言わなかった。

私が歩く音だけが、家に響いていた。罪悪感はあるのかな、と客観的に考えた。追い詰められるほど冷静になるとはよくいったもので、冷めた目でそれらを見ることができた。

リビングからは見えない台所の冷蔵庫に行き、やかんの中に波打つお茶を見つめて、自分のコップに注ぐ。これはたしか懸賞で当たったやつだった。あのときだってささいなことでも、あんなに喜んでくれたのに。どうしてこんなことになっているのだろう。どうして皆、私を見ていないんだろう。

そうして小瓶をもう一度見つめる――――

こん、と空になった瓶とコップを置く。私は家族を見もせずに、気分が悪くなったから二階で寝ると言って階段を上がった。足が震えてこけそうだったが、こらえた。自室の鍵をしっかりと閉めて、カーテンも閉めた。電気もつけず、薄暗い部屋にうずくまって、自分の掌を見つめた。

情けないぐらいに震えていた。自分の口から、かちかち音がする。歯の音、と気付くまで少しかかった。喉が痙攣して、涙が零れた。緊張で息が浅くなる。でも声は出さない。肩を抱きしめて、膝に顔を埋める。どうして私はこんなことをしているんだろう。どうしてこんなことに、なったのだろう。

数分たつと、一階から大きな物音が聞こえた。あれは椅子がこける音だ。他にもたくさん音がする。床を殴るような音、茶碗が割れる音。喘ぐ声。必死に耳を塞いだ。奥歯がうるさい。心臓もうるさい。

私はふらふらと立ち上がって、ドアの鍵を開ける。ゆっくりと、音を立てないように部屋から滑り出て、階段を下りた。膝から下の感覚がないかのように震えて、おぼつかない足取りでしか歩けない。そっと覗いたリビングは異様な光景だった。いっそ笑えるぐらいに。

茶碗や椅子はひっくり返り、まだ温かい料理が散らばっている。机の下に兄が、その隣に父が横たわっていた。だらりとした倒れ方を見て、背筋が寒くなった。目が半開きになって、白目を剥いている。ぼんやり虚空を見つめる目を見て、死んでる、と確信した。吐

き出された血反吐と涎とか、食べたものが床に付着している。むっと血と吐しゃ物の臭いが襲ってきた。胃液がこみ上げてきて、思わず手で口を押さえる。

「！」

ぐっと足首を掴まれた。咄嗟に見ると、母が息絶え絶えに私を睨みつけていた。痙攣している指は、跡がつくぐらい絡みついている。口から泡と血を吐きながら、爪を立てた母は、呪うように呟いた。

「あんた、なんで……」

なんで。なんで。なんでだって？

思わずひきつった笑い声が漏れた。皮膚をかきむしりたくなった。しゃがんで、ぼさぼさになった母の頭をやさしくなでる。なお咳きこむ背中も。温かかった。そうしてどうしても引きつったような笑い声が漏れるのをそのままに、私は言った。

「これをあなたが、私にするつもりだったんでしょ？」

ひゅ、と母の喉が鳴る音がした。

それから彼女は私の足に額を押し付けて、ごめんね、としゃがれた声で謝った。ずっと、謝っていた。息を引き取るまで、ずっとずっと繰り返していた。私にはそれがこの世で一番の呪いのように聞こえていた。今更、どうして謝るのかと。また喉が痙攣してきた。腕で目をこすって、死後硬直で手が固まる前に、足首をつかむ手をはずした。どうやら私も狂って来ているらしい。

ニュースで人が変わる人は、瞳孔が開いているように感じる。目

が死んでいると思ったのはこのためだ。そしてこの人はイっちゃってるとわかるような、雰囲気がある。今までそのことを話していた家族は、もういない。

狂っていたのはどっちだったのだろう。

彼らは死ぬのが怖くて私を差し出したのかもしれないし、私がほとんど何も考えずに、あのやかんに小瓶を傾けたのは狂気だったのかもしれない。でもそれなら、どうしてこんなに苦しいのか。恐ろしいのか。ああ、歯の音がうるさい。心臓がうるさい。暑くないのに汗が出る。それも気持ちが悪くて吐きそうだ。

これから、どうしよう。

そもそも母たちが信じた、子供を殺せば家族は殺さないと軍が言ったのは嘘の気がする。ニュースでは『稀人を収監』と言っていた。全ての稀人が当てはまる。だとしたら、どうせここにもまた私を殺そうとする人が来るのだろう。一人残らず、この地区の人全員、殺されてしまうのか。この地区に限らずとも、根絶やしにされてしまうのか。そんなことはどうだっていい。歯を噛みしめる。もう震えないように。

台所に行って、吐いた。吐くものもないのに、気持ち悪くて仕方がなかった。水を流したままで、収まるまで胃液を吐き続けた。やっと収まってきた頃に、水で口をゆすぐ。そうしたら体全部が気持ち悪くなった気がして、水を掌にすくい取って顔に叩きつけた。涙か何かわからないものがシンクに落ちていく。

シンクの下の扉を開ける。ずらっと並んだ包丁の、細身で持ちやすいものを選んだ。そこから呆然と死んだ家族を見る。何か遠い。

ほんとうに、どうしてこんなことになったのか。私たちは生きたいだけなのに。

絶対に生きてやる。

そう、思った。怠惰に、たいした夢もなく、高校を卒業したら働いて、時々友達と遊んで、結婚できればそれでいいんじゃないか。そうして生きてきた間、一度として感じたことのない激情。

人は死を近くに感じなければ、今までの幸せを享受してきたことに気づかないものなのかと絶望した。もう日常には戻れない。人を殺しておいて、友達にも会えない。これから、本当にどうすれば生き残れるのか。頼れる人間も、もういない。探したっていないだろう。誰も信用ならない。自分で分かるほど、私は追い詰められていた。

ぎゅっと包丁の柄を握り締める。血だまりの中を歩くと、靴下に生暖かさが滲んだ。鳥肌が立った。自分が気持ち悪くて仕方なかった。だけどそれ以上に生きたかった。――――なんて、貪欲だったんだろうか。

「……驚いたな」

「誰」

「さあ、誰だろう」

低い男の声がして、玄関に繋がるドアを見る。外人だ。金髪に、くすんだ緑の目。ドイツ人だろうか。外人にしては日本人のような幼さも持つ外見は、ハーフのようにも見えた。彼は迷彩柄の服を着

て、腰のベルトには二丁も、武骨な銃をひっさげている。映画を見ているかのようだった。それ以前に、男が着ているのは、政府の組織の服だった。ニュースで何度か見た、その風体。

思わず包丁を構えた。銃に比べればおもちゃのようなそれも、気休めだ。床を蹴って、男に切りかかった。何も考えず、本能的な行動だった。だが、まるで赤子のように簡単に腕を捻り上げられた。あまりの痛みに声を上げる。折れそうだと思うぐらい嫌な音がした。止めたはずの涙が浮かんできた。

終わりだ。と思った瞬間、男はおかしそうに笑った。

「初めて見たよ。この街で生きてるやつ」

随分と流暢な日本語だった。

もう皆殺されたというのだろうか。

がん、と包丁が手から滑り、床に落ちる音がやけに大きく響いた。手首が痛い、というよりも麻痺して熱かった。男を睨み上げると、突然腕を放された。突然のことで思い切り尻もちをつく。なおも睨んでいると、今度は男が何か言った。聞き取れなかったのは、それは聞いたこともない言葉だったからだ。

すっと差し出された手に、目を見張った。

「生きたいかって訊いた」

私は自然とその手を取っていた。殺される、ということを考えなかったわけではない。まるで体が勝手に動いたかのようだった。操られたように、私の手は男の掌に乗っていた。

男の名は、シルヴィオ・ロウ・マルクというそうだ。随分高尚な名前だが、私は呼びづらかったので勝手に「シロウ」と呼んでいる。シルヴィオの「シ」に、「ロウ」だけ取って。まるで日本語のようになるので、好んでそう呼んでいる。シロウも勝手にさせていた。

アレから四年経った。

気がついたら私はシロウと共に反乱組織を立ち上げていた。私たちの呼びかけに集まってくれた稀人は多い。その友人、も。そうしてその亡くなった数も多かった。この間やっとそれなりの人数が集まって、他国やマトモな人に知らせるため、と称してクーデターを起こすことに成功した。

だがそれは間違っていた。とりあえず上の者にマトモな人間はいなかったということだ。他の国も、沈黙していた。クーデターを起こした私たちに、政府は黙っていなかった。蝿を追い払うみたいに、アメリカと組織した軍を、発動させたのだ。攻め込まれた私たちはうまく攻防し、退けることに成功した。だが、被害も多かった。

間違っていたからといって、クーデターはなかったことにはならない。後にも先にも動けない。がんじがらめで立ち尽くし、私はほとんど生きたいという理由だけで皆に戦いを促した。

仲間うちでも殺しあうことがある。その理由は、相手の目を見ればわかる。瞳孔が開いているか開いていないか。開いていなかったらただの裏切り、開いていたら――――狂ってる。そうやって狂ったやつは武器をふりまわし、正気じゃなくなる。狂ったやつを戻そ

うとしたときもあった。しかし、暴れるのを縛って抑えても、物を食べない、返事をしない、殴っても水につけても戻らなかった。――殺すしかなかった。

私は全員を信用していなかった。シロウはともかく、いつ狂うかわからない人を、信用するわけにはいかない。さして仲良くもないし、目的の為だけに集まった組織は、殺すか殺されるか、裏切るか裏切らないかだけだった。

クーデターの後の政府の攻撃を防いだのが成功したのはシロウのお陰だった。彼は、自分は魔法使いなどと言っている。彼がどうやって作るのか知らない武器や、急な天気の変化など……どうやって作っているのかは訊かない。深くお互いの事を訊かない、というのが暗黙のルールのようになっている。それでもひどく助けられているのは事実だった。

硝煙と血の臭いが充満している。慣れてしまったそれに気分が悪くなることはなかった。むしろ、それがないと落ち着かないと感じるぐらいだ。むせかえるような熱に照らし出された私の顔は、４年前と同じ顔をしているだろうか。

地面に紙が乱雑に散らばっている。紙幣だ。日本円にして１億くらいだろうか。黒こげになったそれは、もうただの紙でしかない。その真ん中で怯えたように私を見上げる仲間の額に、私はゆっくりと銃口を向ける。

「あんたが悪いんだ、くそったれ」

男が震える声で言った言葉に、耳を傾ける。かつての仲間に銃を

向けることに特別感慨があったことはないと思っていたが、そうでもないらしい。罵倒は慣れている。暴力も死も慣れた。しかし今まで少しでも同志だと思っていた者が自分に向けるその目は、慣れることがないなと心の隅で思った。

「あんたがクーデターなんか起こしたから、俺たちが危なくなったんじゃないか！ああ、ああ、責任とれよ、ちくしょう」
「それに賛成したのは、あなたも同じはずだよ」
「うるせぇ！何人死んだと思ってるんだ、このキチガイが！」

こうして指導者は責められることになる。やつあたりはいつも身近な者にくるものだ。渦中にいるのは反乱組織に賛成したもの、全てなのに。理不尽さも私にとってはどうでもよかった。味方が裏切るは何度目だろうか。それを処理したのも何度目だろう。

「生きるために殺すことと、金のために殺すこと、どっちも同じじゃん」
「関係ねぇよ、俺たちは死ぬんだ。殺される。逃げられないんだ、だったら、最後ぐらいいい気分で終わりたいだろ？な？あんただってそう思わないか」
「思わない」
「どうかしてるよ、アンタ……」

男はひきつった笑みを浮かべながら、殺さないでくれと呟いた。何度も何度も呟いた。涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔はひどく哀れにも思えた。その状況をつくっている私も馬鹿みたいだった。

「あなたが通じてたのはアメリカのどこ」
「あんたなんか死んじまったほうが世の中のためだ」
「どこって訊いてんの」

額に銃口を押し付ける。トリガーに指をかけた。

「知らねえ……俺は情報教えろって言われただけなんだ、だから」

ぱん、

だから、なんだっていうのだろうか。その続きがおおよそわかった気がした。ゆっくり金の中に倒れて火に埋もれる男を見て、ゆるく笑った。

私だって、楽になりたい。そしてそれ以上に後悔しないように毎日を生きたい。その結論が金なんて論外だ。こんな紙切れが、いったい何になるというのだろうか。私は燃えていない金が入っているはずのケースを持ち上げる。こんなものでも食料調達には使えるだろう。それを担当している者に渡すために、私はそこから踵を返した。煤がついて頬を、迷彩柄の袖で拭った。

今本当に私は、後悔していないのだろうか。

駐屯地に戻ると、仲間が一斉に私を振り返った。何も言われなかった。煤だらけの私を見て、ああまたか、といった表情をする。全員、この環境に慣れてしまった。順応しすぎて滑稽だった。皆同じなのだ。ここにいる人間全てに暗い背景があって、ここから動けない。どうしようもできない。見えない明日を見据えている。

瓦礫があつまってできたような、コンクリートにいくつもひび割れが生じている廃墟を歩いていく。小さな部屋の前に、金髪の男が座っていた。相も変わらず迷彩柄の服のまま。

彼は私に気付くと、落ち着いた声で口を開いた。

「少し寝たら？」

部屋に戻りしだい、シロウが持ってきた兵器の手入れをしようと考えていたら、そう言われた。武器を扱えるようになったのは彼の指導のおかげであり、これも不可思議な現象である。筋肉がつきやすくなっている気がしてならないし、運動神経が格段によくなっている。これも訊かない。好都合であるのだから。つまるところ私はシロウを信じる他ない。彼は私より私のことをよく見ている。彼が休めと言ったときに休んでおいたほうが得策だった。

「今日は俺が座って寝るから、アンタは横になってな」

「ありがとう」

狭い指導官のみが入れる部屋の、毛布が敷いてある場所に転がる。シロウが目に入った。銃を握って座った。いつもと変わらないその姿にすこし安心した。

「隈できてるね。顔も汚れてる、拭きなよ」

「めんどくさい」

反論すると、少し汚れたタオルで煤で黒くなった頬を擦られた。問答無用で思い切り擦られる皮膚が痛い。

「ねえ、よかったの」

「何が」

「シロウはアメリカ軍だったんでしょう。もう戻れない」

「確かにそうだったよ。言うとおり、もう戻れないし、戻るつもりはない。でも俺は別にアメリカに屈してたワケじゃないしね。アレ

だよアレ」
「ん？」
「向こうで殺し屋してて」
「ああ……そんな感じするわ」
「失礼なやつだな。アンタと最初に会ったとき、覚えてる？４年前だっけ。あの時、アメリカ軍にあの一帯の住民を殺すように言われてたんだ。まあ、金になるし、あんなご時世だし、ヤってたわけよ」
「どうして」
「アンタを殺してないかって？そりゃあ、アンタが生きてたからさ。……ああ、そういうことじゃない。あの住民全部、死んだ目ばっかしててさ。生きるのを諦めた目だ。気に入らない。そんな中で、アンタだけが生きてる気がした」
「それだけで軍を抜けるなんてバカじゃないの」
「俺って今までさー、殺すことばっかで他の事に興味がなかったんだ。毎日つまんなかったってことかな。アンタ見たときに初めて他人に興味がわいた。こいつを生かせばおもしろそうだって。俺も、変われるんじゃないかって」
「イカれてるね」
「ふん。家族殺しといてよく言うよ」
「確かにそうだ」

この世界では、1人で寝ることなんて危なくてできない。皆が裏切り、殺しあう世界。ただ、シロウだけは狂わない気がした。それは彼が魔法使いとやらなのかもしれない。少なくとも、私の中でシロウは人外だった。私とシロウは交替で睡眠をとる。3日に1日は私が座り、2日はシロウが座って寝る。こういうのは彼のほうが慣れているから、その配分に文句はなかった。

気疲れにうとうとし始めると、シロウが片手で私の目を塞いだ。ぱん、と乾いた音が室内に響いた。それから人間が倒れる音。硝煙

と血の臭いがむっと漂ってきた。

ここ最近で動きが怪しかった自分物は誰だっただろう、と冷静に考える。何人かいて、その中で一番確率が高そうな人物をあげる。

「栞？」

「……よくわかったね」

いまだにシロウは私の目を塞いで、このまま目を開けないように、と囁いてずるずると死体をひきずって行った。ひきずった痕に、赤い線が一筋伸びていた。

栞は、学校が一緒でよく遊んでいた子だ。あの穏やかな日常が終わったあの日、遊んでいた。彼女は何の因果か彼女は反乱組織に入り、それから少し話したこともある。だけど絶対的な信用は元からしていなかった。心から、誰も信じられなくなってしまっていた。

妙に目が覚めたな、と思って目を開ける。シロウが帰ってきた。

「別にいいんだよ、慣れてるから」

そんなに気を使わなくてもいい。と笑えば、シロウも笑った。

「嘘吐き。お人よしのくせに」

また彼はドアの近くに座り、目を瞑った。たまにシロウは優しい。優しい人殺しだ。的を射た言葉に、私は布団にもぐりこむ。情けない気持ちが溢れてきて、もう一度きつく眼を瞑った。トモダチ、だなんてお互い言えた日を思い出して切なくなった。

「瞳孔は開いてなかったよ。ただの裏切りだ。何枚もらったか知ら

ないけどね」
「最近多いね」
そう、狂った人間は瞳孔が開くというのは事実らしかった。なぜかは知らないし、シロウがどうしてその特徴を知っていたのかも知らない。私はシロウに踊らされているのかもしれないし、シロウが世界に踊らされているのかもしれない。
一度シロウに頭がいい、と褒められたことがある。戦略の話で、だ。彼と一緒に策を練り、彼が主に戦場の前線に立つ。そうした結果、政府の虐殺を5回も抑えられている。向こうにとっても、シロウが反乱側にいるのは痛手だろう。
この世界はおかしい。シロウがおかしな戦い方をしても、誰も何も突っ込まない。政府もそれをあるものとして攻めてくる。そうして誰かが毎日裏切り、裏切られる。今日は誰が敵か。誰が狂うのか。これも結局ほとんどをシロウが抑えている。私だけだったら何もできないのだ。考えるだけでは、どうにもならない。
「訊かないの？……って、ずっと訊きたかった」
布団から顔を出して、シロウを仰ぎ見る。「何を訊いてほしいの？」と訊けば、質問を質問で返すな、と銃を向けられたので、素直に「じゃあ今訊かせてよ。シロウが知ってること」と言えば、自分で言ったくせに躊躇っていた。
目がさえてしまって眠れないので、急かすことなく口を開くのを待つ。三分経ったぐらいで、迷ったようにシロウは言った。
「俺は魔法使いなんだよ」

「……ふうん」
「何その興味なさげな返事」
「で？」
「ホント調子狂うな……この力はね、まあ色々な事ができるんだよ。アンタが知ってるようなこと。人の気を狂わせることだってできる」

アメリカ軍が創ったものだ、とシロウは続ける。俺もそうやって創られた一人なんだと。私は、なんだかどうにもファンタジーな話についていけなくて、「あ、そう」という気のない返事が漏れるだけだった。いつのまにやらアメリカは人体兵器が作れるようになっていたらしい。科学の話はわからないし、それだけでは済ませられない気もするからスルーしておいた。

もう何が起こっても、そう驚かなくなっていた私は、この話を三分も渋る必要があったのかと悩むところでもあった。

「ようするに今まで人を狂わせてたのはシロウってこと？」
「アッサリそんな解釈するなよ。違う」
「ならいいじゃん」
「は？」
「シロウは私の味方でしょ」
「……まあね」
「で、つまりどういうこと？シロウの分身かなんかが人を狂わせてるわけ？」
「ああ、うん。正確にいうと、俺と一緒に創られた人間だ。オリジナルのシルヴィオから作られたクローンの進化系みたいな」
「なにそれゲーム？ファンタジーすぎてついてけないわ」

まあそういうことでシロウは気が狂う人間について色々知ってたんだね、と言うと、楽天家で結構だ。とシロウは笑った。あんまり嬉しそうに笑うものだから、そっちも楽天家じゃないかと指摘する

と、尚笑った。

「アンタ変だよね。生かしておいてよかった」

俺はもう一人の俺を殺すために反乱組織を立ち上げようと思ったんだ、とシロウは囁いた。自分が大きく出れば、もう一人も表に出てくるだろうと。そしてそれは当たっていたと嬉しそうに語るものだから、続きを聞いてほしいのだろうと思って促した。

「なんで協力しなかったの？自分と同じ存在なのに」

「嫌いだから。俺は、俺だけでありたかった、それだけ、なんだ」

私は思わず笑った。どんなにあがいても、シロウはシロウなのに。

「……それで、いつどこに出てくるっていうのさ」

「――――明日だ」

はっとした。シロウは私をじっと見ながら、続ける。何を考えているかわからない、くすんだ緑の目をしていた。彼は明日が最後になるから、私に身の上を話したのだ。

今まで話したことのない内容は、私の中でいつまでたってもファンタジーでしかなかった。シロウはシロウで、私にとってこの世界で一番信頼できる人外だからだ。過去なんてどうでもいい話だった。

「明日全てが終わる時に。わかるんだ、俺はもう一人の俺だから。あれも俺を殺そうと思ってるはずだ。そいつさえやれればな、たぶん気が狂ったやつらも戻るはずなんだ」

嬉しいだろ、と頭をなでてきた手をはたき落して睨みあげる。そ

んなことを言われても他人の私には全く理解できない。大きくため息をついて、布団を抱き込んだ。ごろごろしながら、脇に置いてあった私の銃を手に取る。慣れた重さが、掌に冷たさを伝えてくる。ランタンでぼんやりと照らされた室内で鈍く輝いた。

何人殺しただろう。何回やめられたらと思っただろう。そう考えるほど、私は理性的になっていくのだ。病んでいくのに狂えない。初めて人を殺したときの罪悪感、背徳感を忘れられない。相手の絶望したような顔の脳天に照準を合わせて、引き金を引いたあの時。死んだほうが楽になれるのではないかと初めて弱気になった。

「私はこれが最後になるかもしれないのに」
「ああ……大丈夫、アンタは生かすから」
「いやいや、私独り生き残ってもすぐ死ぬだけでしょ。狂わせてる本人が死んでも、反乱軍の指揮官の一人、なんて顔がわれてる」
「違う世界なら生き残れるんじゃない？」
「ばかなの？死ぬの？」

明日、日本に核が落とされる。

宣戦布告されたその知らせに、もう終わるのかと思った。クーデターの一件で動けなくなった私を、終わらせるものが来たのかと。ぞっとした反面、安堵してもいたのだ。今の現状で満足しているわけもなく、幸せでもない。このしがらみから解放されるのかと。

シロウだってそうだ。彼はわざわざもう一人を殺そうとせずに反乱組織にいなかったら、今頃裕福に暮らしていたかもしれないのに。まあ、彼の面白い面白くないの基準はわからないので、これは置いておくとしよう。

「今までありがとう、シルヴィオ」
「なんだ、俺の名前言えるんじゃないか」
「故意に呼ばなかっただけだし」
「まあ俺もシロウって気に入ってたけどね。日本人みたいで」
「……子供みたい。シロウいくつ？」
「二十九」
「……」

嬉しそうに笑う彼は、死ぬことを恐怖していないように感じた。まるで自分は死なないとでもいうような口ぶりだった。

「もう会えないのかな」
「俺ともう一度会いたいの？」

キチガイだね。とキチガイに言われて、少しむっとする。揚げ足を取るのが大好きなシロウに、何を言っても通じないのはわかりきったことなので、黙ることで抗議を示した。

少し前から核が落とされるだろうことは想定していた。だが、予定よりも早かった。なんとか千人はオーストラリアに逃がした。残りはもう船がないので本州に残っている。明日の核を区切りに狂った世の中が終わるのならば、彼らは生きていけるだろう。

「会えるよ」
だって俺は魔法使いだから。

笑ったシロウは、また嬉しそうだったので、もうこれ以上何かを言うのをやめることにした。こんなときに限ってシロウの話を信じることができないが、気が付いたら、死ぬことを不安に感じていない自分を感じて、気分が悪くなった。

次の日、空が赤く染まった。小さな覗き窓から飛び込んだ強烈な光を最後に、私たちは地球から消えたのだ。そう考えることができるのは、今私が生きている証拠であり、例のキチガイが隣で笑っている証拠であった。

小さな村が見える丘で、私は体育座りをしていた。
風が運んでくる匂いは、青臭い葉の香りとあたり一面に咲く花の香りだ。硝煙の臭いとむせかえるような血の臭いはしない。銃声も聞こえなければ、炎の爆ぜる音もしない。

ここは、おだやかな風に包まれている。

静かな空間だ。肩ぐらいまでの茶髪を揺らしながら、私は眼を閉じた。昔カラオケで歌ったバラードを口ずさんでみる。歌詞はあまり覚えていないから、ほとんど鼻歌に近い。歌手は誰だったかな、と考えながら、顔も思い出せないことに気付く。声はなんとなく覚えていて、可愛らしい感じの高い声だったことを思い出した。

私は昨日まで、反乱組織を指揮していた。

それから核が落とされ、なぜかシルヴィオ・ロウ・マルクによって生かされている。彼が言うにはここは今までいた世界と違う、別世界。彼が言うには人間が住んでいる並行世界。反論も忘れて口を

開けたままその言葉を聞いた自分を思い出して苦笑した。

もしかしたらここは地球のどこかなのかもしれない。

それでもここは、こんなにも穏やかだった。そのことに安堵を覚えて、口を閉じた。急激に眠気がってくる。反乱組織を立ち上げた時から、安心して眠ったことがない。万年睡眠不足だった頭は、早急にシャットダウンされていく。

「あいつが帰ってくるまで寝よう……」

ここにやってきてから、男は村に情報収集へ行ってくると消えた。そういうことは全て任せておいほうが得策なので、私もそれを軽く了承した。私がついていったところで、面倒くさいことになるだけだ。彼のように全てのことをのらりくらりとはかわせない。

それにしても、帰ってくるのが遅すぎではないだろうか。あのキチガイに限って殺されているということはなさそうだが、もしかすると身動きが取れない状況に陥っているのかもしれない。ここでは面倒なことを起こさないと誓った。

どうせアレは無事だろうし、まあいいか、と考えることを放棄して惰眠を貪った。なにしろ、ここは空気が清浄だった。

しばらくしたら頭に衝撃があった。

何かと思って体を起こすと、男がしゃがんで私を見ていた。どうやら不機嫌なようだ。眠さで目がほぼ開いていない状態で、「どうだった」と訊けば、彼は首を振った。

「どういうこと？」
「んー、なんか閉鎖的っぽくてさ。俺の話なんか聞いてくれない」
「……だから不機嫌なの」
「それもあるんだけど、もっと重要なこと忘れててさ」
「ん？」
「俺はまあ、どんな言葉でも理解することが可能なわけね。でも、アンタはフツーの人間だろ？意思疎通が図れない」
「……つまり」
「とりあえずは勉強だねえ」

頭を抱える私に、男はへらりと笑った。こんなの閉鎖的な村で情報を手に入れるより難しく時間がかかるじゃないか。どれだけの期間がかかると思っているんだ、と睨みつけると、人外は声をあげて笑った。

「まあ宿はとったんだ。俺が持ってた銃と交換。まあ古いやつだしシリンダ抜いてあるからなんの効果もないんだけどね」
「そういや、兵器は持ってきてないの？」
「向こうで日本に持ってこれたのは材料があったからだよ」
「ああ、そう……分かんないけど、そうなんだ」
「そういうことだから、おとなしくしててね」
「ようするに言葉を覚えるまで喋るなってことか」
「そういうこと。精神病で口がきけなくなって、癒すためにいい土地を探していたっていう設定だから。それから……ぼちぼち旅でもするか」
「そうだね」

一体どんなふうに交渉してきたか知らないが、私は面倒なことは嫌いなので、絶対に喋らないことにした。
私は今自由だ。なんのしがらみもない、ゼロからのスタート。彼

にしても、彼にしたらしがらみなんて関係ないのかもしれないが、きっと内心安堵しているだろう。核が落とされる前に見た、人外ということへの劣等感を、私は忘れることができない。なにも感じていないなら、彼はああも告げることを躊躇わなかっただろう。

「ちなみにね、日本に残ってた仲間全員こっちに送ったんだけど」
「いないじゃない」
「いるんだよ、どっかにね」

わけがわからなくなってきたので、地面に生えている小さな白い花をつまんだ。花なんて触ったのは何年ぶりだろうな、なんてくだらないことを考えながら、ぼんやりとした。ふと気がつくと、それを聞いた後、私の心は軽くなっていた。

お互い狂わないと分かっていたら、あの人たちとも、もっと仲良くできるだろうか。会って、仲間を信用しきれなかった私を許してくれるだろうか。手にのぼってきた天道虫を指先ではじいた。

「ここはどうやら、機械がそこまで発達してないらしい。中世ヨーロッパあたりかな。金もないし、傭兵にでもなる？」
「それよりも、とりあえず地図見て情勢を知らなきゃ。いずれ潰れる場所に加勢したくはないし」
「現実的だねー。ここは核もないし、なんとかなるのに」
「あんたみたいな魔法使いとやらがいるかもしれないじゃない」
「それもそうだ。ああ、楽しみだなあ」

どうやら彼はここへ来たことをエンジョイする気のようだ。子供が遠足へ行く前みたいにへらへら笑っている。私は本当に彼が何が楽しくて、何が楽しくないのかよくわからない。とりあえず今は楽しんでいるようだ。

「未知の世界っていいよね」
「そう考えられるのってシロウだけだと思う」
「そうかな？アンタだって、笑ってるよ」
「え」

自分たちの場所にそぐわないボロボロで土埃やら何やらついている服を見て、苦笑した。おそろいの迷彩柄は、鮮やかな緑の中で浮いている。

日向にいると、メランコリックな感情が全て拭われていく気がする。そういうことが思いつかないほど私の気分は向上していた。硝煙の臭いがしないのは逆に慣れない。だが感情が昔に戻っていく気がした。何も考えずに、笑っていられた頃の。

結局ここはどこなんだ、と訊く前に、私はシルヴィオを力いっぱい抱きしめた。

終わりと始まり（後書き）

……ここまで辛抱強く読んでくれた方はいるのでしょうか。長いもんね、ですよね。これ前置きに近い話なんです、ほんとどうしましょう。次からはころっと内容が変わります。

日常1

「今日で辞表出す」
「なんで」

シロウは器用に片眉をあげた。

ところで私たちは海軍にはいったわけだが、どうにもついていけない。

この世界に海軍は1つしかない巨大な組織だ。世界の至る場所に何か所も拠点がある。ようするに世界政府だが、そんな巨大な力に対抗してくる組織もある。この国が統一できていない独立国から、時折軍艦がやってきたり、なんと海賊がいたりする。まあ中世に近いんだから当たり前のことかもしれない。

よりにもよって海軍だ！意味がわからない。なんでまた軍隊に入ったかというと、色々都合がよかったためだ。軍隊に在籍すると、それだけで国籍と同じ意味があるらしいからだ。なので、入った理由はわかる。わかるのだが、私は船酔いするんだ、海軍なんて冗談じゃない。陸軍ならまだしも、と思っていたのだが、驚くべきことに、この世界の大きな組織は、某国の海軍だけだ。某国になぜ海軍しかいないかというと、この世界は8：2の割合で海の面積が広いからだ。海賊なんてものも多くいるから、陸より海のほうが危険が多いそうで。なんてことだ！

尤も、この国の海軍は陸での争いの鎮圧もするようだ。海軍とか陸軍とか、そういう取り決めはない。単純に、世界に海が多いからというものじゃないんだろうか。いいかげんなことの多いこの世界に、私の常識はどうやら通用しないようだ。ため息が出る。

もちろん戦争なんてものにはまだ行ったこともないし、なんというか、この世界は平和だ。

傭兵として軍に入ってみたのだが、そう疑われることもなく即採用。なんでこの平和ボケした海軍が世界最大の組織なのか、不思議でならない。

そして、シロウは反則技を使ったように昇進してしまった。他の人間もたいしたことない者だったのだろう、そいつらを蹴飛ばして昇進した元傭兵（シロウ）。軍内で恨まれるなんて当たり前。なんてことだ、面倒を起こさないっていう約束は一体どこへいったんだ。そしてどうして私よりもこの世界の学をシロウが知っているのか。私は苦労したっていうのに、ちくしょう。

その昇進に付き合わされるように、少将になんかなってしまったシロウの秘書まがいのことをさせられている。海に出なくていいだけマシだが、こんなことどうして上が許すんだろう。なんか使ったのだろうか。なんでもありすぎて、あの男を見るとため息が出る。

この世界でシロウはそう魔法を多用していない。魔法なんてものは、この世界にひとつも存在しないからだ。わからない程度にするため、軍内での彼は「強運の男」などと呼ばれている。その強運が故意に起こしたものなのだからしまつに負えない。強運の男、なんて他の兵士が言うのを聞くと、思わず頬がひきつってしまう。

「気づいたんだ」
「なにを」
「私デスクワーク向いてないわ」
「阿呆か、死ね」

ごり、と押しつけられたどこから出したかわからない拳銃を制して、飽きずに辞めたいとつぶやいた。つきつけられた米神が地味に痛むので、なでつけながらぶちぶちと愚痴を呟く。ああ、暇だ暇だめんどくさいどうでもいいつまらないまず上司がありえない海軍なんかくそくらえ。

「やる気はどうしたやる気は」

この前まであっただろ、と呆れたように言うキチガイはもしかすると真面目な男なのかもしれない。6年も一緒にいるが、初めて知った。私はあくびをかみ殺して、山のように積もった書類を指先ではじいた。つまらない。

「産声上げるときと初めて立ち上がるときに費やした」
「早っ」
「なんか暇なんだよねえ。だって考えてもみてよ、今まで糞忙しくて寝る暇もなかったっていうのに、何この高待遇。一日6時間は寝られるし、仕事っていったって書類整理ばっかり。海の巡回なんて行きたくもないけど」

まだ、最初にとどまるところを探して旅をしていたときの方が楽しかった。色々なところに行けたし、こんなに部屋に缶詰めなんて耐えられない。

こんなんじゃ体が鈍って使い物にならなくなりそう、とぼやけば、「もう使い物にならないじゃないの」と文句を言われた。確かに高待遇なのは嬉しいことだ。しかし未だに慣れないもので、海軍に入って、この地位について1年以上経った今でも、一日が平和すぎて違和感がある。戦争をしたいわけじゃないが、なにか喪失したかのように暇すぎた。なにかが足らない。何だろう。もっとも、周りから見れば普通の光景なのだろうが。

のんびりした時間が好きだ、しかし、それは嫌いなことをしていない時に限る。

「色々言い訳したみたいだけど、まとめると、嫌いなことはしたくないってことね」

「そうとも言います、少将」

「そこのぼけなす。とりあえずこの山積みの書類に押印して。これ期限今日までだから」

「溜めて提出が遅いのは少将のせいだと思います」

口答えしている間に、丁寧に誠心誠意込めて書き上げた辞表を無残にも破り捨てたシロウは、私をじとりと睨んだ。

彼はこの生活に満足しているのだろう、時々カジノに遊びに行くものの、普通の人間と同じような生活をしている。なんて順応能力が高い。それを知っていて私は口答えする。なんだかんだいって、シロウがこの世界に慣れすぎることが怖いのだ。まるで自分が独りのような気がして。

とはいっても、私も随分慣れたものだ。横になって眠れるようになり、友達もできた。いきつけの料理屋もあるし、図書館に毎日通

ってみたり、どちらかというと、私のほうが慣れた生活をしているかもしれない。

独り、と考えたところで思い出した。

確か、日本にいた仲間たちもこちらに来ているはずだ。シロウがそう言った。言葉も覚えたことだし、探して会ってみたい。そうして『向こう』にいたときのことを心から謝って、真正面から話してみたい。お互い裏切ることを疑わずに話せたら、どんなに印象が変わるのだろうか。そんなことを考えていると、どうにも彼らに興味が湧いてきて、会いたくなった。キチガイめ、って殺されるかもな、と笑ってみる。

「シルヴィオ少将」
「なに、まだ何かあるの」
「旅に出たいです」
「ばかか」

印鑑を投げつけられた。ついでに休暇届けも放り投げられた。

なんだかんだ言っても、彼は私が考えていることなど全てお見通しらしい。シロウいわく、今まで会いに行きたいと言わなかった事が不思議だったそうだが、忘れていましたなんて口が裂けても言えるわけない。退屈だったから思い出したなんてもっと言えるわけない。最近気がついたのだが、私はシロウよりもマイペースなのかもしれない。そんなことを考えながら休暇届けに印鑑を押した。

「休暇届けしても今月いっぱいは働くことになるから」

「……」

なんてことだ。

日常2

海賊といえば、無法者である。この国で誇られている海軍の将校をつぶせば、名声をあげられるらしい。そんなわけで、今、私がいる駐屯所に1つの海賊が押し寄せてきていた。

私のいる駐屯所は、小さな島国にある。都会化はあまり進んでいなくて、ところどころに森があったり、とにかく自然が多い。そのわりには不便しない施設はあるし、住んでいる人も皆穏やかで楽しい人ばかりで、私好みの島だった。この場所に配属されて本当によかったと思う。

海賊には少し同情する。彼らは運が悪い。シルヴィオ少将が治める駐屯所にしかけてくるなんて、とにかく阿呆としか言いようがない。知らないとは常に恐ろしいものだ。兵器のない世界で、シルヴィオは兵器だ、と私は考えている。私がアレと戦うことになったら、勿論即行で逃げるだろう。

彼はもちろん表立って（本人いわく）魔法を使う、なんてことはしていないが、ナイフを持って戦場に立っただけで兵器なのだ。チートってこのことか、と私はぼんやり考えていた。

兵士たちはシロウを敬ったり、怖がったり様々。この前なんか少し睨んだだけなのに腰を抜かしていた。いったいお前は私が知らないところで何をやったんだ、と訊きたくなったが、やっぱり聞けなかった。あいつは自由が好きなのだ。今度こそは、自分がやりたいことを今度こそ自由に、やっていきたいんじゃないだろうか。シロウも限度は弁えているだろう。……と、思いたい。

私は知らないふりで通す。知らない見ないどうでもいい。巻き込まれたくないので今日もバタバタする海軍の音を聞きながら、書類整理に没頭するつもりだった。それなのに。

「どうしてこんなことになったんだろう」

何の因果か、私は銃を二丁引っ提げて、軍艦を率いていた。

なんと今、シルヴィオ・ロウ・マルクは不在なのである。

この駐屯所において一番エライ奴は、本部に呼ばれたらしく、いない。そこで白羽の矢が立ったのは、その直属の部下……と、言われている、私である。私が女であることと、普段のやる気のなさから呼ばれるとは思っていなかったのだが、予想外だった。執務室のドアが壊されるかと思うような勢いで開かれた。

「どうしたらいいんですか、少将と連絡が取れません！」

必死の表情で叫んだのはたしか第一部隊の隊長だ。名前は覚えていないが、それにしてもその汗はなんとかならないのかな。しかし少将に連絡が取れないと聞いたところで、私にはどうにもできない。連絡が取れないなら私にも取れないだろう。どうやら隊長はかなり混乱しているらしい。

無線が壊れているのか、シロウが無線を持っていくのを忘れたのか……この場合は後者だろう。シロウの机から何やら援軍を要請する言葉がノイズと共に小さく聞こえてくる。

「あー……まあ、落ち着きましょうよ」

「落ち着いていられますか！少将はどこへ行かれたのです」
「本部。今日中には帰ってこれないと思うよ、だってあそこ、この島からかなり遠いし」
「そんな！なんとかしてくださいよ！」
「なんとかするのはあなたもでしょう」
「3隻も来たんですよう！ああ、もうどうにもならない、終わりだ……」
「あの、話聞いてる？」

絶望したかのように力が抜け、膝をつく隊長。なんだかバカバカしくなるというか、見ていられなくなって、そろそろ潮時かと羽ペンの先を拭いた。ゆっくりと席を立ち、それからクローゼットを開けて、海軍の可愛らしくないコートを引っ張り出して羽織る。ついでに腰のベルトにホルスターを引っかけて、二丁拳銃を持ち上げた。なんて懐かしい重さと冷たさだろう。ああちくしょう、初舞台が海上戦なんて聞いてないぞ。

ぼけっと私の動作を見つめる隊長に、少しいらっとして乱暴に言った。

「状況は？」
「え？」
「状況は？」
「は、」
「何人ヤられて船は何隻落とされたんですか？ほら、やりますよ」

一瞬ぽかんとした表情をした男に、追い打ちをかけるように告げる。

「今からの私の言葉はシルヴィオ・ロウ・マルク少将の言葉だと思

いなよ、役立たずのぼけなす野郎」

と、いうことが数刻前にあった。

私の望んだ平穏な海軍の暮らしは見事にぶちこわされてしまった。シロウが分かってこの状況にしたんじゃないかと疑うぐらい、誰かに八つ当たりしたくて仕方ない。

そんなこんなでシロウの職権を乱用しつつ、私はここに立っているのである。納得していない人間もいるようだが、頼みにきた隊長が悪い。

私は私の思うようにやるのだ。何年も前からそうだった。自分を押し殺して生きるなんて死んでいるのと同じだ。私だって、なんでもありの自称魔法使いに力を与えられている。この世界ではチートに変わりはない。軍艦の扱いはわからないので、軍艦は海兵に任せて、私は敵船に飛び移った。ああ、危ない。落ちるところだった。

海賊の船は二隻沈めた。残るは一隻だ。

向こうは状況が反転して焦っているようで、攻撃がひどく雑である。大砲なんて当たらない。なぜなら上手く海流を利用した場所に軍艦を置き、包囲したからだ。もちろんそんな器用なことをしでかしたのは私ではなく、焦っていた兵士である。なんだ、普通に戦えてるじゃないか。別にシロウや私に頼らなくてもなんとかなったんじゃないだろうか。

それにしても気持ちが悪い。いわずもがな船酔いである。吐きそうだけど吐けない私はよけいにイライラしているんだろう、周りの兵士がびくびくしている。私はシロウと違って怖くないのに、失礼

なやつらめ。

無線をつなぐ。

「ああ、きもちわるい……もしもし？聞いてる？敵船に大砲準備して撃ってよ、私は多分大丈夫だから。爆発するやつない？シロウが準備してなかった？ああ、そうそう、それね」

顔をあげると、海賊が私を見ている。というよりも凝視している。私は初めて海賊というものを見たが、いかにも不潔だった。顔が。こいつらが単に色々ダメなのだろうか、昔読んだ漫画ではかっこよかったのに。

まあ、私にとっては全てどうでもいいことだ。海賊の注目の的になるのも悪くない。

魔法使いに改造された銃の威力をなめるなよ、と笑いながら銃の安全ロックを外した。とりあえず燃やして沈めてしまおう。軍艦に指示を出すと、大砲が敵船を打ち抜いた。ぐらぐらと揺れて、脳みそと胃も揺れたような気がした。あ、吐きそう。負けるかも。

海上戦は本当に懐かしい。もっとも、もっと文明が進んでいたものだったが。炎を上げ始めた船、硝煙と血の臭い、怒号――――あんまり懐かしいものだったので、思わず笑ってしまった。ガトリングとか散弾が出てこないだけ、マシか。吐き気を抑えている私の顔は真っ青だ、きっとそうだ。

そんな弱っている私の地雷を踏んでしまったのは、前に歩み出てきたいかつい野郎だった。これが海賊の頭か、とじろじろと上から下まで見てみる。上半身裸で、傷がいたるところにある、歴戦の戦士みたいな体をしていた。

そいつは日本でも言われたことがない、今の今まで埋まって忘れ去られていた爆弾を踏んだ。

「お前がシルヴィオ少将か？なんだ、ちっせぇ女みてえな坊主じゃねえか」

――――なんだって？

「目ン玉くりぬいて眼科持ってけくそったれ！」

お前の目は節穴か！ささやかでも胸があるだろう、胸が！

失礼なことを言った海賊頭を、鉄で強化してあるかかとで、渾身の力を込めて蹴り飛ばした。大の男が海に落ちる、大きな水しぶきが上がった。同時に関心したような声が軍艦から聞こえる。この、役立たずどもめ、その筋肉は飾り物か。

ああまったく。もし魔法が使えたら、楽に船なんて吹き飛ばしてしまえるのに。

「暇」

事務机に突っ伏していると、温かい光が差し込んできて、ふわふわとした気分になってくる。ようするに眠気が襲ってくる。

「俺は暇じゃない」

お前も暇じゃない。と書類の束が飛んできた。痛い。
シロウいわく、これは数日前私が海賊を伸した報告書と、被害状況がひどいため、予算の変更の書類だ。なんでこんなことになったのかと考え始めたら、その渦中にはシロウがいることを思い出した。どうしてあんな被害が出るまで放っておいたんだ、と怒られたが、私の知ったことではないし、私がどういう行動に出るかなんてシロウは分かっていたはずだ。

「元をたどればシロウのせいじゃない？」
「なんでよ」
「使える部下置いといてよ、話にならないってほんと、漫画じゃないんだから」
「小さな駐屯所だから、本部がそういう人材送るの渋るんだよ。今度引き抜いてこようかなあ……」

そういうことか。通りで使えない奴らばかりだと思った。

「っていうか、なんで指示任せられるような人間を置いていかないの」
「アンタがいるじゃん」
「えー……」

頼りにされるのは嬉しいが、これはどんなものか。あれから私は他の海兵に認められた。すれ違う度に「この前はすばらしかったです」なんて、もう耳たこだ。勘弁してくれ。なんだかんだでシロウに向けるものと同じような視線を感じて嫌になる。私はただの補佐じゃなかったのか。

「これで俺の仕事も少しは楽になるね」

はっきり言い切ったシロウに羽ペンを投げると、ナイフを投げ返された。まったく野蛮で恐ろしい男だ。

「私は植物になりたい」

「食虫植物？」

「そして光合成をしながらのんびりと生きるんだ」

「話聞いてる？」

「え、嫌味だったの？」

「……あのな、お前いっぺん、」

「ドクターには正常だって言われた。この前の健康診断で」

シロウは頭をかかえて机に突っ伏した。なんで俺が振り回されてるんだろう、と大の大人の泣き言が聞こえる。なんだか勝ったような気分になって、頬がゆるむのを止められない。

「植物になったら自由に動けないよ。どこにも行けない」

ぼそっと悪態を吐くみたいにシロウが吐きだした言葉は、私の耳に届いて脳まで届くまで時間がかかった。何を言いたいんだろうか。

ふとシロウの目を見ると、少し暗くなっていた気がしたので、席を立った。いつか彼が私にしたように目かくしをしてみた。即座に邪魔、と言われたけど、彼はそう言っただけで、私を咎めようとはしなかった。

暫くそうしてみたけれど、あんまりにも反応がない。外から鳥の鳴き声が聞こえた。かちかちと、規則正しい時計の音がする。少し時間のずれた時計を見ると、そろそろ休憩の時間だった。

休憩しよう、と声をかけようと手を離そうとしたら、手首を掴まれた。

「うわ！」

まさかそんなことをしてくるとは思わなかったので、びくっとしたのは仕方ない。どうしたの、と訊いてもシロウは答えなかった。

どうしたものか、と掴まれた手首を見る。

冷え性なのか、ひやりとしている。意外とごつごつした手なんだな、こんなんでも男なんだな、と考えながら、シロウのくすんだ緑色をした目を覗きこんだ。そしてふと気付く。今まであまりじっくり見たことがなかったけど。

「シロウの目って植物みたいだよね」
「喧嘩売ってんの」
「自然な色できれい」
「……」
「生きてるみたい」
「……」
「聞いてる？」
「……」

黙ったまま反応がない。私は少し残念に思って、掴まれた手をはがす。ゆっくりと床に散らばった書類をまとめて、机に置きなおした。

それを静かに、シロウは見ていた。

「何？」
「……別に、」

唐突にぞわりとした感覚に襲われた。緑の目が私の肌を焼いているようだ、びりびりとするような、強烈な視線を感じる。なぜだか本能的にシロウから離れようと思った。なんだこの目。初めて見た目だ。この目に、見られたくない。

落ち着かなくて、きっとシロウは疲れているのだろう、そう思って紅茶を入れに部屋を出た。

ドアを閉める時に目が合った深い緑が印象的で、その日一日、忘れることができなかった。

日常３（前書き）

日常3

むせかえるような熱風が襲う砂丘に、その国はあった。ひとつのオアシスを中心に広がった砂漠の大都市――――ハルダ。

砂漠というものの、雨は降り、オアシスが枯れることはない。文化が発展しているというよりも、貿易が盛んなこの国は、大きな国と国との間にある中間地点だ。交通の便がいいので、国の面積のわりに人口が多い。

「……と、いうことだけど」

地図を片手に、私は手で顔をあおいだ。全然涼しくない、むしろ動いたことで余計熱くなった気がする。

「なんだこの暑さは……」

息を吸うのも吐くのも億劫だ。火傷しないように目深にかぶった長いローブをしっかりとはおりなおす。此処に来るまでに随分と砂ぼこりがついて汚れてしまった。靴の中は蒸れるし最悪だ。暑さで頭がどうにかなってしまいそうだった。暑いのが苦手とか、そんなことを言っているレベルではない。船酔いもようやくおさまったと思ったら、今度は熱中症になりそうだ。

こんなことならシロウも無理やり引き連れて来るんだった、と、いない存在にやつあたりしながら、私は王宮を目指していた。

行きかう人は笑顔だ。皆ローブをかぶっているけれど、それだけ

は分かる。決して治安が良いわけではないが、毎日が充実している、といった風だった。いい国だな、とは思ったが、暑いので私は住みたいとは思わなかった。

「すみません、王宮はどちらへ行けばありますか？」
「王宮？ここの大通りをずーっとまっすぐ行って、右手に見えるよ。そこからまた坂道が続くけどね。歩いて行くのかい？……旅人にしちゃ、格好が小奇麗だ。慣れてるの？」

商店を開いていたおばさんが、観察するようにこちらを見てきた。慣れてることもないが、下調べをして、万全の対策をしてきたからだろう。面倒くさいので、「ええ」と返しておいた。

「どこから来たんだ。東のオリンズ？それとも西のアキハ？」
「ずっと西のエイピアです」
「エイピア！また遠いところから来たね。海軍の駐屯地があるところだろう？……そういやエイピアといったら、あれだね。『強運の男』って知ってるかい。何でも、1年そこいらで少将に上り詰めたっていうじゃないか」
「ええ、中将になる会議も、すでに上層部でされているそうですよ」
「へえ、そりゃすごい。これで顔も性格もよけりゃ最高だねえ」
「あー……そうですね」

顔はまあまあいいですが、性格はよくないです。そう言いたかったが、話が長くなりそうなので、その場を逃げるように後にした。こんなところにまで噂が回っているなんて。悪目立ちしすぎじゃないだろうか。急激な昇進を嫌う人間は少なくない。実力で上り詰めたと知らない人間は、特にそうだ。
まあ、何を言われたところであの男が動じるわけもないので、どうでもよくなった。

息が切れかけた頃、やっと王宮の門の前に辿り着いた。門番が不審げに私に近づく。何事も最初が肝心だと思い、背筋をぴんと伸ばした。

「何か御用ですか？観光なら中には入れません」
「エイピアから参りました、海軍少将シルヴィオ・ロウ・マルクより遣わされた者です。……こちらが書状です」
「上の者に確認を取ります。少々お待ちください」

通された部屋は豪奢、とまではいわないが、品のある部屋だった。高級そうな家具がちらほらある。座らされたソファの上で、ぐるりと部屋を見渡した。客間にしては小さいが、私はこういったシンプルな部屋の方が好きだ。あまりに派手すぎる部屋だと、落ち着いて話ができない。

そういえばこの国の王は貧富の差が嫌いと言われ、彼が玉座に座ってからというもの、王宮もほとんど解放するという議論まで持ち出されているそうだ。思わずふっと笑みがこぼれた。誰か聞いていないか、と思ったが、見張り一人の気配もしない部屋にため息がこぼれた。

この国の王が一般市民と同じ思考回路を持つのは非常に好ましいことだろう、しかしそれと無防備は話が違う。とっとと暗殺されるんじゃないだろうかと少し心配になった。

「お待たせしました」

静かにドアが開けられた。

初老の男性と、そのそばに控えるようにした立つ若い女性。

どちらもよく見知った顔だった。迷彩柄ではなく、砂漠らしいローブを羽織った姿に、やっぱり笑ってしまった。2人とも、少し年を取った。もちろん私もだが、2人とも以前よりずっと気持ちが落ち着いているように窺えた。

「久しぶりです、陛下」

「ああ、止めてくれ、あなたに頭を下げられるのは気持ちが悪い。ここにはサトウと私しかいないのだから、どうか昔のように」

「……わかった」

サトウとこの国の王のアズマは、ずっと穏やかな笑みを浮かべている。この世界に馴染んだ顔で、幸せそうだった。何か充実したような、表情だった。アズマが私の前に座ると、サトウはお茶を持ちに部屋を出て行った。あの頃はアズマももう少し若くて、サトウなんかは子供だったのに、成長するのは早いものだ。

「驚いたよ、アズマが王になっていて、サトウがその秘書だって？探しやすかったけど、手続きが邪魔で仕方なかった。でも、よく似合ってるよ、この国の服は」

「ふふ、そうだな。私もなぜこんなことになったのがよくわからないんだが、私は王女と結婚することになってな」

「はあ、お前もやることはやるんだなあ」

「下品だな。あなたの海軍の服もよく似合ってる……埃と煤と血まみれの頃よりも、ずっと自信を持った顔をしている」

「……そう、かな」

そうだろうか。私にはよくわからないが、彼がいうのだったらそうだろう。確かにここでは、言葉に表せない安心感を持って暮らしていられた。海軍の正義なんて重くて背負ってられるか、なんて考えていたが――――私が今背負っているのは海軍の正義ではない。シロウの正義だ。

そういえばなぜ、私はずっとシルヴィオ・ロウ・マルクと共にいるのだろう、海軍に入ったから、自分でどこへなりとも行けるというのに。

そこから先は、考えてはいけない気がした。

ワゴンを引いたサトウが帰ってきた。

ティーカップをテーブルに置き、サトウは王の傍に立つ。さて、ここからが本題だ。私がここに来た理由を考えると、少しだけ緊張した。

「あの時のことで、今日はここに来たんだ。忙しいだろうに、時間を取らせてしまって申し訳ない」

私はソファから立ち上がり、絨毯の上に膝をついた。サトウは驚いた顔をして慌ててこちらに来ようとしたが、手で制した。私はゆっくりと頭を下げた。

「――――本当に、ごめん」

地面に頭が当たったまま、「せめてこれだけでも言いたかったんだ」

私にできることはこれぐらいしかなかった。あの時、仲間に命令

していたのは他の誰でもない、私と、シロウなのだ。仲間を殺したのも、私で、戦争に負けたのも私だ。私が負った傷も、アズマとサトウの傷も、仲間全員の傷も、こんなことで癒えはしないだろう。
戦うことを選んだことを後悔こそしていないが、ずっと罪悪感が喉をつっかえていた。シロウなんかは、誰にどう思われようがどうでもいい、勝手にすればいい、と私に休暇を取らせたが、私はそんな風に無関心になれなかった。この世界にきたからこそ、心に余裕ができた。

「やめてください」

やんわりとサトウが私の肩に触れた。こうやってサトウに触れられたのは初めてだ。やっと体を起こすと、ほっとしたように笑った。切りそろえられた髪がふわりと揺れる。ああ、汚れのついていない髪だ。ここは戦場じゃない。

「あなたが謝るなら、私たちも謝らなくてはならない。そもそもね、私たちは望んであなたについて行ったんだ。まだ未成年で、人を殺したこともない、ただの学生で、生きるために必死になってシルヴィオについていっていた君にだ」

アズマは苦笑した。どうか座ってくれ、と言われて、私はソファに腰かけた。
少しぬるくなった珈琲を口に入れた。少し酸味がある、初めて飲んだ味だった。

「情けなかったよ、大人だった私たち全員が、子供だったあなたに全てを押し付けて、シルヴィオさんに全てを託した。失敗があればあなただけが責められて、憎まれる……そんなことを黙認していた自分が情けなかった」

「……それは、」
「私とサトウも、こちらに来た時、あなたもいるんじゃないかと思って、最初は探していたんだ。だけど、シルヴィオの噂を聞いてね。彼がいるなら、あなたも無事だろうと思うことができた。予想だったけど、当たっていて本当によかった。私たちはあなたを憎んでなんていないよ、他のやつらだって、特に本隊に近かった人間ほとんどがそうだっただろう。あなたが思うより、統率がとれていたんだよ」

そんなことを考えていたなんて、知らなかった。なんだか目頭が熱くなった。本当の意味で、あの時の自分を許せたような気がした。疑心暗鬼に陥っていた私を、ちゃんと知っていてくれたのだ。私が、彼らのことを知らないだけだった。

「あなたとシルヴィオがいなかったら、ただ怖がって、死ぬだけだった。きっと悔いが残った。今はそんな気がしないんだ、自分のやれることをやれたんだって思うことができた。こちらこそ、本当にごめん、ありがとう」

思わず涙を零してしまった私の隣に、サトウが座り、優しく背中を撫でてきた。余計に泣けてきて、嗚咽を堪えながら下を向いた。
久しぶりに泣いた。泣いてはいけないような気がして止めていたものが、一気に崩れたように、涙が止まらなかった。2人とも、やっぱり優しかった。最初に会えたのがこの2人でよかった。2人が国を動かすなら、きっといい国になるだろうと思った。

「ただいま戻りました」

「早かったな、どうだった？」

また書類を溜めこんでいるシロウが、少しうかれたように訊いてきた。

私も答えるように笑って、自分のデスクについた。書類が増えたその机を見ながら、あの砂漠の国を思い返していた。

他の仲間も砂漠の国にいたらしいが、滞在時間が限られていたため、会うことができなかった。アズマかサトウが接触できたら、私が会いたいと思っていることを伝えておいてくれるそうだ。

そうしなくても、私はもう安心していた。私のことをどう思ってようが関係ない。彼らは思っていたよりもこの世界に馴染んで、暮らしている。皆、笑って穏やかな気持ちで、後悔もなく暮らせるなら、なんでもいいと思った。昔を思い出さなくても、生きて行けるのだ。私たちは生きている。

「もし俺が王だったら、あんな開放的にはしないけどな」

「シロウが王になったら独裁政治を貫くでしょ」

「政治が動かしやすいしなあ。信用できない他人に任せるよりは合理的だ」

「批判も多そう」

「今でも多いさ」

「そういやハルダでもシロウの話聞いたよ、随分話が大きくなってるね」

「ああ、おかげで紛争地帯に引っ張りだこだ……ついでに死んでくれりゃ結構って思ってるんだろうよ、中将さんはね」

シロウに指令を送る中将のひとり、名前は忘れたが、そいつはシロウをひどく嫌っているようだ。しばしば他国で起こる内戦にシロ

ウを戦場に送りたがるのも、無理難題押し付けるのも、まったく嫌味なことだ。シロウの管轄でない地域でも関係なし。きっと、中将の地位をシロウに追いやられることを危惧しているのだろう。しかし、そんなことをしているうちは小さい器だってことだ。すぐにシロウが中将の地位を獲得するだろう。

「そういや、他のやつには会いに行かないのか」
「気づいたんだけど、無謀だよね、数も多いし」
「……今頃？」
「と、いうことで、私自身が目立ってみることにする」

そして同じく会いたい、と思っている仲間が気付き、姿を現してくれることを願って。

「つまり？」
「次の紛争地帯の駐屯地への派遣、私に任せてくんないかな。簡単そうだし、怪我しなさそうだし、船上じゃないし」
「んー……できないことはないな。俺限定で指定されたわけでもないし、アンタは俺の傘下だし……よし、いいね、面白くなりそうだ。分からないことは俺の部下に訊いてくれ、俺はここで書類整理をしなくちゃならん」
「……溜めたのは少将だけの責任だと思います」
「黙らないと口ふさぐよ」

なんだか空気が不穏になったので、私はおとなしく口をつぐんだ。

日常４

「もしも子供ができたらどうする？」

非常に聞いてないふりをしたい質問だった。無視していると、……見られている。ただ見られているというよりも観察されている蟻の気分だ。仕方なく私は口を開いた。

「……誰の？」

いきなり何を言うんだろうか。シロウが何を考えているのか分からないのは日常茶飯事のことだが、聞き間違えたのかと思った。するとひどい言葉が飛んできた。

「俺の」

「一応訊くけど、誰と誰の間の？……ああ、やっぱいい、言わなくて」

頭が痛くなるような話になると思ったので、私は視線を本に戻した。私とシロウはそんな関係ではない。はず、だ。お互いに一番信頼できる相棒、だと思っているはず、なのだ。少なくとも私はそう思っている。だが私たちは常に、と言ったら変だが、昔の関係をずるずるとひきずって共に行動している。それ以上でもそれ以下でもない。

私たちの関係は一体なんなのだろうか。

恋人でもない。

友達。……ちょっと違う。

家族でもないし、知り合いという浅い仲でもない。

休暇という休暇がない軍で、のんびりした休憩時間。それが一気になくなったような気がした。「あつ、」紅茶を飲んだら熱くて火傷した。痛い。シロウがおかしそうに、笑った。むかついたので角砂糖を投げてやった。

「例え話だよ」

「知ってるよ……たまにシロウが何を思いつくかわかんない」

「いつものことだろ」

「自分で言うの？」

そうだなあ、と考えた。

ぱっと思いついたのは、以前子供が生まれたと喜んでいた海兵の姿。隣に可愛らしい妻がいて、少し頬を染めながら、真っ白なタオルに包まれた赤んぼうを大切そうに抱いていた。

幸せそうだ、と思った。

子供を産んだら幸せなのだろうか。それとも愛した人との生活の一部として、幸せを感じていたのだろうか。結婚もしたことがない私にはわからない。

そういえばそういう感情をすっ飛ばして生活していたような気がする。思い出したら背中がかゆくなった。随分自分もひねくれたものだと思う。昔の、誰でもいいから恋人が欲しいなんて言っていた時期が恥ずかしくもないのに、恥ずかしく思えた。

「うーん……想像つかないや」

「そう」
「でもまあ、生まれたら可愛いかも。金髪だったら綺麗だろうし、ハーフは可愛いし。シロウの性格がうつったら終わりだろうけど」
「それ聞き流せないんだけど」
「ひねくれた子に育ちそうだなあ」
「え、聞いてる？」
「聞いてるよ。だって本当のことじゃないの」
「……言うようになったよな」

純粋な子に育つとは到底思えない。

その前に、私はシロウに男性的な部分があることに驚いた。言わないけど、シロウは私の中で中性的な存在だった。一緒に過ごしてきた中で、「そういった」ことが一切目につかなかったからというのもある。欲が見えないというか、男らしくないということはないのだが。どうしてだろう。

だから私は安心して身を預けていたのだ。今までずっと。今はそうではないが、昔一緒に寝ていたこともあった。だが危機感なんて一切なかった。だからホモか性的興味がないのかと思っていたのだが、そうでもないらしい。よくわからない男だと思う。

「魔法使いだからかな」
「何の話？」
「いや……こっちの話」
「ふうん」

休憩時間が終わったので、本を机の上に置いた。引き出しから書類を出すと、シロウも同じように書類に向かい始めた。

それにしても暇である。書類整理なんて同じことの繰り返しだ。私が内容をざっと見て、シロウに渡す、印鑑を押してもらったら書

類を各所に届けに行く。すでに飽きてしまった私は欠伸を噛み殺していた。

そこにシロウの部下が入ってきた。彼が引き抜いてきた、という『使える』女性である。女の軍人は中々見ないので嬉しかったのだが、どうにも性格が合いそうになかったのであまり話していない。彼女の名前はイザベラ、２０歳で身長が小さく、うるさい。それぐらいしか印象になかった。

「失礼しまーす……、書類できてます？３班の医療器具についてなんですけど」

「たぶんこれ」

積んであった紙の中から数枚引き抜く。ひもで閉じてあったので分かりやすかった。

それを渡すと、イザベラは笑ってありがとうございますと言った。彼女の特徴はふんわりした空気、と言えば聞こえがいいが、悪く言えば騙されやすそうなこの純粋さがある。そういった人間とかかわることは少なかったので、むずがゆくて仕方ない。仕事は早いし、それだけ見れば問題ないのだが、ようするに私は扱いに困っていた。それを見てシロウは意地悪く笑っている。殴りたい。

イザベラが書類を持って、こんなのでも一応少将であるシロウに「失礼しました」と言った時だった。

またシロウが変なことを言いだした。今日は随分お喋りである。

「もしも夢を叶えたらどうしよう」

「……夢、あるの？」
「あるっちゃあるんだ」

イザベラが思わず「それってあるのかないのかどっちなんだろう」と呟いたのが聞こえた。まったくその通りである。
最近のシロウは頭がおかしくなっているとしか思えない。昔から馬鹿と天才は紙一重だというが、まさにこのことだろう。私は思わずため息を吐いた。会話のキャッチボールがうまくできないのはなぜだろう、シロウの耳は都合よくできていて、自分の言いたいことは言うくせに、自分の都合が悪い話は全てスルーするからだ。眉間のしわを伸ばす。

「夢を叶える前に、この書類に印鑑押してください」
「……ちぇ」
「あ、こっちの封筒にはサインを。もう、早くしてよ、中将さんに怒られるの私なんだし」
「アンタも目ぇつけられてかわいそうに」
「そうさせてんの誰だかわかってんの？……そろそろ出発の時間だから行くけど、寝ないでよ」

じとりと睨むと、シロウは肩をすくめて聞かないふりをした。

「さーて、仕事仕事」

この男どうしてやろう。はっと気がついたときには書類にしわができていた。あわてて伸ばして、分厚い本の下に敷いた。
イライラとしていると、その雰囲気にのまれた可哀そうな被害者のイザベラが部屋を出るタイミングを逃したようだ。あたふたしている。

「あの、いつもこんなんなんですか？」

耳打ちしてきたイザベラをしっしと追い払いながら、私は船に乗る準備をする。銃と、ナイフと、コートと、無線機と……。

これから遠征に行くのだ。

どうやら今の海軍は、周辺諸国に同盟を結ぼうとしているらしい。シロウが書いた書状をなくさないよう持っていかなくてならない。海軍がどうするなんて、理由なんていくらでもつけられるから私にとってはどうでもいいが、どうやら今回は遠いそうだ。ハルダよりも遠い。飛行機も何もないこの世界は本当に不便だ。空気が汚れていないのは好きだが、こういうときに嫌になる。これから船に乗ると思うと憂鬱だった。また暑かったらどうしよう。

「いこう、イザメラ」

「イザベラです」

「どっちでもいいよ。それではシルヴィオ少将、行って参ります」

ぴ、と敬礼してドアを開けた。気だるそうな顔をしたシロウはゆるく手を振っていたのを最後に、部屋を出た。

イザベラもあわてて部屋を出てくる。

「あの」

だだっ広い無駄に税金を使った廊下には人っ子一人いない。いつも人払いをしているのは自分だが、そのせいで孤立している。全く困ったものだ。静かな廊下で、イザベラが興味しんしんな目で私を見つめてきた。嫌な予感がして、眉間にしわが寄るのが自分でも分かった。

「シルヴィオ少将とあなたって、もしかして」
「頭に風穴開けてみようか。換気しよう」
「ごめんなさい」

彼女は思った通りの爆弾を落とそうとしてきたので、爆発するまえに抑える。この年頃の女はみんなそうだ。何を言いたいのかは分かるが、噂される身にもなってほしい。
特に好きな男性もいないので、困ることもないのだが……。そのせいで中将には睨まれるしいいことは、ひとつもない。いや、いい仕事に恵まれるという意味ではいいのだが。シロウのそばにいると、必ず無理難題が押し付けられる。それをなんとかすると、簡単に武功が手に入るのだ。

「どっかにあったなそういうゲーム」
「え？」
「あのさ、夢ってある？」
「……少将もそうだけれど、あなた言葉のキャッチボールする気あります？」

怒られた。どうやらシロウのそばに居すぎたせいで、私まで言語能力が疑わしくなっているようだ。似た者同士だと、昔から思ってはいたが。

「夢……っていうと、目標ってことですよね」
「ん？」
「だってそうじゃないですか。例えば将校になる、とか……叶えたい夢っていうのは、努力して叶えようとしますよね。それって、目標と同じです。夢物語……つまり妄想とは、少し違うと思います」

なるほど一理ある。
じゃあ彼女の夢っていうのは何なのか、少し気になった。
「じゃあイザベラが夢だと思うことは？」
「あたしですか。そーですねー……カッコイイ男の人と恋をすることかな！」
こいつやっぱり馬鹿だ。ちょっとでも言うことに関心した自分が恥ずかしい。あきらかにこいつが言ったことは、妄想、である。ついていけない。

夢。

私の当面の目標は、この島でのんびり暮らすことである。将校の位が欲しくなったときには、シルヴィオ少将を蹴飛ばすか。いや、それともその時にはシルヴィオ少将はすでに中将にでもなっているか。どっちでもいい。私がやることには変わりはないし、それに口を出すものもいない。

「イザベラって可愛いね」
「え！なんですか、いきなり」
「馬鹿な子ほど可愛いっていうでしょ」
「……それって馬鹿にしてます？褒めてます？」
「あ、忘れ物した」
「人の話聞いてますか！！」
「え？なんだっけ」
「……もういいです……何忘れたんですか？」
「海軍の証明書」
「ちょっとおおおおおおおお」

イザベラが泣きそうな顔でついてくる。おや、と思った。
これは意外と少し面白いかもしれない。

変化1

「生まれ変わったら何になりたい？」

街のはずれにある教会で、シスターが柔らかい声で私に訊いた。

静寂が包む教会は、私がよく訪れる場所だった。海軍に入ってから仕事をサボりたくて進んで島の巡回をしていたときだ。その時に見つけた場所。そこで初めてシスターと会って、私は落ち着きたい時にここに訪れることにしていた。訪れて3度目ぐらいからはもう打ち解けて、週に2回は教会に通っている。

ここにはシスター独りしかいない。ふるぼけた教会の椅子、オルガン、絨毯。天井のステンドグラスだけが今もまだ、美しく光を落としていた。シスターはまだ若い女性なのに、少ない寄付金だけでここで暮らしている。私や島の人々が野菜を持ってきたりするが、裕福とはとてもいえない。だけど彼女は死ぬまで、ここにいるそうだ。

「生まれ変わったら……？うーん、何がいいかな。鳥も天敵がいるし……」

「ふふふ、そうね。でもなんだってそうよ」

私はぼんやりと木の椅子に腰かけて、真っ黒な服を着たシスターを見る。

シスターは女性らしくて、きれいな人だ。腰まである髪は細く、ライ麦畑のような明るい金色をしている。菜園をしている手はすこしざらざらしているが、優しくて柔らかい。ふわりとほほ笑む笑顔

は大人びた、愛らしい笑顔をしている。きれいだった。本当にうらやましいぐらいきれいだった。ふと香る匂いは、私みたいに血腥くも硝煙臭くもなくて、花の香りがした。シスターはいくつか知らないが、２０代後半から３０代前半だろう。上品な喋り方をする、独特の雰囲気の女性だ。

だから、だろうか。まるで母親のような温かささえ感じるシスターに会いに、わざわざこんなところまで話しに来るのだ。母を求めているわけではないが、彼女といると落ち着いた。他人といて、優しい気持ちになるのは初めてのことだった。シスターには何でも話してしまうほど、自分が無防備になるのを感じている。

「生まれ変わっても、人間がいいかもしれない」
「あら、どうして？」
「人間が一番考える生き物だから。悲しかったり辛かったり、嬉しかったり楽しかったり、考えることをやめたくないから。それが欲しいから、やっぱり人間がいいよ。そしたらまたシスターに会えるかもしれない」
「嬉しいわね」

鈴の音が鳴るような優しい音で笑う。この笑い方が好きで、私はどうしてもシスターを喜ばせたくなってしまうのだ。決して私はレズじゃあなく、そういった意味では異性が好きだが、彼女が大事ということは事実だった。

「ねえ、わたしだけかしら？」
「え？」
「会いたいのはわたしだけ？」

そこでシスターの笑みが少しからかうようなものになったことに

気がついた。
しまった、と思ってももう会話は戻らない。眉間に皺がよっているのに気がついて、人差し指でゆるくほぐす。
「……他にも、海軍の仲間とか友達とか……ほら、魔法使いとかね」
「魔法使い？ああ、強運の男って呼ばれてる人ね。見たことあるわよ！あなたと同じでよく仕事をサボってるみたいね、煙草吸いながらふらふら歩いてるのを街で見たわ」
「あ、それ初耳。仕事じゃなかったのかあいつ。どうりで仕事が溜まると思った」
「うふふ、中々男前じゃない。好きなの？」
「なんでそういう話に持ってくのかなあ」
「じゃあ嫌い？」
「嫌いじゃないよ」

シスターが上品に笑った。
私は苦虫をかみつぶしたような気分になった。どうしてかは分からない。分かりたくもない。私とシロウはそんな関係じゃないと何度言ったら、彼女はわかってくれるのか。きっと誤解している。
それでも私はその誤解を解く言葉を持っていない。
その誤解を本当にする言葉も持っていない。
結局どうすることもできないのだ。

好き嫌いはあるが、恋愛なんてもうずっと考えたことがない。海軍にいい人はいないのか、とシスターは訊いてくるが、正直私にはよくわからない。優しい、いい人だと感じる人はいるが、それ以上にどう思えばいいのか。付き合ってみたらわかるだろうか。……や

っぱりやめておこう。面倒くさくなった。

「ねえ、恋愛っていいわよ。あなた若いんだし、しとくべきだと思うけど」

「シスターは恋したことある？」

「ええ……ずうっと前にね。あなたみたいにこの教会に通ってくれた人がいたわ。傍にいるだけで幸せだった。でもあの人はね、旅に出て行ったわ」

「別れたの？」

「いいえ、海に呼ばれたのよ。そしてわたしは夢を追うその背中が好きだった。反対はしなかったわ、わたしはここで待ってるって約束をしたの。このロザリオに誓ったのよ」

それからずうっと待ってる。

そのときのシスターの笑った顔は、今までで一番きれいだった。無謀だ、という私の言葉が出ないほどに。

もしかしたらその男はすでに死んでいるかもしれない、残虐な人だったかもしれない。シスターと約束した事自体が嘘だったかもしれないのに。どうしてそこまで信じられるのか、少しだけ切なくなった。

「海賊だったの。どんなのかは知らないわ、きっと……素敵な海の男になってる。夢を追い続けてる」

「寂しくないの？」

「寂しいわ。でもわたしだけじゃなくて、あの人もそうだもの」

「自信満々だね」

「ふふ……愛されてたもの、わたし。人を見る目はあるのよ？」

「知ってるよ」

思わず2人で噴出した。

「あなたもね、きっといい人が見つかるわ。ずっとそばにいてもいいって思えるような人が」

シスターの首からぶらさがっている、磨かれた銀のロザリオが、ステンドグラスの光に当てられて、きらきら揺れていた。

それを見たとき、デジャ・ヴを感じた。呼吸が止まって、目線が釘付けになる。体が硬直したように動けなくなって、脳も働こうとしない。心臓の音が耳に響いて、瞬きもできない。乾いてきた目を潤すために、瞬きをした。やっとこのとで長く息を吐く。

背中に汗が浮かんでいた。じっとりと濡れた掌を握る。

「シルヴィオ」

私はひどい顔をしているだろう。でもそれを見ている人は誰もいない。誰も、いない。どうして誰もいないのだろう。世界に私だけしかいないように、静かすぎる。ざらざらとした砂地はどこまでも続いていて、空が広く、何もない。私とシロウしかいなかった。

しゃがみこんで、彼の血がついている白い頬に触れる。温い温度もしなかった。震える冷やかな指先を絡めて、もう一度名前を呼んだ。ゆっくりと、かみしめるように。それなのに目を開けない。開けて、くれない。もう、開かないのだろうか。いつも意思が強く宿

っていて、直視したくないと思っていた、あのくすんだ緑がもう一度見たくて仕方なかった。息ができない、苦しい、どうしてだろう、”こんなこと”はいつかはあるだろうと考えてはいたのに。

それから私が何を言ったか、自分でもわからなかった。

何か言いたかったはずなのに、私はそれから何も言わなかった。どうしていいかわからずに、血濡れて硬くなった金髪をゆっくり梳いた。初めて会った時からいくらか老けた顔は、若くも見えるのに、ひどく大人びていた。子供みたいに笑ってもおらず、冗談も言わない。そこにいるのは魔法使いでもなく、キチガイでもなく、ただの人間だった。

「なにしてるの」

はっと顔をあげると、眩しい光が射して目の奥が痛くなった。ぼんやりとした頭であたりを見回すと、私は書類を下に敷いてデスクに突っ伏していて、どうやら執務室にいるようだった。時計を仰ぎ見る。朝ごはんも食べていないのに昼過ぎになってしまっていた。そうだ、早めに仕事をすましておこうと思って早朝に仕事を始めたのだった。慣れないことをすべきではなかったらしく、私は寝てしまっていたようだ。

「うわ」

汗でべったりと張り付いたシャツに気付いた。本当に気色が悪い夢だった、思い出したくもない。シャツが冷たくて気持ち悪い。脱ぎたい。シャワー浴びたい。ついでに夢に出てきた魔法使いを一発殴ってやりたい。あんな夢を見たのも、きっと昼間にシスターが言ったことが影響されたに違いない。ちくしょう。

「寝てた……」

「見ればわかる。俺の名前呼んでた……なんの夢？」

「忘れた」

にやにやとしている、２０代にも見える３０代の男を恨めし気に睨むと、なお笑うからもうどうしようもない。それを見ていたら、ふと思った。さっきのが正夢になったらどうしよう。これがいなくなったら、私はどうすればいいのだろう。別にどうするというわけでもないが、と考えてから、私は一体何をどうしたいのかわからなくなった。

「嘘吐き」

「……シロウ、」

「何」

「世界にシロウしかいなかったらどうする？」

「そんな夢？なんだ……面白くないな」

「何が」

「そうだね、俺しかいなかったら……か。つまらなくてすぐ死ぬかも」

なんともシロウらしくて苦笑してしまった。

願うならずっとシロウはシロウらしくあってほしいと思う。魔法使いで、キチガイで……あんな、人間みたいに死ぬなんて、

「……本当にどうした」

すっと頬に延ばされた手が、暖かい。あたたかかった。シロウは人間じゃなくて、でも人間だった。それが今分かった気がした。分かってしまった。

かっと熱くなった耳を覆うように、その手を振り払う。

ぽかんとしたシロウの顔に珈琲をぶっかけようと思ったが、その前に行動を読まれてカップを取り上げられた。「なにすんの」感情の読めない声がして、私は顔を見られたくなくてうつむいた。シロウの顔も当然見えない。私は書類を素早くまとめて、机のはじに置いた。

「お腹すいたから食堂行くわ」

それから逃げるように執務室を出た。

自称魔法使いの苦悩（前書き）

シルヴィオサイドの話です。
読まなくても差し支えありません、書き直すかもな話です。
変人設定の彼はただの苦労症になっていきます……。

自称魔法使いの苦悩

”そういう”感情がないのか、と言やあ、嘘になる。

最初からだ、そう、一番最初、生き意地汚い、戸惑いと悲しみとどこへやればいいか分からない感情が混ざりたくった、あの亜麻色の目を見たとき、俺は強烈にそれが欲しくなった。人間っていうものはどうやっても自分の感情を押し殺すものだ。過去さえも、泥の中に沈めてしまう。それが一切ない感情そのままの目を見たとき、俺の天秤はアッサリと傾いた。

もともと劣等感があった。自分は人間じゃあないってことは自分がよくわかっていた。

いわゆるファンタジー映画に出てくる主演みたいな役が自分の立場だっていうことも。

特別な力なんて、いらなかった。その力があったら便利で、なんでもできる、支配さえもできる。ただ、自分は他の人間と違うということが浮き彫りになって孤立するだけ。それが当たり前になったのは１０歳ぐらいになってからだった。ずっと閉鎖された無菌室の空間で、洗脳のような研究者の言い分を聞いて育ってきた。飯がうまいかどうか、寒いか熱いかも曖昧になっていた頃、俺は逃げ出した。

その研究所から這い出たのは正解だった。俺はそのとき嬉しくて仕方がなかった、俺はあの場所が嫌で仕方なかったんだということを知ることができた。

それから戸籍もない俺は汚い仕事をせざるをえなかった。薬をバイヤーに売ったり、人を殺したり盗んだり、悪いことはなんでもした。人を売り飛ばしたことだってあった。２０歳になったころ、資産も相当できていて、人脈も増えた。そのおかげで俺のほかに”俺”がいることを知った。ぞっとしたよ、殺したくて仕方なくなった。なんで俺がいるのに、”俺”がいるんだ。おかしい、おかしい、おかしい。

すでに俺は自分の力の使い方を知っていた。どんなことができて、何が必要で、どれだけ集中力が必要かなども。他人にわからない程度に使ってみたことだってあった。できるのは鉄から銃を作ること。モデルがあるものなら、ほとんど作れるようだ。身体能力は驚くほど上がる。大気を動かすこともできたが、その後高熱を出したのでもうやっていない。他は試したことがないからわからないが。

ある日新聞を見た。それなりに世界情勢を把握していた俺は、首を傾げることになった。

日本という島国と、アメリカとの軍事同盟。そういえば度々不自然なことはあったのだ。アメリカの政府側に探りを入れると、自分の言い分をあっさりと変え、何かにあやつられたように動いている人間が半数を占めていた。それを知った時、ああ、”俺”がやったんだろうと思った。なぜか”そういう”ことはよくわかってしまう、まるで双子だとでもいうように。

だが俺にはどうでもいいことだった。”俺”には関わりたくない、顔を見たら正気でいられる気がしない。だから知らないふりをする、俺だけが生きているここちを感じさせてくれよ。

それなりに裏を牛耳っていた俺をアメリカが見つけるのは予想し

ていたことだった。
軍に入ってくれたら不自由はさせない、そう頼みこまれて軍に入ることにした。不自由はさせない、というのに俺のメリットはどこからどこまでだろうか、なんて考えながらきまぐれに入った。もちろんもう一人の”俺”に絶対会わないようにしてくれと言ってある。なんだかんだで、俺は誰かが認めてくれる日常が欲しかっただけかもしれない。気持ち悪くて吐き気がしそうだった。

だからこそだ。
あの俺を睨みあげてきた目を見つけたとき、狂喜した。

とある街の市民を殺しておいてくれないか、なんて”操られている”上官に言われた時。日本に上陸した俺は小さい集落に連れてこられた。俺と一緒にヘリで連れてこられたアメリカ軍の兵士は顔を真っ青にしていた。市民を殺すなんて、ありえない、戸惑いが隠せないようだったが、結局は金で街に降りた。

ひとりで銃を片手に、田舎道を歩いていく。どいつもこいつも死んだ顔をしていた、俺の顔を見て逃げて、ギブ、ギブ、と叫んでいる。馬鹿、ギブなんて言ってもわからねえよ、何を”くれる”んだ？銃口を眉間に、そして躊躇なく人差し指に力を入れる。あいつを見つけたのは、同じことの繰り返しにそろそろ飽きてきた頃だ。

その町で初めて見た光景だった。

古ぼけた小さな家屋に入った瞬間、死臭を感じた。リビングを見ると、家族だろうと思われる女、男、もう一人若い男が転がっている。散乱している食事と、死体が泡と血を吹いているあたりを見ると、市民を殺すのを渋っていたアメリカ人が配給した毒でも飲んだ

のだろう。だが、そのときのアメリカ人が言っていたのは”若い女”に飲ませれば手出しはしないとか甘いことを言っていなかっただろうか？
ふと視線を感じて台所を見る。少女、といっても差し支えない女が包丁を持って突っ立っていた。敵意を隠さない視線で、ぞくぞくして仕方なかった。まさか、そう、この女、が、家族を殺してまで。俺を、殺そうとして、まで。

――――生きたいと思ったのか。このくそみたいな世界で。

俺はその時、確かに衝撃を受けた。
俺はあいつに手を差し伸べて、そう、生かしてみようと思った。アメリカなんかどうでもいいから、日本なんて滅んでもいいから、この女が思うように生きたのなら。俺は簡単にアメリカを裏切ってしまった、後悔なんてなくて、どちらかというとえらくサッパリとした気持ちだった。

そのときからずっと、俺の力を必要とした女は、必死だった。自分を誰に否定されようが、必死に生き抜こうとしていた、その本能に従った生き意地の汚さが、なによりも美しく思えた。

彼女に俺のことを教えたときもあったが、不思議なほど何も動じなかった。そう、彼女は俺を認めて、当たり前のように隣にいた。それがどれだけ嬉しかったか、こいつを手放すものかとさえ考えた。世界を移動しようなんて無茶な考えをしたのも、誰にも否定されない世界で、彼女と生きてみたかったからだ。他にも”戦う”ために必要だった彼女の仲間も、一緒に移動しようと思った、ああ、生きようとする人間の、なんて綺麗なことか。
いや、まさか本当に成功するとは思っていなかったが、もともと死ぬか生きるかだったし、まあいいだろ？成功したんだから。俺の

力も捨てたもんじゃあない。自分の命をベットするのは最高に楽しいが、他のやつらはともかく、彼女の命をベットするのは勇気がいるもんだ。

やっと落ち着いた海軍少将という位。同じ仕事部屋には、昔と同じように彼女がいる。少女という年齢から、もう女になってしまったあいつが。秘書まがいのことをさせるのは、まあ、無理やりだったことは否めないが、仕方ない。

こっちに来て、戦っているときみたいに無駄なことを喋らない、なんてことはしなくて。何でもない、自分の思っていることを適当に喋る時間が楽しい。たいていそれに文句が帰ってくるが、随分と毒されてきているみたいだ。マイペースな人間だ、と彼女は言ってくるが、彼女だって人のことを言えないほどマイペースなのを気づいていないのだろうか。

そういう感情がないのか、と言われたら、そう、嘘になる。嘘になるとも。

何年も一緒にいて、傍にいることで満足していた。だけどその先は？まあ、考えないこともなかった、とだけ言っておこう。行動にうつせないのは俺がとんだチキンだってことだ。

仲のいい部下と話していたら、据え膳で！？信じられない、男じゃない！と叫ばれた。あんなやつ減給してやる、くそったれ、好きで我慢してるんじゃない。

こう落ち着いてくると、彼女だって交友関係が広がる。もともとサバサバした性格だから女友達も、男友達だってできたようなのだ。今までは生き抜くことひとつを見ていた女が、色んなところを見だした。休憩時間になれば、ふらふらと散歩に出かけていなくなるし、いつの間にか任務に出かけていることもある。一緒にいることで安堵感を覚えていたのに、今は気が気じゃない。

俺は自分に彼女をつなぎとめるものを持っていなかった、あるとしたら随分長い時間行動を共にしていたことぐらいだ。嫌われてはいないが、もし彼女に男ができて自分から離れたら？不快で仕方ない。ちくしょう、だから彼女をつなぎとめられる何かが欲しくなった、今まで以上に彼女を求めることになってしまった。

時々自分がもの欲しそうな目をしているときがあるのだろう、彼女が怯えたように体をすくませることがある。くそ、彼女が男に慣れていたなら俺の感情に少しでも気づくかもしれないのに。ガキみたいなことを考えている自分に唾を吐きかけてやりたい。おびえさせることもなく、泣かせるようなこともしたくないし、逃げられたくもない。彼女は彼女が思っているよりも臆病で、弱くて、賢い人間だ。そう、ゆっくりでいい、周りから固めていけば彼女だって逃げられない、そう自分にいいきかせてしばらく経った。

月明かりしか照らすものがない暗い彼女の部屋は、お世辞にもきれいとはいいがたく、散らかっている。なぜか本がタワーのように積んであったり、カードゲームのカードが散乱していたりする。そして唯一きれいなベッドの上で、色気のかけらもないジャージのような服を着て、布団を蹴飛ばして寝ている、子供みたいな彼女に触

れる。

無理やりなんて乱暴なことはしないから、だから今だけは抱き締めさせてくれないか、生ぬるい体温の中に蕩けて、本当は目覚めて欲しいけれどこうして目覚めないまま、逃げずに、この愛おしさを、この自由な手の中で感じさせてくれよ。ほそっこいさわり心地のいい、肩までしかない茶色の髪をやさしく梳いた。

自称魔法使いの苦悩（後書き）

こういうのへたれっていうんですよね。

変化２（前書き）

お下品な言葉が出てきます。ご注意ください。

……言葉については、どうなんですかね、１５禁なんでしょうか……？

変化2

それからきまずかった。

といったのも、シロウが変にいつも通りすぎたからだ、シロウの手を叩いて避けるみたいに部屋を出た、なんてことを気にして、怒ってくれていれば素直に「ごめん」と言えたのに。喧嘩をしたわけじゃないが、喧嘩をしたら15分以内に謝らないと、タイミングを逃す、なんて聞いたことがあるが、全くその通りである。

シロウはいつも通り、だらだらと仕事をしている。気まずい、なんて思っていて、余計変な雰囲気を出しているのは私だけなのだ。この部屋の温度が低く感じる、シロウと一緒にいて、初めて沈黙が苦しいと思った。

うっかりタイミングを逃した私は、一体彼に何を謝ればいいのかも曖昧になってきてしまって、昨日のことは忘れようなんて考えている。そうしたら、私もいつも通りになれるのだから。卑怯な考えだろうか、ぐるぐると同じことばかり考えて書類に書きなぐってある文字に目を通したが、半分も頭に入ってこなかった。

「……で？仲直りに、やったのかよ」

長い髪をひとつにまとめている、切れ長の目をした、お世辞にも目つきがいいとはいえない20代後半の女性が、胡坐をかきながら

私を睨んでいる。

日本にいたころの仲間だった、数少ない女性のひとりだ。彼女は海軍に入り、同じ駐屯所で再会したのは最近のことだった。彼女のほうから話かけてきて、それからお互いの部屋に行ったり来たり、わりと仲良く過ごしている。名前はアイ、という可愛らしい名前だ、アイの喋り方はどこぞのスラングのようなのに。

今私たちは、教会に来ていた。ここなら誰も来ないし、いてもシスターか、シスターに会いに来る市民だけだ。シスターは今、菜園をいじりに外に出て行っている、気を使ってくれたのだと思うと申し訳ない。

アイと私は古い絨毯の上でお互いに胡坐をかいて、睨みあっている。ただ目つきの悪い女のほうは、にやにやと意地くそ悪い笑みを顔いっぱいに広げて、左手をわっか状にし、右手の人差指をその穴につっこんでいた。ちょっとまて、それはあまりに下品だろう、そもそも教会でするような話でもないから！シスターが聞いてたらどうする気だ、海に蹴落とすぞこのあま。

私はそれなりに卑猥な言葉を聞き慣れてはいるが、（だって男が多い軍内だし）自分に関係ある話となれば話は別だ、不快以外の他にない。何が楽しいんだか、アイはずっと嫌な笑みを浮かべている。

「一応訊くけど、何を？」

「ばーか！純情ぶってんじゃねえよ、シルヴィオとやったのかやってないのかって訊いてんだ」

「今までの話聞いてた？下品なやつめ、するわけないだろ、そんな関係でもない」

「……は？」

シロウとの関係を表す言葉があるなら、誰か教えてほしい。この微妙な関係って一体何なんだ。

ここでやっとアイはにやにやとした笑いをどこかにひっこめて、きょとんと眼を瞬かせた。それから難しそうに眉根を寄せて、私に顔を近づけてきた。内緒話をするように、ぼそぼそときまり悪そうに口を開く。

「あのさ、もしかして恋人じゃなかったわけ？あんなにべたべた四六時中一緒にいて？シルヴィオってゲイなの、それともお前が、」

「いやいや違うから。四六時中も一緒にいないし」

「じゃあなんで秘書まがいのことやってんだよ、おかしいだろ」

「知るか、いつのまにかそうなってたんだから」

「……ふーん」

仕事は生活ができなくなると困るからやめないつもりだけど、そう、そのつもりだが、最近は憂鬱になる。

シロウはいつも通りだ、いつも通り。それが”作っている”ようにしか見えないのだ、あえて私と距離を取っているような、そんな雰囲気をまとっている。だから私は気軽にシロウに声をかけられなかった、あんなふうなシロウは見たことがなかったから、どんな反応をされるか分からなくて怖かったからだ。

少なくとも私はシロウとこんなふうな雰囲気になったことがない、喧嘩なんかするわけないし、（だって建設的じゃない、喧嘩するくらいなら話し合うべきだ）しようとも思わなかった、お互いがフォローし合って生きてきて、お互いの嫌な部分も分かっていて、ずっ

とそうだと思いこんでいた。ようするに私は相当な馬鹿だった、シロウも私も人間だ、人の感情なんて他人が分かるわけもないんだから。

「さっきの話をまとめると、男として見るようになって驚いて拒絶したってことだよな、なんだ、甘酸っぱいな」

「誰も甘酸っぱい話なんかしてないだろ、それよりも離れてくれ気持ち悪い」

「照れるなよ、セニョール。あたしが協力してやんぜ？例えば色仕掛けなんかどうだ、大抵の男は許してくれるぜ。ついでに結ばれてハッピーじゃねえか、よかったな」

「アイもほんとに話聞かないよね、ちょっと！独りで自己完結するな、この卑猥女」

「なんだって、てめえがカテェだけだろうが！」

誘惑だって？んなもんできるわけないじゃないか！私のどこから色気を出せというんだ、どこから。

よくわからないが悔しくなって思わず後頭部を殴ると、アイが「なにすんだ！」と野性児みたいに飛びかかってきたので、私はアイの胸倉を掴んで押し倒されるのを抑えた。

そのままぎゃあぎゃあと子供のように取っ組みあったまま小汚い言葉を言い合っていると、鈴の鳴るような落ち着いた声が間に入った。

「あら、仲よしなのね」

ぴた。

まさに鶴の一声とはこのことだろう、私たちは反射的に口を閉じて、いつの間にか教会の入り口に立っているシスターを見た。シスターはこちらの気が抜けてしまうような、シスターらしい穏やかな

笑みを浮かべて、微笑ましそうにこっちを見ている。
「女の子なんだから、あんまり汚い言葉を使っちゃだめよ」
「はい、シスター！」
私は意気揚々と返事をしたが、アイは気まずそうな顔をして、シスターを視界に入れないようにしていた。アイも随分シスターを好きで、お得意のスラングで口答えさえできないようだ。
「それで、何があったの？」

シスターは私の話を聞いて、困ったように笑った。
「馬鹿ね、自分が悪いことをしたと思ってるんでしょう？」
「……まあ、うん」
「だったら、その気持ちをそのまま言えばいい、それだけでしょう。誰かが言っていたわ、誰かに相談するときには、もう答えは出ているけど、背中を押してもらうために話しているんだって」
は、と気がついた。そういえばそうだ、私はこの現状の解決方法をすでに考えていたじゃないか、ただ臆病になって謝れなかっただけで、逃げていただけで。私は、まずシロウに避けたことを謝らなくてはならない。情けなくなって、シスターから視線をずらすと、アイと目があった。
「謝ってよしとしてよ、てめぇは結局どうしたいんだ？」
「……何が」
「今までシルヴィオのことを男として見てなかったんだろ、それを

男として見るようになった、――――それで？」
「それでって、別に何もないけど」
「はあ？」
アイは私に何を期待しているんだろう。
私が驚いたことは、シロウが人外じゃなくてちゃんとした人間だったということに気付いた『自分に』だ。今まで同じ人間としてじゃなく、彼を自分と違うものとして見ていたことにショックを受けた。どうしようもなく自分が恥ずかしかった、シロウは自分が人外であることを何よりも疎んでいたというのに、一番近い位置にいる私は一体なにを考えていたんだろうと。
これからはちゃんと、シロウを見ようと思った。だから、彼に謝らなくちゃいけない。
そもそもいつ色ごとの話になったっていうんだ、この女の頭の中はきっとピンクに違いない。
また私につっかかってきそうになったアイを、シスターがやんわりと止めた。
「あら、そんな話だったの？わたしも聞きたいわ」
「ちょっと、アイ、変なこと言うから……！」
アイに助けを求めるが、彼女は機嫌を損ねたのか、盛大な舌打ちして仕事に戻る！と言ってさっさと教会を出て行ってしまった。
その行動の速さには脱帽だ、くたびれた海軍の制服の背中が扉に隠されて見えなくなったところで、私は大きくため息を吐いた。なんでこんなに今日は疲れるんだろう。

シスターは土のついた手をハンカチで拭いながら、古ぼけた木の椅子に腰かけた。ステンドグラスから落とされた光に当たって、シスターの金髪は色々な色を映している、どっかの女神みたいだ、キリストなんかよりもずっと信じられる。

「無理には聞かないけど、そうねえ、あなたはきっと色々な言葉を知っているのよ」

「言葉？」

「そう、たくさんの言葉を知るほど、疑うことを覚えてしまうものなの。これは違う、そういう意味に当てはまらないって。自分の感情をそのまま体で表す前に、頭で考えて、そして導き出す結果が成功とは限らない……自分の感情を疑って出した答えよりも、間違っていても自分そのままを出した答えの方が、きっと後悔しないわ」

シスターはそうやって、例の海の男を待っているのだろう、後悔せず、少しだけ寂しそうにずっとずっと、これからも。きらり、とロザリオが光を反射した。

シスターが言ったことは、重い話に感じられた。そうだ、昔必死になって、生きることだけ見て本能に任せるまま戦って、私はたくさんのものを失ったけど後悔なんてこれっぽっちもしていない。それよりも今、たくさんのものを手に入れて、死のうとせず戦ってよかったとさえ思っている。

「ねえ、そのままの気持ちで何も否定せずに思い出してみて。あなたは本当は、その時、どう思ったの？」

シスターの言葉は、たくさんの意味を含んでいるような感じがして、私はその言葉を頭で繰り返しながら、目を瞑って、ゆっくりと昨日のことを思い出してみる。

何を話したか覚えていないが、夢見が悪かったんだ。ぼんやり考え事をしていたら、そう、あの意外とごつくて長い指が、労わるように優しく私の頬に触れて、ゆるい熱が頬に溶けて、何も考えられなくなって、

思い返してみれば、シロウと一緒に仕事をすることになったのは無理やりだった、が、そこまで悪い気もしていなかったし、シロウがいつの間にかいなくなると物足りなくも感じないこともない、一緒にいると力が抜けて安堵するし、自分を偽らなくてもいいと思っていて誰よりも信頼している。で、それが男だと思ったら心臓に悪かったわけ、で。くすんだ緑の目も金髪もきれいだなーとか思って見てた、こと、も、あれなんだこれ自分に鳥肌立つんだけど。

「え！？」

カっと目を開く。

目に映るのはにこにこと薄い唇を弧に描くシスターと、静かな教会の蜘蛛の巣が張ったぼろい天井。

……いやいやいや待って、ないないない。待ってくれ頼むから、お願い勘弁してくれ。この感情は知ってる、１５ぐらいに体験した恋というモノだ、そういやこんなだった。そのときよりも気持ちがレベルアップしてる気がするんですが、大人になったってことですか。ああ、なんでだ、よりによって、よりによって自称魔法使い＝変人みたいな方程式が成り立つアレが恋愛対象！というか今頃か、私！

カ！と目を見開いたまま頭を抱えて蹲ると、シスターの上品な笑い声が聞こえて、今回ばかりは恨めしくなった。彼女はずっと知っていたのだろう、私の気持ちも、行動の理由も。私自身が気づくまで待っていたんだ、だからシスターの口からよく自称魔法使いの名前が出てきたんだ。

自分の馬鹿さ加減にいい加減呆れてきて、はたと気がついた。

別に自分の気持ちに気付いたところで、何も変える必要なくない？

一緒にいて、何も文句はないし、シロウの周りに女の気はあまりないし？

ゲイかもしれないし、今さら付き合いたい（ほぼ毎日一緒にいるのにお付き合いって何？）とか考えられないし、問題なくないか。

そもそもこの歳でお付き合いとかサブイボが立つ。シロウいくつになるんだっけ、ああ見えて３０代だよね。それ以前にキスとかしたいか、と言われてもなんだか想像がつかない、私とシロウが？ええええ、ないない。結局私はどうしたいのだろう、ああ、もう面倒くさいからこのことは保留にしようそれがいい。

私が今やるべきことは、仕事をしに帰って、シロウに謝ることだ。

「シスター、とりあえず戻るわ……」

「ふふ、またいらっしゃい。いつでも話を聞くわ」

にこにことといつも以上に嬉しそうに笑うシスターを複雑な気持ちで見ながら、古ぼけた教会を後にした。

自称魔法使いの混乱（前書き）

「自称魔法使いの～」は読んでも読まなくても話がつながります。

自称魔法使いの混乱

俺は何か間違ったんだろうか、どうしてこんなことになった、と頭を抱えた。

昨日のことだ、変な夢を見たと言って飛び起きた彼女に、触れただけだった。それぐらいのことは今までもしてきた、彼女が嫌がったそぶりなんて見たことがなかったから、やりすぎなんかじゃあない、はずだ。

無理やり秘書にしたことも、文句をたれていただけでそこまで嫌そうじゃなかったし、あそこまで拒絶されたことなんて今までにあっただろうか。いや、ない。手を叩き落とすことはあったような気もするが、もう話をすることなんてない、とばかりに背を向けられたことはなかった。あの時筋肉があるわりに細い腕を掴んで、引きとめて話を聞いたらよかったかもしれない。

あの時こうしていたら、なんてことを考えている自分に驚く。俺は自由人を自負してきたが（自己中心的ともいう）他人のことをこうまでぐるぐる考えているのも珍しいもんだ、これが俺の弱みってやつか。

こういうことは面倒くさくて仕方ないくせに、正直悪いとは思っていない自分がいる。

触れた彼女に叩き落とされた手を見る、正直あれは痛かった。ぼんやりとあの時の俯いた彼女の少し赤くなった耳を思い出して、あ

の反応はもしかして期待してもいいんじゃないだろうか、と考える。いやいや、自意識過剰だ、期待が何度裏切られたと思ってる。体調が悪かったか何かに違いない。

意味もなくため息を吐く。

昨日の俺を叩いたことを気にしていたか、それとも俺のことが気に食わないのか。そこさえはっきりしてくれれば考える必要もないのだが。嫌われたとして、全く理由が思いつかない。俺のやることに彼女が文句を言うことは多々あるが、嫌悪しているわけじゃないと分かっていた。しかも態度が変わったのもいきなりだったし、つまりあの時俺は何かを間違ってしまったのだろう。

さっぱりわからない。

俺が考えている間に、そそくさと彼女が出て行った扉を見つめるが、彼女が帰ってくるわけもない。またふらふらどっか行きやがって、理由を訊けもしない。

うだうだと悩んでいると、イザベラが書類を運んできた。あまりに仕事がはかどらないので、本部から俺が引きぬいてきた女だ。仕事はできて、人当たりもよく問題ない。彼女とも中々悪くはない仲のようだし、ただイザベラに問題があるとすれば、空気を読めないところだろう。

「わ、全然進んでないじゃないですか！」

叫び声が聞こえたが、今はそんなことしてる場合じゃないんだ、暇だけど暇じゃない。

溜まりに溜まった書類をちらりと見る。燃やしたらきっとこの机

はきれいになるんだろう、ちくしょう、やりたいがやれない、俺も面倒な地位についてしまった。権力を握ることは、国に色々口を出せて有利なことだが、この仕事だけは嫌だ。外の空気が吸いたくて仕方ない、こんな一人で仕事をする部屋にいても俺は全く楽しくないんだ。

イザベラが不穏な空気を感じたのか、すこし引きながら口を開いた。

「あのう、今日はお一人なんですね……？」

くそったれ、地雷踏みやがって。

じろりと睨むと、イザベラはひぎゃ！と蛙を踏みつぶしたような情けない声を上げて縮こまった。そのついでに書類が落ちて、ばらばらと床に散った。

いい加減自分も大人だ、やつあたりをするつもりはなかったが、どうもいらいらして仕方ない。仕方ない、のに、

ばん！と執務室には到底似合わない、遠慮ない大きな音を立てながらドアが開いた。イザベラがまた悲鳴を上げたのが聞こえた。ああ、乱暴な奴め。木製のドアが嫌な音を立てて壁に叩きつけられたのを横目に、入ってきた人物を見る。

俺のいる部屋に遠慮なく入ってくるのなんて一人しかいない。

えらくスッキリした爽やかな顔をした、今の今まで俺の頭を悩ませていた女は笑顔でこう言い放った。

「シロウ、手ぇ叩いてごめん！」

どういう状況だろう、これは。

彼女が一体何を考えているのか分からないが、おそらく昨日気に食わないことがあって、今日解決したんだろう。俺が悪いわけじゃなかったようでほっとするのと同時に、全てがどうでもいいことだったように感じた。何で俺あんなに悩んでたんだろう。

あまりの疲労感に俺は机に突っ伏して、彼女にふらふらと聞こえてる、と手を振った。俺も歳かもしれない。

傷跡1

あの後、自分の気持ちがはっきりしたせいでやけにスッキリした頭のまま仕事部屋に戻った。なぜかぐったりしていたシロウに謝ると、”いつも”通りに戻っていた。ふらふらと私に手を振って、疲れたように机に突っ伏しながら、「仕事やってくれ、お前のせいで溜まった」と不穏なことを言ってきた。あれ、いつもの空気だ、そのことにほっとして机についた。書類を運びにきたらしいイザベラがびくびくしていたのが気になるが、そのことは置いておく。どうせシロウが何かしたんだろう。

「愚問だろう」

しれっと言ったシロウに、中将は米神をひくつかせた。ああ、これはかなりキているな、と少し中将を不憫に思った。

イザベラが私と入れ違いに出て行った後（すれ違いざまに「助かった、ああ、神様」と神に心底感謝していたのは何だったんだろう）シロウに指令を送る中将が来た。海軍の中将は何人かいるが、彼の配属はここらしい。他の中将を見たことがないからそういうことなんだろう。部屋にある台所のコーヒーメーカーを出しながら、思わずため息をついた。

中将が本日持ってきた話題は、もちろん紛争地帯へのお呼び出しだ。最近はよく戦場に出てくるシロウを恐れて紛争は少なくなって

いたのだが。そううまくはいかない。彼らは彼らなりに、彼らの正義を持って立ち上がっているのだから。

これで中将がシロウを間接的に殺そうとして、何度めだろう。そろそろ中将も学習したほうがいいと思う。それともシロウに何か期待しているのだろうか、とも思ったが、それはないだろう。目が明らかにシロウを拒絶している。汚い異物を見るような目で彼を見ている。いい気はしない、だってそれは同じ人間を見る目じゃない。

まったく疲れる人だ。わざわざ本部から足を運んで、よくやる。

シロウは中将をからかっているようなそぶりをすることがある。海軍を追い出されると困るし、逆らうことこそないが、短気な中将を気に入っているのか何なのか、おそらく暇だからだろう、無駄話をすることがある。そういうことがあるとき、私は中将の脳の血管が切れないようにコーヒーを入れることにしている。

本部から小さな島に足を運んだ中将に、シロウは「この町で戦争が起こったらどうする気だ」と訊いたのだ。もしかしてこの町にそんな気があるのか、と思ったが、それはない。私は情報を人よりも手に入れているつもりだ。ならただのジョークだろうと思っていたのだが。

「俺がいなかったらこの町は終わるぞ、なあ？」

そのあと続いた冒頭の言葉。

今世紀最悪のジョークだ。そろそろシロウはこの部屋の空気を読んだ方がいいと思う。中将で遊ぶのは、こっちがヒヤヒヤするので止めてほしい。

「違うのか？俺がここから追い出されない明確な理由だろう」

「私に振らないでいただけますか」

私は中将など、特に親しくない人間がこの部屋にいるときはシロウに敬語を使う。それが気に食わないのか、少し不快そうな顔をしたシロウはおどけたように首をすくめた。

「冷たいな。そんなことよりも俺は気になっていることがあるんだ」

「……」

中将が私を睨み始めた。それも、人間と違うものを見るような目で、やっぱりいい気はしない。それでも怒りが湧いてこないのは、中将が周りをちゃんと見ることができない人だと分かっているからだろう。冷静に中将のことを分析しながら、またため息を吐く。シロウも適当に愛想を振りまいておけばいいものを、まったくどうにかならないものか。

私がシロウを無視していると、とんでもない言葉が聞こえた。

「最近俺は科学に興味が出てきたんだ」

だから仕事が手につかない。書類が溜まるし、最悪だ。これは俺に科学に専念することだと思わないか。

その言葉が私に向いているとは思いたくない。どうせ小説か何かの影響だろう、変わったやつだと思っていたがここまでとは。何に興味が出ようが彼の勝手だが、この場面で言うようなことでもないだろう。

中将が机を叩いた。シロウの机に置いてあった書類が宙に舞ったのを見て、あれを片付けるのは誰だと思っているのかと米神を抑え

た。あれ、最近こんなんばかりじゃないか？

「軍会議にかけるぞ！！」叫び声を聞きながら、コーヒーを入れる。とりあえず2人分。私はこの雰囲気の部屋でコーヒーを飲みたくない。あれ、ミルクがない。まあいいだろう。適当に砂糖を入れておこう。ぽいぽいと角砂糖を放りこんでいたら、何か背中にびしびしと視線を感じた。

「そんなに行かせたいなら、俺の部下に行かせればいいじゃないか」

どうやら私は耳がおかしくなってしまったようだ。おそるおそる、シロウを見る。向こうも、こっちを向いていた。

ほら、行ってきなよ。明らかに私に向けた言葉だ。

がっしゃん。

カップが盛大な音を立てて割れた。コーヒーが飛び散って大変なことになってしまった。砂糖を入れたからシンクも手も床もべたべたするし、片付けるのは面倒だ、シロウにやらせようか。じろり、とシロウを睨む。

――――確かに。

確かに私は、この世界で目立つためにシロウに仕事を回せと言ったことがある。だけど。

「……今回の紛争地帯、どこだか分かっていますか」

「知ってるさ、砂漠か。温度差が激しくて最も危険なところだ。水は大切にしろよ、お前は賢しいから分かっていると思うけど」

「……」

「さて、そろそろ研究室にお邪魔しようかな」

彼が行った後の軍の研究室の騒動が手に取るように分かる。この駐屯所で最も目立つ存在だということをはたして自覚しているのだろうか。例によって、開発途中の何かを壊してしまうかもしれない。面倒なことになるのは変わりないようだ。眉間をもみほぐしながら、シロウが部屋を出て行くのを見送った。

アレを止められる人がいたら誰か教えてほしい。もっとも、今の海軍にはいないようだ。

中将がどこか同情するような目でこっちを見ていた。やめろ、そんな目でこっち見んな。

「お前も、大変だな……」

「分かっていただけて何よりです」

中将もすごすごと部屋を出て行った後、私は一人寂しく部屋の掃除をすることになってしまった。遠征なんて面倒くさいから散歩でもしにいこうかな、と考える。

私がサボったところで何も困ることはないし、シロウの責任にしてしまえばいい。諸悪の根源はアイツだ。アレが軍会議にかけられたところで、上手く刑を回避するだろう。なんというか、まったく、口の上手い男だ。

ゆっくり休みたい、そう思ったら急に眠気が襲った。欠伸を噛み殺しながら考える。

これが終わったら、久しぶりにシスターのところに遊びに行こう、

クッキーでも焼いて行こうか。ドクターでもいい。マトモな人と話をしたい。シロウの言うことをあんまり無茶ぶりじゃなければ断れないのは、アレだ、なんで私はあんなやつのことが好きなんだろう。いや、本当に嫌なことなら断れるのだが。

とりあえず誰か私を労わってくれ。

結局私と、それに付き合わされる可哀そうなシロウの１００人ぐらいの部下が紛争地帯に行くことになる。だいたいおかしな話だ、私はシロウの補佐でしかないのに、政府は私とシロウをセットとして認識している。ダイビングのバディでもあるまいし、たいがいにしてほしい。いつの間にか私が紛争地帯で指揮を取っても何も言われないようになっている。

だいたいトチ狂った馬鹿な愚帝のせいで起こった、某国と革命軍の仲裁なんて馬鹿げている。勝手にやらせておけばいい、なぜならどちらの国も海軍なんかに割り込まれたくないと思っているからだ。割り込まれたが最後、海軍のひとり勝ちでもしてみろ、某国と革命軍は事実上海軍の所有物になる。

馬鹿馬鹿しい。何がって、

「遠征の準備して。砂漠のド真ん中でドンパチやってるイカレどもに、『戦争』を教えてやりに行くから」

せめてどちらかの領地に入ってから戦ってもらいたいものだ。

無線機の向こう側で聞こえる、アイの「またかよ！」という悲鳴と非難を聞き流して、どうせなんだかんだ言ったってシロウが部隊を用意しているだろうから、正門に向かうように、と伝えた。勿論場所を考えて服装を選ぶように、とも。アイは他の奴より、厳しい戦いを知っている、彼女がいれば何かと役に立つだろう。

後のものは物資補給員がなんとかしてくれる。ああ、こっちの戦いは楽だ。

シロウが地盤を固めてくれてあるから、私は戦うだけでいい。

ひとつ、私だけの命をかけるだけでいいのだ。

「後ドクターにも連絡しといて、帰ってきたらどうせ負傷者が出てる」

叫ぶような文句が聞こえるがまあ、いい。やっておいてくれるだろう。いくら口が悪くても歩く卑猥物でも彼女の頭はマトモだ。シロウよりは明らかにマトモだ。面倒なことになった、暑いところは嫌だし、それまでに船に乗らなきゃならないし、憂鬱で仕方ない。

シロウは私が”できない”ような場所には行かせようとはしない。それは補佐になってからすぐ分かった、私には比較的簡単な任務が回ってきている。これはいくらなんでも無理だろう、というものは全部彼が自ら出て行っている。私が行こうと言っても、絶対させてくれない。大切にされている、とか思わないこともない。いや、やっぱない。ないない。

本当に嫌と言えば、シロウはぐちぐち言いながらも自分で行ったはずだ。今回シロウに嫌だ、と言わなかったのには少しばかり理由がある。アイに全て任せるわけにはいかない、私がしなくては意味がない。

……シロウも、それだけ気が効くなら、もうちょっと揺れないような船を提案してはくれないだろうか。そうすれば気が楽になるのに。

くだらないことを考えながら、私は銃を手に取った。

割り込んだ海軍が、某国を制圧するのも時間の問題だろう。海軍に割り込まれたくなくて早期決戦を臨んだせいで、そろそろ物資もなにもかも足りなくなってくるはずだ。随分と生易しい戦争の仕方だ。可能性はつぶしておくべきだというのに。だから、そう、それまでに、だ。

そろそろ、某国と革命軍のトップが降伏する前に、教えてやらなくてはならない。それはもちろん各国への牽制だ、生易しいものは許されない、いっそ焼け野原に変えるぐらいに、ルールなんて存在しない残酷さを知らせなくてはならない。世界の国々へ、『海軍』にいる私がする、戦争のやりかた、を。

この町で戦争が起こったら、だって？シロウ、それこそ馬鹿馬鹿しい。この町で戦争が起こるはずもない、起こらせない。だから私は今回牽制しに行くのだ、私が住むこの島を攻めたらどうなるのかを教えるために。

私の望んだものが、この島に、全て在る。

それを誰かに唾を吐きかけられたら、正気でいられる気がしない。

傷跡2

簡単に言えば油断した、まさにそれだった。

昼は熱気で頭がどうかしそうで、夜は凍えるほど冷える、その繰り返しで思考が一瞬だけ、飛んでしまった。片膝の軸が揺れて、くらりとぶれた視界に飛び込んできたのは燦々と猛烈な熱を放つ太陽と、腹にトンネルを開けたアイが苦痛に顔をゆがめながらくず折れる姿。

最後の締めに一斉砲撃をしかけたところだった。

革命軍と某国はもう満身創痍で、こちらの人数がいくら少なくてもすぐに決着しそうだということで、砂丘にぽつぽつとある岩陰に隠れながら長銃を構えた。円形に残党を囲み、後ろを取られないような陣形を組んでいたので、失念していた。

まだ息がある者がいるということを。

私やアイのように、完璧に息絶えるのを確認してから次の標的に移る、ということをするのは慣れているからできることだ。場馴れしていない人間は、殺すことに慣れていない。人を殺すことにも、自分の心を殺すことにも。どうしても焦りが出て、”確実”を忘れてしまうということを忘れてしまっていた。

「アイ！」

誰かが殺し損ねた革命軍の男が、地面に倒れながらこちらに銃を構えていた。くそったれ、気を抜いていたせいで反応が遅れた。銃口の狙いを急所から避けるように体を捻った、ずどん、激しい衝撃

が肩口に訪れる。息が詰まる、横目に自分の血がきめ細やかな砂に散ったのが見えた。脳が痛みを訴える前にベルトのホルスターがら銃を一丁抜き、男に向けて引き金を引く。額から血を噴き出して倒れた。

一応仲間の後ろをざっと確認するが、全員息絶えている、大丈夫だ。こちらを窺うように見ながら銃を構えた仲間に、大丈夫だ、続けろ、という意味を込めて手を上げる。シロウのお陰で忠実になった海軍の兵士は、また作戦を遂行し始めた。これでいい。

落ち着いたところで、麻痺していた肩の痛みが、主張するようにずきずきとしてきた。傷口が燃えるように熱い、米神から一筋、汗が流れる。人が見ていなければべそをかきたいくらいだ。痛み止めなんて、救護班が待機している場所にしかない。くそ、まさかこんな簡単な任務でしくじるなんて。シロウになんて言われるか分かったもんじゃない。

「アイ、生きてるか」

持っていた細いベルトで肩口を止血しながら、アイに駆けよった。腹を押さえて膝をついているアイは、息を荒くしながら「内臓はイってない」と答えた。なら大丈夫だ、医者に見せる必要はあるが、まだ大丈夫だろう。

私はアイを砂の上に転がして、服をまくった。一発、鉛玉が横腹を抉ったようだ。ただ、変に血管を傷つけたのか、出血が多い。中に残ってないことを確認して、私は腰に下げてあったポーチから消毒液を出し、それをアイの腹にぶちかけた。

「ぁあああっ」

アイの体が飛び跳ねて、腕を痛みに耐えるように砂を叩く。私は続けて簡易救急箱を出して、その中から針と特殊な糸を取りだした。しばらくしたら体の中に溶ける、害のない物質でできている。素早く針に糸を通して、舌を噛まないようにアイの口にガーゼをつめこむ。そして針を傷口にあてがった。

麻酔がないのでかなりの痛みのはずだ、私も日本でのくせで、医療班が近くにいない時は自分で傷口を縫ったりするので、どれだけつらいか分かる。

アイが額に汗を浮かべながらもがいているのを見ないように、素早く傷口を縫う。しばらくひきつるだろうが、こんな熱気の中血液を無駄に流している方が問題だ。止血したら早く救護班の場所へ向かわなくてはならない。

私の体は、おそらくシロウに”もらった”のであろう力のせいで自己治癒能力が高い。出血もアイよりは少ないので、このまま戦ってもさして問題はないが、アイは違う。この暑さで体力が奪われたあげく、この痛みだ、戦うことに集中できないだろう。

弾薬の補充に来た海兵を呼び寄せて、アイを連れて行くように頼んだ。私はどうするかと訊かれたが、答えは決まっている。ざら、と熱風で砂が、唯一剥き出しの頬を叩く。肌を焼くような光に目を細めて、陽炎で揺れる敵を見据えた。

「もういいですか？」

医療器具の手入れをしている老人に声をかけると、しばらく考え

た後に首を振った。
ぼさぼさの白髪に、柔和な笑みを浮かべる男性は、この駐屯所のドクターだ。時々島の往診にも行く忙しい人である。

最初医務室は混雑していた。熱中症になり脱水症状を訴える兵士や、環境の変化で体を壊してしまった者が押し寄せ、ドクターの補佐の女性たちはバタバタとしていた。幸い大きな怪我を負ったのはアイと私だけで、３時間後に残ったのは重症の熱中症の兵士たちだけだった。
急に静かになった医務室は、薬品の臭いがして、この臭いが苦手な私は鼻が曲がりそうでこの部屋にいるのが嫌だった。
肩に巻かれた包帯を見る。どうも大げさな気がしてならない。包帯が巻きやすいように、と上の服を脱いでいる。胸にも包帯が巻かれているため、どんな大けがをしたのか、というような見た目になってしまっている。ふう、とため息を吐いたのが聞こえたのだろう、ドクターは困ったように笑った。

「服を着なさい、いくら貧相な胸でもここは男ばかりの軍だからね」

前から思っていたが、ドクターは失礼な人間だ。言われたくないことをずばずばと言ってくる。それももう慣れたので、怒る気にもならない。
ドクターは９０を超えているらしい。手が震えていることもないし、若く見える。いったいいつまで生きるんだろう。後５０年は生きそうだ。考えながら、キャミソールを着る。海軍の服を着ようと手を伸ばしたら、ドクターに取り上げられた。

「今日と、明日の仕事はやめだ。ドクターストップ」
「そんなこと言われても、もう大丈夫だよ、血は止まったし」
「馬鹿な小娘だ。そんなことをしてるから傷が残る」

ドクターは厳しい視線で私の肌を見つめた。

私の肌にはたくさんの傷跡がある。背中にこそあまりないが、腕はよく見ると細かい傷が残っているし、腹や胸にも痕が残っている。自己治癒能力の向上によって、よく見ないと分からないが綺麗な肌でないことは確かだった。後何年も経てばもっと薄くなるだろう、という傷もあるが、大きな傷も肩にひとつ、腹にひとつ残っている。いずれも私が自分で縫合した箇所だ、へたくそがするからこんなことになったのは分かる、が、私はこの傷を疎んだことなんてなかった。

そりゃ肌のきれいな女の子を見れば、うらやましいと思う時もある。

だけど、生きたくて自分がやったことだ。

私が今生きている証に他ならない。

シロウに言ったら、もしかしたらなくなるのかもしれない。でも私はそれを言おうとは思わなかった。小さなことだと私は思っているし、傷を見せるような服も着ない。このことを誰に言われようが、別に構わないとも思っている。

「でもさ、仕事溜まってるんだよ、頼むよドクター」

「だめだ。今日と明日は俺の治療を受けてもらうぞ。アイと一緒にだ、わかったな」

「……アイは？」

「お前の治療のおかげで出血もひどくなかった。縫い方は雑だったから縫いなおしたけどな。……麻酔なしでやったんだって？よくやるよ、まったく」

隣のベッドを見る。アイは眠っている、顔色も悪くない。いつもみたいな悪態が飛んでこないのは不思議なものだが、起きた時にどうせ痛かっただのどうのこうの、文句を言われるんだ、たまにはこんな静かなアイを見るのもいい。

「もうシルヴィオ少将にも言ってあるからな、仕事には行けないぞ」

ドクターはそれだけ言って、医務室を出て行った。静かな部屋には熱中症でうなされながら寝ている患者と、アイと、私だけが残った。看護婦たちは昼の休憩に行ったようで、姿は見られない。

今なんて言った？

私はベッドの上で暫く放心していた。シロウに言った、だって！

何言われるんだろう、怒られるんだろうか、呆れられるんだろうか、何も言わないだろうか。何も言わないことはないだろう、私らしくないミスだった、どうしよう。怒られるのは嫌いだ、またあの妙な空気になるのも嫌だ。動揺しているのが自分でも分かった。ああ、会いたくないなあ、今までシロウに与えられた任務で撃たれたことなんてなかっただけに、気まずい。撃たれましたごめんなさい次はないようにします、で終わることができるように祈った。

医務室のドアが開けられたのはそれと同時だった。

入口に見えた短い金髪に息を呑む。怒りを示したような強い視線をよこしてくる、くすんだ緑の目に、頭を抱えたくなった。

お見舞いに来ました、なんて雰囲気じゃないことは確かだった。

「シロウ……」

これは適当に謝るだけじゃ済まない。

傷跡3

シロウは医務室に入ってくるなり、ベットサイドにある椅子に音を立てて座った。

「……撃たれたんだって？」

想定していたより静かな問いだった。

きゅ、と不機嫌そうに細められた目を見ていられなくて視線をそらすと、頭を右手で掴まれてシロウの方を向かされた。捻った首が痛くて抗議しようと思ったのに、私は結局口を閉じるしかなかった。

シロウのそんな顔見たことがなかったから。

こっちに来て、彼の色んな表情に気づくようになった。向こうでは自分のことに必死で気づかなかったけど、困った時に髪を触るくせや、笑った時の見た目と違う柔らかい雰囲気とか。結構分かるようにはなったと思ったのに、この表情は見たことがなかった。眉根を寄せて、怒っているわけでもなくて、悲しんでいるふうでもない、ごちゃごちゃな顔。

「ひどい顔してるよ」

「お前は他に言うことはないのか。肩だけか、撃たれたのは」

「まあ……うん」

話を逸らそうとした私にぴしゃりと答えて、シロウは思いついたようにベッドの仕切りカーテンを引いた。しゃっという軽い音と共

に、空間が隔離されてしまった。シロウの低い声は嫌いじゃない。濁ってもいなくて、聞き取りやすい、が、今はなんだか聞きたくなかった。

「しくってごめん、でもほら、一応成功したし……そんな怒らないで、」

「俺はそんなことに怒ってるわけじゃない」

掴まれた頭が離されて、今度は両手で頬を挟み込むように私の顔を包んだ。頭を掴んだときより優しくて、本当にただ包んでいるだけ、というような強さだ。私は抵抗せずに、じっとシロウの顔を見ていた。

「今回のやつ、相手も弱ってたし、こんなことになるとは思わなかった。アイも連れていったようだったし、物資も不足がないように整えた」

独り言のように呟くシロウは、ゆっくりと息を吐いた。なまぬるい息が顔に当たって、ぞわりとしたので体を引こうとしたが、そうすると強い力で顔を押さえられてしまった。痛いな、と文句を頭の中で浮かべていると、背筋に鳥肌が立った。シロウが私の肩に触れたのだ。痛みこそもうないが、触れられるとは思ってなかったので硬直する。シロウはゆっくりと、壊れ物を触るような手つきで傷口があるあたりをなぞって、視線を私の首筋や、腕にやっていく。

以前からシロウに肌を見せることがなかったので、傷跡を見るのは初めてだったのだろう。シロウは眉を顰めた。

「傷が残ってる」

どうして言わなかったんだ、と言外に言われた気がした。

シロウは私の小さな傷跡を見ながら、自分が痛そうに顔を歪めた。
「小さい傷だったし、もう痛くないよ。大きい傷も自己治癒能力のおかげで、ひきつることもないし」
慌てて取りつくろうように言うと、シロウは余計に顔を歪めた。
シロウはよく分かっている、私がそうやって真摯に見つめられると動けなくなることを。緑の目に射すくめられて、いつも口の先から軽く出る言葉は何一つ出せない。
「そんなことは分かる。治療する器具や人がいなけりゃ、自分で縫わなきゃ死ぬってことも分かってる。生きるために傷なんて気にしていなかったのも知ってる、俺だって自分のは気にしちゃいない。こんなこと言ったってどうにもならないし無意味だってことも知ってる。だけどな、もっと自分を大事にしてくれよ」

頼むから、

その言葉を理解するのに、私は数秒かかった。
シロウはしくったことを怒っていたんじゃなくて、私のことを心配していたんだ。そう思ったら、ふっと力が抜けた。シロウが言った言葉を反芻して、脳に染み込ませる。それだけ嬉しい言葉だった。誰かに心配されるのは嬉しい、きっとシスターも同じように私を心配してくれるだろう。今、暗い喜びを、私は知ってしまった。
でも私はこれ以上彼を心配させたくはなかった、今みたいな顔を見れたのは幸運だ、だけど二度と見たくはない。シロウは子供みたいに、全てのことを楽しめているかのように、笑ってるほうがずっ

といい。この世界で私だけではきっと、道に迷ってしまうから、シロウが隣で笑ってくれていたなら、私はこの先もずっと後悔しないように自分らしく生きられるだろう。随分と私は彼に依存している、昔、彼の力を頼った時からずっと。

「生きててよかった」

囁くように言った言葉に、私は頭の中だけで返す。

シロウが生きていてくれてよかった。

「……で？」

「……でって、何？」

シロウが不自然に笑みを浮かべた。私は嫌な予感がして、シロウの手を払い落そうとしたが、傷口を掴まれて力が出なかった。痛くてうめき声を上げると、全く反省していない声でごめんね、なんて言葉が聞こえた。どの口で言うんだ、この野郎。シロウは今までの雰囲気をどこへやってしまったのか、すっかりいつも通りに笑っている。

「他に傷はあるのかって訊いてんだ、肩だけってのは本当なのか？」

「本当だよ、ドクターも言ってたでしょ」

「それは聞いてない。ドクターにはお前が怪我をしたんで仕事にはやれないって事しか言われてない」

何やってるんだドクター。肝心なことを言い忘れやがって。

「ちょっと見せろ」

見せろって何を、という前に、シロウは私のキャミソールに手をかけた。げ、と思わず声が出たが、気にせずにその手を思い切り抑える。

「ちょ、落ち着いてよ、ほんと肩だけだから、見る必要なくない？」

「何照れてるんだ、胸に包帯巻いてるだろ、見ても問題ない」

このくそったれ、お前が見るからいけないんだ。

これだけしれっと悪びれた顔もしない男も珍しい。シロウは本当に下心なんかなくて、ただ傷を確認したいというだけで、ひとつも悪いことをしているなんて思ってないんだから、しまつに負えない。そもそもドクターに治療を任せてるんだから、シロウが見なくたっていいだろう！

不意打ちのつもりでシロウを蹴り上げようとしたが、さすが少将、最近シロウより運動不足の私の足はあっさりと捕まえられてしまった。思い切りやったのに、ちくしょう。

「ぐえ！」

シロウに押し倒されて、硬いベッドに頭を打ち付けた。枕なんて上等なものは置いてないので、思い切り強打した頭がぐらぐらして目の前がちかちかと光った。それで力が抜けたのが悪かったのだろう、いつのまにかシロウが私の腹をまくっていた。さすがに胸のあたりまではめくらなかったが、複雑な気分で私は抵抗をやめた。もうどうにでもしてくれ。

シロウはまた顔を歪めた。

「ここ、自分で縫ったところか」

おそらく腹の大きな傷のところだろう。そこは一体どうやって傷ついたのかあまり覚えていない。3年ぐらい前に重機の破片が腹を裂いたところだったような気がする。大量出血で、内臓こそいっていなかったが、縫わなければやばかったと記憶している。そういえばその時に初めて自分の皮膚に針を入れたような。あれは痛くて壮絶だった、痛み止めを服用したがすぐに効くわけでもなく、自分の皮膚があれだけ気持ちが悪いと思ったことも他にないだろう。

「あー……まあ、結構昔に」
「くそ、言えよ。近くに俺がいただろ」
「それどころじゃなかったし、いや、あのさ、ちょっとどいて欲しいんだけど」
「もう少しここだけ自己治癒を高めるか、力抜いてろよ」
「馬鹿、いや、だからどいてって」
「うるせえ」

悪態を吐くシロウに頭を抱えたくなった。私はあたふたしながら、シロウをどかそうとするが一向に動かない。病みあがりなので余計力がでない。外の気配を探る、ちょっとそろそろやばいって。

「話聞いてよ、だからね」

言う前に、無情にもカーテンが開いた。しゃら、という音と共に現れたのは、腹に包帯をぐるぐる巻いたアイだ。私しかいないと思ってたのだろう、下着のまんまぼんやりとした寝起きの顔で、そこに突っ立っていた。

さすがのシロウも動きを止めた。ぽかんとした顔でアイを見ている。
どれだけ集中していたか知らないが、気配に気づかないってどんだけだ。

今の格好は人に見られると非常にまずい体制である。いわゆるシロウは馬乗りになっていて、つまり私が仰向けで、私の足はシロウに抑えられて、服を捲られているわけであって。

ドクターやシスター、イザベラならともかく、想像力豊かなアイのことだ、何を想像するか手に取るようにわかる。こんなもん見られた暁には、事情なんて関係なくからかわれるに違いない。こういう話が大好きな女だ、ああ、泣きたくなってきた。

「……」
「……だからどいてって言ったのに」

ぼそりと言うのと同時に、アイの奇声が上がった。
勿論、いいもの見た！という意味での叫び声だった。

自称魔法使いの焦燥（前書き）

傷跡３のシルヴィオサイドの話です。
注：シルヴィオの頭の中が直接的な表現はありませんが、あまり健全ではありません。

自称魔法使いの焦燥

ドクターが俺の部屋に来た時、嫌な予感がした。まさか、あいつに何かあったのだろうか、死んだとか言わないよな。自分の考えに背筋が冷えた。脳みそがかっと熱くなるのと同時に、無意識にドクターの襟首をひっつかんだ。

「――――何があった」

「そうキレなさんな。小娘2人がうっかり撃たれたらしくてよ、治療に専念させたいから今日と明日、仕事にはやれねえぜ」

「撃たれた？意識はあるのか」

生きているということに少なからずほっと息を吐く。自分がドクターの襟を掴みあげていることを自覚して、慌てて離した。ドクターは咳き込みながら、老人に向かって何するんだと悪態を吐いた。くそ、普通の９６歳はこんなピンピンしちゃいねえよ。苦虫をかみつぶしたような顔をしていたのだろう、にやっと笑ったドクターは息を整えて続けた。

「わざわざ言いに来てやったんだ。昼休みにでも行ってやったらどうだ？ついでに注意してやってくれないか」

「注意？」

「あいつ、アイの腹、麻酔なしで縫合してね。自分もえらく乱暴な止血をしててよ、休めって医者の俺が言っても言うこと聞かねえし、頼むわ。お前の言うことなら少なからず、あいつにゃ薬になりそうだ」

馬鹿か、あいつは。

ドクターの話を聞いてまず浮かんだ考えはそれだった。医療班を

何のために多めに連れて行かせたと思ってるんだ、今回の任務はさして難しいものじゃなかった。俺の優秀な部下も紛れ込ませたし、失敗なんてないと踏んでいた。いや、失敗こそしなかっただろう、ただ撃たれただけで。

俺にとっちゃ、そっちのが問題だ。国なんぞどうなってもいいが、まさか自分が送り込んだその場所で撃たれて来るとは想定外だった。くそったれ、俺が行けばよかった。

考えても仕方ないことは分かっている。後悔したって時間はどうやっても戻らない。

それにしてもあいつは一体どうして撃たれたりなんかしたんだろう、あいつは見かけによらず用心深い人間だ。熱さでやられたか、そこまで熱さに弱いとは。知らずと米神を抑えた。

「……わかった」

「それだけ大事にされてるなら、自分の身も大事にするもんだろうがなあ。向こうが鈍感だからなあ、苦労するだろ、シルヴィオ少将」

「うるせえよ、早くどっか行っちまえ」

「おお、怖。さて、撃たれないうちに退散するかね」

９６の老人が嫌な笑みを浮かべながら退室していったのを見て、無性に腹が立った。なんだってこんなジジイにはバレてて本人は全く気づいていないんだ！

医務室に行くと、薬品の臭いが鼻をついた。この臭いは好きじゃない、顔を歪めながらあいつが寝ているベッドを探す。意外と医務

室で寝ている兵士の数は少なく、すぐに見つかった。

彼女は俺の顔を見て目で分かるぐらい硬直した。会いたくなかったです、と顔に書いてあって、これもまた腹が立った。自分の顔がひきつるのが分かる。ちくしょう、もう少し嬉しそうな顔をしてみろ。頭を掴んでこっちを向かせた、一瞬痛そうな顔をしたが、あえて気づかないふりをする。

彼女の象牙色の肌の肩と胸を包帯で巻かれていて、大きな怪我のように思えたが、意識があるのは内臓までいってないからだろうと思った。そんな薄い服で軍内にいるなんて頭がどうかしている。何発穴を開けられたか知らないが、なんでお前は怪我なんかしてるんだ。見ていて痛々しい、こんな怪我をさせるために派遣したわけじゃなかったのに。こいつを部屋に閉じ込めたらこんな心配しなくていいんだろうか、と変な考えがよぎる。やめろ、そんなことをしてみろ、俺は確実に彼女に軽蔑される。彼女はいつだったか、自分らしく生きられないのならそれは死んでいるのと同じだ、と言っていた。そんな考えの持ち主が束縛されて喜ぶとは到底思えない。

「ひどい顔してるよ」
「お前は他に言うことはないのか。肩だけか、撃たれたのは」
「まあ……うん」

彼女が喋ったことで、ぐるぐると俺の頭の中を回っていた考えが抑えられた。それにしてもなんて失礼な言葉を吐きだすんだ、多分こいつ話を逸らそうとしてやがる。

とりあえず仕切りのカーテンを引いて、その場を隔離する。こっちのほうが外野がいなくて話やすい。彼女もそうだろう、多人数がいるときは俺とあまり話そうとしない。上司、というポジションだからということも勿論あるだろう。基本的にまじめで、面倒なこと

に巻き込まれたくないと思うタイプの女だ。

「しくってごめん、でもほら、一応成功したし……そんな怒らないで、」

きまずそうに彼女が口を開いた。視線を合わせたまま、言いづらそうに喋る。そんなことを気にしていたのか、俺にとっては作戦が成功しようがしまいがどうだっていいんだ。こいつは俺が何を気にしているのかさっぱり分かっちゃいない。思わず彼女のやわらかい頬に触れた、今度は拒絶されなかった。こんな女みたいな感触しやがって、ちくしょう、なんでこいつは女なんだ。

顔を近づけたら、驚いたように彼女が身を引く。そんなこと許すか、とばかりに強い力で顔を抑えると、大人しくなった。キャミソールなんか身につけているせいで剥き出しの、包帯が巻かれた肩を片手でなぞる。筋肉こそついているが、柔らかい、俺と違う肌だ。傷つけたやつがこの場でいたら拷問でもしてやったのに。腹の底でどす黒いものが渦巻いているのも、この女のせいだ。

女らしい細い首、鎖骨、指先に視線をやっていく。ところどころに、小さな傷跡が残っていた。彼女がこんな薄着をしているところは、今日初めて見た。いつも男みたいな色気のない服を着ているせいで、こんな傷跡が残っているなんて知らなかった。言えば治すこともできたのに。そもそもなんで俺は女ひとりの体さえ守ってやれていないんだ。

「小さい傷だったし、もう痛くないよ。大きい傷も自己治癒能力のおかげで、ひきつることもないし」

取りつくろうように言う彼女の目をじっと見つめた。こいつは他人に見つめられると、どうすればいいか分からずに困ったように動かなくなることを、知ってる。思った通り、彼女は口を閉ざした。そう、それでいい、俺に取りつくろわなくてもいい、お前はそのままでいいんだ。我儘ぐらい言って、俺を困らせて、少しの優越感に浸らせてくれよ。

「そんなことは分かる。治療する器具や人がいなけりゃ、自分で縫わなきゃ死ぬってことも分かってる。生きるために傷なんて気にしていなかったのも知ってる、俺だって自分のは気にしちゃいない。こんなこと言ったってどうにもならないし無意味だってことも知ってる。だけどな、もっと自分を大事にしてくれよ」

頼むから、

この言葉の無意味さを、俺はよく知っていた。

これを言ったところで、彼女が生きようと思うことに変わりはなく、傷はこれからも増えたり、癒えたりするんだろう。だけどそれでも、今日みたいな不安はもうこりごりだ。暫くこの女を遠征には行かせない、しっかり傷を癒してからだ。それまでは嫌だ嫌だとわめくデスクワークに徹してもらおう、それがいい。

唐突に彼女を抱きしめたくなった、ここに居ることを肌で感じたい、それができない自分が嫌になる。

こうやってカーテンで仕切ってあって、誰ひとりそれを見ることは叶わないのに、彼女だってきっと今なら抵抗しない、それなのにできない俺はやっぱり相当のチキンだ。もし拒絶されたら、これからどう接していいかわからなくなる。

彼女が逃げないように、外堀から埋めていっている、今のところ阻害するものはいなくて順調だ。順調なだけに、今、それを自分で壊すわけにはいかない。ふう、と重い溜息を吐いて衝動をやり過ごす。

ところで。ふと思いつく。

今の今まで自分の傷を見せなかったやつだ、本当に包帯が巻いてあるのが見える肩だけなのか？腹が撃たれて、内臓に傷がついたとか言わないよな。考え出したら止まらなくなった、だったら見れば分かることじゃないか。どうせこの女は言っても答えないだろう、変なところで頑固なやつだ。

服に手をかけると目に見えて慌てだしたので、少し呆れる。そうやって俺のことを男として見るんなら、普段からそうやって見てろよ。信用しすぎだ、こいつは。

確かに俺は今こいつに手を出す気はないが（さすがに医務室でやる気はない、俺はいたってノーマルな考えの持ち主だ）いささか異性に対して無防備じゃないだろうか。こんな薄い服で軍内をうろつく気だったのなら一発殴ってやってもいい、いくら小さい胸だからといって（本人は気にしているが、そこまで小さくもなくちょうどいいと思うんだが。豊満すぎるのよりはずっといい。だいたいCの75ぐらいじゃないか？）見せびらかすなんてとんでもない、女としてどうかしてる。医務室のやつらが全員寝込んでいてよかった。

俺を蹴ろうとか殴ろうとか、抵抗してくるので押し倒して彼女の力を抑えつけた。この体制だとあまり力を出せないのが分かったの

か、彼女は抵抗をやめて、勝手にしてくれという雰囲気を出し始めた。勝手しているのはどっちだこのあま。無駄に心配させやがって、元気じゃないか。

服を捲ると、大きな傷が目に入った。思わず息を呑んだ、こんな大きな傷いったいどこで作ったんだ。へたくそな縫った後も生々しく残っている。この傷跡から見て、何年も前の傷だということは分かる。だったら俺も近くにいたはずだ、自分で縫うなんて馬鹿みたいなことしてんじゃねえよ。なんで俺は気づかなかった、頭が痛くなった。他のやつの傷なんて見なれてるし、どうでもいい。人が違うだけでこうも動揺するなんて、俺はどうかしてる。

なんで痛みを我慢する必要がある、ぴーぴー泣く女は嫌いだ、でももう少し俺に縋ってもよくないか。この負けず嫌いめ。

別に彼女に傷が残っていたって構わない、それは彼女が生きた証拠になる。

だけど怪我はしてほしくないと考えるのは我儘なことなのか。無意味なことなのか。

もしかしたら腹の部分だけ自己治癒能力を高めたら傷がもう少し薄くなるんじゃないか、と思って手をかざす。ヒトの細胞をいじくるのは非常に集中力が必要だ、昔の俺ならまず使えない。何か彼女がわめいているが知ったことか。こっちのが重要だ、と、思っていたのだ、が。

いつの間にか開け放たれたカーテンの先に、アイがいた。

ちょっと、いつの間にそんなとこにいるんだ、全く気づかなかった。アイは寝ぼけた不細工な顔で、ぼんやりとこっちを見ている。あまりに唐突なことだったので、反応が追いつかない。待ってくれ、俺はどうするべきだ。

「だからどいてって言ったのに……」

ぼそり、と非難の声が自分の下から聞こえたと同時に、アイが奇声を上げた。

ちょっとじゃなくて、かなり行動を誤ったかもしれない、と俺はひどく後悔した。

怪我のことで頭がいっぱいになっていたが、そういえばこの体制は健全じゃないな、と。

このことで暫く俺は、主にドクターにからかわれることになる。

噂話1

あたしがよく来る小さな教会には、驚くほど柔らかく笑う綺麗な修道女がいる。歳なんか感じさせない、妙齢の女性だ。訪れればいつも優しい笑顔で迎えてくれる、あたしはそれが好きで、きまぐれに通っている。あの女だってそうだ、このシスターの雰囲気に毒されてなのか、随分丸くなった。

日本にいたときは常にピリピリして、誰も信用していない、というギラギラとした野性的な目をしていた。触れれば切れそうなほど鋭くて、誰よりも生きようとしているようだった。その生きたい、という気持ちを、喋ってもいないのに感じて、あたしはそれにどうしてか魅かれた。

あたしは色んな人に裏切られて、できないくせに死にたい、そっちのが楽になれると思うこともあった。だけどあの女も、そんな暗い過去を持っているはずだった、それなのに、あの目。女とか男とかそんなものを感じさせない、生きることだけを見て戦う姿を見て、同じ人間とは思えなかった。それもシルヴィオのおかげだったんだろうか、あたしは知ることができないが。あの女のおかげで、あのクソみたいな世界で生きたいと思うことができたのは事実だった。

こっちに来たときはビビったが、あたしは日本のときでもわりと中枢にいたので、シルヴィオの存在と、その不可思議な力について知っていた。どうせあの野郎の仕業だろう、と思った。そうでなくとも、あたしを知らない人間ばかりってのは案外心地よかった。誰も殺しにこようとなんかしないし、信頼していたやつが急に裏切ることもない。ガラにでもなく神に感謝したのを覚えている。

丸くなった女の話に戻る。
再会した時、これは誰だと思ったのは仕方ないことだ。
「だってよ、目が合ったとたん笑ったんだぜ。笑顔なんて初めてみたっつの、似た誰かだと思った」
「そうなの？わたしはそのピリピリしてるとこを見たことがないけど、教会に初めて来たときには大体あんな感じだったわよ？」
「あー、じゃあシルヴィオのせいか？」
シスターは考えるように俯いている。いくつなのか知らないが、まだまだ男を落とせそうだ。それでもシスターは、シスターを放っておくくそ野郎を待っているんだろう。

あたしはシルヴィオ、という男をまじまじと真正面から見たことがない。
日本にいたときだって、後ろ姿や遠目にしか見たことがなかった。印象で言えば、気味の悪い金髪の外人。なんで日本に協力してるのかと疑ったこともあるが、あいつは昔っからあの女しか見ていない。アメリカも日本も他の奴らも見ていなかった。だからあたしのくだらない疑いはアッサリ晴れてしまった。
どんな男なのかよくわからないが、あの女が時々愚痴を零すのは大体シルヴィオのことだ。仕事が溜まる、無理に遠征に行かせる、本部に行ったときに無線を忘れて大変なことになった、とか。それを聞く限り、なんというか、普通の（かなり面倒な）上司である。
その男があの女を変えた、と？

この世界に連れてきてまで。

それを聞きゃあ面白い話だ、あたしだって思う存分からかうことができる。だけどあの女とシルヴィオが付き合っているわけでないと知ったのは少し前。一緒の部屋で仕事をするなんて、普通はあり得ない、それなのに移動もなく一緒に働いている。だからシルヴィオが無理を言って、恋人として一緒にいるのかと思っていた。

――――まあ、無理を言ってあの女を同じ場所で働かせているのは本当のようだが。

あの女の気持ちがシルヴィオの行動についていっていないだけで。

付き合っていない、と知ってから、少し気になって調べてみた。なんで一緒にいるんだろう、日本で親友か何かだったのかと。

……なんというか、知らなかったらよかったという気分になる。思い出したら背筋が寒くなった。ああ、恐ろしい。そんなわけで、あたしはシスターに癒されに来たわけだ。

「わたしはお似合いだと思うわよ、お互いが必要としているし」

「いや……どう考えても片方の比重が重すぎるだろ」

「まあ、そう思わないこともないけど」

シスターが困ったように小さく微笑んだ。ああ、癒される。

あの女とシルヴィオの話に戻そう。

シルヴィオはあの女と友人とかそういう間柄でいたくないようなのだ。なんと海軍本部の人間に直接、シルヴィオがあの女を移動さ

せる気はないと堂々と言ったらしい。シルヴィオの力で海軍は大きくなっていく手前、その我儘を通さないわけにはいかない。裏切られたら事だ、女一人で大人しく少将の座についているなら万々歳、ということらしい。

「ここまで言えば分かると思うがシスター、これは重いというか腹黒いというか、あいつぁ策士だな。まず周りから固めていってるみたいでよ、目をつけられたあの女に同情するぜ」

うまく海軍から逃れられないようにしている。表だって束縛こそしていないし、自由にさせているように見えるが、水面下ではそうではない。この島の駐屯所でも、あの2人は1セット、という風にとられている。これもどうやったか知らないが、うまくシルヴィオがそう思わせているということだ。

あの女が好きそうな人材を海軍に置いたり、この島の駐屯所で働くことになったのも、あの女が好きそうな島だと考えたからだと、シルヴィオとよく話すらしい部下に聞いた。なるほど、どこかに執着があれば、あの女がこの島から出たいと思うことも少なくなる。こりゃ少将は重症だな、と頭が痛くなった。あの女がシルヴィオを嫌ったとしても、この島から出す気はさらさらないんじゃないだろうか。

ちなみにあの女に”そういう”目を向けていた野郎は……やめておこう、口に出したくない。まあそういうことらしい。出してシルヴィオに睨まれたくもないし、あの女に告げ口はしない。あたしは遠巻きに見守ることにする、まったく、関わりたくないコンビだ。

「でも、あの子、少将さんのこと好きみたいよ？恋愛的な意味で。この前アイが帰った後に聞いたの」

「はああ！？あたしが帰った後にそんなことがあったのかよ！帰ら

なきゃよかった！」
「うふふ、アイが言う様子だとまだ伝えてはないみたいだけど」
「伝えてたらもっとひどいこと耳に入ってきそうだわ……甘い……くどいことが……」
「あなたも噂話好きねえ」
「シスターはこんな怖いことが噂に聞こえるのかよ」
「……あの子のぼやきを聞く限り、辻褄は合うけどねえ」

両想いだって、そんな気がしてたが、自覚したのがその時だったとは。くそ、そんな面白いことがあったなんて！惜しいことした。

それにしても甘い、なんてこった、妙に甘い話しにぞわぞわとして地団駄を踏んでいると、はっとシスターに教えたいことを思い出した。これはいいネタだ、どうせ事故かシルヴィオが暴走したんだろうが、どんな理由があったとしてもあたしは構わねえ。

「そういえばこの前シルヴィオがあの女を押し倒してるとこ見てさ」

そう、このネタだ。昨日の話である、起きたあたしが見たものは、あの女をからかうのにピッタリのネタだった。あの時初めてシルヴィオを近くで見たが、なんだ、中々男前じゃないか。いいのは顔だけだな、あたしは勘弁だわ。だけどあの女も隅に置けない……同情もするが。

驚くかと思ったのに、シスターはやっぱり穏やかに微笑んだ。

「あら、お熱いわね」
「……たまにシスターが一番強いんじゃねえかって思うよ」
「無理矢理じゃなかったらいいんじゃないかしら」

悪意のない顔で微笑んでいるシスターを見て、なんだかげんなり

した。この人はからかえない種類の人だ、ああ、あの女来ねえかなあ。からかうとすぐ言葉を返してくるので、話していると楽しいのだ。これもこの世界に来てからの発見だ。

「でも少将さん、そんな回りくどいことを本当にしてるなら、そうそう手を出せないんじゃない？」

自分が好かれてる自信がないから真正面からぶつかれないんでしょう、とシスターが言ったのを聞いて、確かにそれもそうかと思った。そういえばあの女から、セクハラされただのどうのの話は聞いてない。仕事の愚痴だけだ。つまりそういうことはされてないんだろう。なるほど、さすがシスター、だてに長く生きてるわけじゃあないな。もともと人の感情に敏いんだろうなあ。

シルヴィオがかなりあの女に依存していて、かつ手を出せるほど度胸がない。あの顔で、あの歳で、あんな堂々とした威圧感出しといて？すべてが意外すぎてくっと思わず笑い声が零れた。

シスターの仮定が本当なら、まだあの女の方が度胸あるんじゃないだろうか、好きだと気づいたからといって、どうせいつも通り過ごすんだろう。逆に伝えよう、と思ったらアッサリ伝えそうな女である。

つまり結局、お互い好きだからといって（一方はかなり重症のようだが）今までの関係は変わらないようで。

だったら、まだ面白いことになるんじゃあないだろうか。

これからのあの女の行動と、シルヴィオの行動に期待することにしよう。

勘違いとかあってすれ違うとか面白いなあ、他人の恋愛ほど面白いものはない。あたしはまあ、本命には勿論アタックするに決まってるし、まず自分の行動なんて面白みがないからな。あたしはにやにやと嫌な笑みを浮かべていたのだろう、シスターが困ったように口を開いた。

「噂にひかれて、あんまり首を突っ込んで刺されないでよ、少将さんに」

「え、待って、それ冗談に聞こえないんですけど」

……引き際は見極めることにしよう。

噂話2

「そういやお前、少将とよく喋るんだろう？どんな方なんだ？」

うららかな晴れの午後、人も少なくなってきた食堂にいる海兵二人が飯をかきこんでいた。掃除当番で来るのが遅くなってしまったのだ、おかげで数量限定のうまい飯は全部他の奴に食われてしまった。まあ、あんまり好きでないものも、腹が減っていればうまく感じるのだが。

そのまずい飯を食ってる海兵の一人、おれはイジーク。海軍本部で雑用をやらされていたが、（中将とちょっとばかり問題を起こしてしまったので）なぜかシルヴィオに引き抜かれてこの小さな島に来た海兵だ。

こっちに来てからはありがたいことにも、一般兵として派遣されたり、本部にいたころじゃ考えられないような充実な日々を送っていた。

シルヴィオがおれの何を気に入ったのかは知らない、もともと何を考えているのかわからないやつだ。おれが他の海兵のように敬う態度を取らないで反抗していた頃が懐かしい、あいつは反抗すればするほど面白そうに話しかけてくるもんだから、もう諦めてしまっている。話しているうちに、悪い奴じゃないかな、なんて思ったりもしたし。

「どんなって……普通だろうよ」

同僚の男に無難に答えながら、まずい飯を口に運ぶ。
これ、おれが作った方がうまいんじゃないだろうか、なんて失礼な事を考えつつ、少将について思い出す。いつの間にかよく喋る間柄になっている、本当にいつの間にか、だ。おれはあいつに敬語なんか使わないし、おそらくそれがシルヴィオのツボにはまったんだと思うが、噂ほどとっつきにくいやつじゃない。冗談は通じるし、よく笑っている。

海軍での少将の噂といえば、強運の男などと呼ばれて海軍に重宝されていて、実質海軍の権限を握り始めている。とか、戦場では地獄の番人になる、とか、逆らったら痛みを感じる前に瞬殺されるとか。そういう『恐れ』以外にも色々言われている。例えば女たらしだとか、逆にゲイだとか、もう色々ありすぎて覚えていない。

出生がわからない人間、というのもあって、暇な海軍兵士の興味の対象になっているようだった。少し同情する。もっとも、あの男は噂なんて何とも思っていないようだったが。むしろ面白がっているようだった、あの男の興味の対象は幅が広すぎて意味がわからない。おれは無難に理解しようとするのを放棄している。

「普通ー？嘘吐けよ、シルヴィオ少将の話だぜ」
「意外と普通だ、喋ることも他のやつとそう変わらない」
”あの女”の話を除いて、だけど。おれは心の中だけで付け加えた。

勿論シルヴィオの噂の中に、あの女はもれなく含まれている。

おれはシルヴィオとあの女が付き合っていないことを知っているが、海軍のやつらはほとんど恋人だと認識している。それはシルヴィオがあの女を離さないせいだ、手を出す勇気もないくせに（このへんが人間らしすぎて笑える）（笑ったら脳天殴られたからもう表情に出さないと誓った）手元に置いておこうとしている。あの女はそれに気づかず仕事をしているようだったが、外堀はじわじわと気づかれないように埋められていっている。

シルヴィオが裏切らないように、海軍本部自体がすでにあの女を海軍に置いておこうと考えているので、あの女が逃げるのはもう不可能だろう、できても面倒くさいことになるのに変わりはない。少しあの女がかわいそうだな、と思わないこともないが、おれは絶対に助けてやろうとは思わない。だってシルヴィオ怖いし。

「そういや少将の恋人、意外といけるよなあ。髪伸ばしたらそれなりに可愛いんじゃないか？」
「それもう言わないようにしろよ」
「なんでだよー」
「死んでも知らないぞ」
「ははは、さすがにないって」

いやいやほんとマジで死ぬから。
おれは冷や汗をかいた、視線だけで食堂をぐるりと見てみるが、シルヴィオはいない。セーフだ。ああ、まったく肝が冷えた。とりあえず話を続けようとする同僚を眼力でなんとか押さえて、おれは食事を再開した。よけいまずくなった気がする。

シルヴィオは不穏分子をかっ消す気満々である。この前なんか、あの女に”そういう”目を向けていた男がどうなったか……。うわあ、腹の底が冷えたような感じがする。おれの口じゃあとても言え

ない。いや、おれもちょっと協力しちまった手前、申し訳ない気もするんだが、自業自得だと思いたい。だってシルヴィオのタブーなんて……いや、わからないか。あんな飄々とした女たらしっぽい顔しといて、ひとりの女に首ったけとかな、意外だよなあ。おれも目ん玉出るかと思ったしなあ。

それにしてもあの男は目ざとい。

感情にするどいと言ってもいい、シルヴィオと話している時、観察されているような気がする。元々そういう目をしている男なのだが、そうやって相手の目を見ながら動揺を知ろうとするのが癖なのだろう。これもまた面倒なので、おれはいちいち観察されているなどと考えないように話している。ええい、遠回しなことばっかりして据え膳に手を出すことはおろか、告白さえできないようなへたれ男のくせに。

なんだかんだでおれはシルヴィオを気に入っていたりする。

噂は噂、本人は本人だ。

おれが知らない雑学をよく知っているし、周りを第3者の視点で冷静に見ることに長けている。話していて気づくことも多い。（もちろんあの女の事は除く）おれがからかっても殺されることなんてまずないし、この駐屯所にいるどのやつよりも仲がよかったりするんじゃないだろうか、と考える。タブーに触れなきゃあ付き合いやすいやつだ、おれも中将からかうの好きだし、気があうな。

シルヴィオの噂で色々言われていようが、おれは首をつっこむ気はない。

放っておいてもあの男は”問題だ”と思ったことはうまいこと消してしまうんだろうし、変に首をつっこんで誰かさんに刺されちゃ

嫌だしな。そういうとこアイはわかってないんだよなあ、首突っ込んでいいとこと悪いとこがあるのに。面白がっててもある程度距離がなきゃ恐ろしいことになるに違いない。

最後の一口を口に放り込んで、この同僚がいつのまにか駐屯所からいなくなっていないことを願って、席を立った。

噂話3

医務室は閑散としている。朝のしとやかな光が窓から差し込んで、俺はゆっくりと頭を覚醒させながら薬を調合する。この時間が一番好きだ、こんなに自分の好き勝手薬を作れるなんて、本部にいたら考えられないことである。小さな島で、しかもシルヴィオが管理していることで、ちょっと危ない薬品を使っても本部から文句を言われない。最高の気分だ。

面倒なので洗わない白衣を着ると、少し臭ったのですぐに脱いで脱衣籠に放り込んだ。看護助手が洗ってくれるだろう、女っていうものは外では綺麗好きなものである。放っておいても医務室が綺麗になることに文句はない。薬品にさえ触れなきゃ、模様替えしたって患者をとっとと退院させたって、好きにしてくれて構わない。

もう俺も歳だ、俺が死んだらあの助手たちでなんとかするだろう。その予行練習だ、なんて言ってはいるものの、実は面倒なだけである。

のんびりと薬を混ぜ合わせていると、医務室の扉が乱暴に開かれた。しかも蝶番がふっとんだあげく、木製なので木くずが飛び散ったのが横目に見えた。どんな力で開けたのか知りたいものだ、修理代はどこから出てくると思っているのか。俺の懐だっつーの！

こんな時間に誰だ、迷惑なやつめ。

舌打ちをしながら扉の方を見やって、少し驚いた。この歳になるとほとんどのことに驚かないが、今日は珍しいものを見た。思わず頬が緩みそうになったのを引きしめて、医務室に転がるように入ってきた男に声をかけた。

「どうしたよ、珍しいじゃないか。シルヴィオ」
「ちょっと話がある」
「話ぃ？」

医務室なんか滅多に来ない男がまた、どうして。なんだか聞きたくないような気もしたが、どうせ聞かなかったら聞かなかった出この男は居座るのだろう。面倒なやつだ、どんな態度をすれば俺が折れるのかよくわかってる。面倒くさいことが嫌いな俺は、大抵居座られるとついつい口を割ってしまう。そりゃ言っていいことと悪いことの区別はするが。

シルヴィオは眉をぎゅっと寄せて、不機嫌そうな、まずい物を口にしたかのような顔をしている。……ちょっと髪の毛が伸びただろうか、どうせ最近他国の治安維持とかで忙しいから整えなかったのだろう。俺は医者でよかった。

「下痢か？安心しろ、腹の薬なら今調合して」
「違う！」

吠えるように言った後、奴は部屋の隅に置いてあった椅子を引きずって俺の前に置き、また乱暴に座った。随分気が立ってるようだ、まるで危険な肉食の野生動物を前にしてるようだ。本当にしつこいようだが、珍しい。こいつがこんなに動揺することってあるだろうか、と考えを巡らせて、俺はひとつの答えに辿り着いてしまった。

あ、やべ、関わりたくねえ。さっと俺は視線を逸らしたが、体に感じる視線、視線。びりびりするぐらいに感じるそれに敵意を感じる。俺何かしたっけかなあ。

「……今流れてる噂知ってるか」
「噂、つってもな。お前の噂は多すぎてどれのことを言っているのか――――」
「俺が、あいつを、無理やり、……（自主規制）ごほん。……
……したってことだ」

きまり悪そうに言うシルヴィオを見ながら、まだまだ若いな、他の奴にゃ卑猥な言葉なんて軽々しく使うのに。なんて思いながら、そういや自分の青春時代も青臭かったなあ、と思い出していた、ら。

あ。

それってもしかするとこの前、アイに聞いた話のことだったりする？。カーテンでベッドを仕切って、シルヴィオがあの女を押し倒してたところを見たとかなんとか。面白い物を見たって喜んでたなあ。まあ俺もそれを面白がってその日からシルヴィオをからかっていたんだけど。勿論間違ったことはなかったと分かってはいるが、あの女のことでぐらいしかシルヴィオをからかえないから、つい。

ん？……あれ。
そういやそのこと、アイとシルヴィオ以外に漏らしちまった気がしないでも、ない、な。

からかいすぎると痛い目見ると分かっているのに、うっかり口が滑ったような気がする。あ、やべ、俺の寿命ここまでかもしれねえ。しかもちょっと助長させて無理やり医務室でやろうとしたとか言ったかもしんない。冷や汗がだらだらと出てくる、視線を決してシルヴィオにやらないようにしながらどうしようかなーと必死に考えて

いたら、米神に冷たい感触が。

「その顔、俺がやりましたって顔だな、ドクター。そうだろ、なあ」
「違うよ違いますって待ってくれとりあえずその銃はしまっておいた方がいい、融通のきくドクターはいるべきだと思わないか？」
「もうすぐおっ死ぬジジイがおかしなこと言って笑わせようとするんじゃねえよ」

だいたい海軍で長い間働いているのに、女を捕まえるためだけにまどろっこしいことをしすぎなんだ。俺が若いころはなあ、今のエイダ、いや、嫁が初恋なんだけどよ、もうアタックしまくったね。エイダ、君に一目ぼれしたんだ！ってさあ、会った瞬間から……

「そんなことは訊いてない。なんとかしてくれよ、俺が悪者みてえじゃねえか」
「実際そうだろう、違うのか？海軍から逃げられないように手を打って、あの子をこの島にとどめておいて？はい少将が我慢できずに好きな子襲いましたーなんて噂聞いても、誰も噂なんて思わないっつーの」
「う、」
「へたれのくせに、お前が暴走したときが恐ろしいよ。理性が強すぎるのがお前の弱みだな」
「……うるせえよ」

シルヴィオがばつが悪そうに銃をしまう。あー、寿命が延びた、まったく恐ろしい男だ。
ときどきこうやってシルヴィオは俺に弱みを見せる。俺が歳食ってるってのがポイントなんだろう、後は妻がいるってところか。それにしても俺にはまったくシルヴィオの考えていることがわかりゃしない、いや、分かっても気持ち悪いんだが。

「そもそもお前、嫌われてないんだろ」
「そのつもりだ」
「そうやって自信ないのが問題なんじゃないのか」

意外とこの男、自信満々な高慢ちきな男かと思えば、蓋を開けてみりゃ、なんか知らないが自分への劣等感を持っている。この海軍じゃ一番権力という言葉に近いだろうに、この男に何が足りないのか。ああ、あの女か。あの女が手に入れば、こいつは変わるんだろうか。ややこしい関係だなあ、一体海軍に来る前は2人共どうやって生活してたんだか。

「そろそろ腹くくれよ、このままでいいと思ってるわけじゃないんだろ」
「当たり前だ、ちくしょう、んなこと分かってるっつーの」
「だいたい女を逃がす気ないんだろう？なら何も問題ないじゃないか」

そう、それだ。

たとえ告白したとして、振られたとしても、この男はあの女を逃がす気なんかこれっぽっちもありはしない。自覚してなかったのか、（なんて恐ろしい男だ）シルヴィオはきょとんと眼を瞬いていた。なんだ、こういう顔したら中々子供らしいじゃないか。それにしても俺は余計なひと言を言ったかもしれない。怪我が治ったばかりのあの女に少しばかり同情して「どうか（精神的に）無事で」と心の中で十字架を切った。
シルヴィオはそういやそうだなあ、とのんびり言葉を零していた。その姿からは、さきほどまでのピリピリした殺気も感じられない。何かがこいつの中で解決したんだろう。シルヴィオを見ていると、

昔のエイダに首ったけだった俺を思い出して、どうも協力してしまいたくなる。あの女には悪いが、これからもシルヴィオを頼んだぜ。

「まあそっちの噂はなんとかしといてやるよ」
「……できるのか？」
「そりゃあなあ、だってお前に関する噂ってここが出所だし、」

老人の楽しみと言えば、噂を流すことぐらいだ。意外と楽しいもんだぜ。だいたいシルヴィオは大抵のことじゃこたえないし楽しんでもいたんだから、いいじゃないか。別に、なあ？たまたま今回タブーに触れたからってカッカすることないじゃないか。

ぴき、とシルヴィオの顔がひきつった。あ、やべ。

「やっぱりお前か！」
「ぎゃ！」

ごん、と嫌な音がした。また俺余計なこと口走ったかも。老体に何をしてくれるんだ、という文句さえ口から出ない。アドバイスしてやってんだから丁重に扱ってほしいもんだ、脳みそが揺れている気がする。こいつ”でぃーぶい”ってやつにならないだろうな。（この言葉はアイに教えてもらった）唐突にあの女が心配になってきた。まあ俺が助ける気がないけどな、面倒なことに巻き込まれたくないし。俺は既婚者だから嫉妬の対象にならないし、愚痴ぐらい聞いてやらんでもないが。

とりあえず誰か医務室に入ってきてくれ！俺の死期が早まる！

唐突１（前書き）

そろそろくっつけたいです。でもなんだかずるずる長くなりそう……ただ、書きたいところが見つかったら割り込み投稿してしまうかもしれません。

後、ちょっとこの作品について考えていたら、もしかしてこれってＲ１５？と思い至りました。１５歳以下ってどれぐらいのこと知ってたっけな、一応直接的な表現はないけど健全じゃない話ってどうなんだろうなと考え、結局Ｒ１５ということにいたしました。

唐突1

ちょっ、指！指が！

そっと絡まってくるひんやりした指に反比例するように、指の先から熱くなる。ちゅ、ちゅ、と恥ずかしいリップ音を立てながら、私の目や額、頬にキスするシルヴィオを見て気が遠くなった。ちらちらと見える金色と白人の肌、息を吸うと入りこんでくるシルヴィオのにおい。あれ、なんでこんなことになったんだっけ。押し付けられた壁が冷たい、顔が熱くなってきた、今自分の顔絶対に気持ち悪いから見たくない。私はいったいどうすればいい、どうすれば――

「ぎゃ」

混乱していた頭が晴れ渡るようにすっとクリアになった。この男、首筋にキスしやがった。ぞわっと肌が粟立ったところで、私は正常な行動を取った。

「痛っ、」

「こっちも痛いわばかたれ！」

あまりの痛みにたまらずシルヴィオが声を漏らした。私も思い切ったせいで人が見ていなかったらべそをかきそうなぐらい痛かった。やっと離れたシルヴィオを睨む。手が離れないのはなんでだ、ああもう手に力を込めるな触るなちくしょう。思い切り頭突きしてやった額が、少し赤くなっている。白人は赤くなりやすいな、ほんと。現実逃避したい。

「ちょっとしたスキンシップだろ」

私の行動も予測していたのか、しれっというシルヴィオに米神を押さえたくなったが、私の手は自由じゃない。ため息を吐いて、感情を押し殺した。スキンシップってガラかお前は、今までそんなことしようとも思わなかっただろう。しかも首筋って……！さすがの外人も他人とのスキンシップに首にキスがあってたまるもんか！

「私は日本人だ！」

「お固いぞ、ジャッポーネ。俺はアメリカ人だ」

「知ってるよそんなこと！」

威嚇するように怒鳴ると、シルヴィオはおおげさに肩をすくめた。だから手を離せ、手を。本当に何を考えているかわからない、こんなことをしてるから女たらしとか言われるんじゃないのか。考えたらなんだかむしゃくしゃして視線を逸らした。

「つまりお前は日本に”そういう”文化がないから、するなって言いたいんだろ」

「当たり前だ」

「だけど俺の国では”そういう”文化があるわけ。するなって言われてしないとか、平等じゃないだろ？」

「この屁理屈なんとかして！誰こいつに権力与えたの！」

にやにやと笑っているその顔は、私をからかっている顔だ。その顔は何度も見たことがあるが、こういった触れ合うことに関しては一切なかった。スキンシップとか、どこでいつ思い出したんだ。どっかの小説の影響か、それともあの腐れドクターか、（あのドクター、９０代にして妻と未だにラブラブである、それを自慢げにしてくる意味が分からない）なんなんだ一体。

私の反応をひとしきり楽しんだのか、シルヴィオは満足そうな顔をして続ける。

「そもそも日本にキスの文化がないのがおかしい。恋人同士に限らなくたって、キスは言葉にしなくても愛が伝わる、一番簡単な方法なのに」

そう言われてみればそうだ、別に恋人とする以外にも、例えば母親が赤ちゃんにキスしたり、愛犬にキスしたり。キスの文化が日本に少し浸透してからは、当たり前のように、私だって動物にキスしたりしていた。特に意味もなく、つまり一番簡単な方法を選んでその動物に愛を伝えていたわけだ。なるほど、外国人が親愛を伝えるのにキスをするのは合理的だ、言葉にするよりもわかりやすい。

納得したところで、私は丸めこまれていることに気がついた。なんてことだ、こいつは今さっき私のことをからかっている顔をしてたじゃないか。

そこで私は今ここで思い出さなくてもいい嫌なことを思い出してしまった。

日本にいたころの雑学がこんなところで出てくるとは。

手の上なら尊敬のキス、
額の上なら友情のキス、
頬の上なら厚情のキス、
唇の上なら愛情のキス、
閉じた目の上なら憧景のキス、
掌の上なら懇願のキス、
腕と首なら欲望のキス、
さてその他は、みな狂気の沙汰

――――だなんて言葉を。原典は、グリルパルツァーとかいう人の言葉だったりする。

欲望とか！思い出した自分死んじまえ！かーっと耳が熱くなった。あ、やばい、今絶対顔赤いわ、これは隠せない。なんとかシルヴィオの手を振り払おうとするが、逆に力を入れられて抜け出せない。いや、というか本当に痛いんですけど。この人力の加減とかいうの分かってるのかな、俯きながら考える。もう少し髪が長ければ完全に隠せたのに……！

「……どうした？」

私が俯いたせいで本気で怒ったのかと思ったんだろう、少しだけ気遣うような口調になった。そんなこと知るか、今は自分のことでいっぱいいっぱいなんだ。この男どうしてやろう、海に逆さづりで沈めてやりたい。そうやって不穏なことを考えている間も、なんとかこの腕から逃げようともがく。が、そうするほど力が強くなっていくのはなんで！

「離せよ馬鹿シロウ」

「怒ってるの、意識してんの、どっち」

なにこいつ静かな口調で妙な事尋ねるのほんとやめて！

随分私は混乱してるらしい、落ち着け、落ち着け、慌てれば慌てるほど事態はややこしくなってしまうんだから。とりあえず上手くシルヴィオから逃げなくてはならない。考えるのはそれからで十分だ。

「――――俺から逃げるなよ」

は？

思わずシルヴィオを見上げてしまった。見上げた男は、息苦しそうな顔をしている。この顔どっかで見たなあ、怪我したときだった気がする。見たくないって思っていた顔を、今、するのか。意味がさっぱり分からない、そんな顔するなよ、と口を開きかけたが、シルヴィオの言葉で覆われてしまった。

「俺は人間じゃあない、だけどな、欲しいもんなんて人間と同じなんだ」

「……はあ」

「俺を否定してもいいけどな、俺の考えまで否定するな、どうしていいか分からなくなる」

どうしたらいいか分からなくなるのこっちなんですけど。なんで急におかしなことを言い始めたんだろう、しかもさっきまでとは違う深刻な顔で。何かまた魂胆があるんじゃ、とまじまじ見詰めても、それは変わらない。あれ、何この雰囲気。

「俺は人間じゃねえんだ」

吐きだされるように早口で言われた言葉に、私は首を傾げた。

「え、知ってるよ。それがどうしたの」

私はシルヴィオが自分に対して少なからず劣等感を持っていることを知っている。それを否定される臆病さを持っていることも。力

が便利だなんだって好き放題使いながら、心の底では他人と違うということに気づいているから。誰がシロウを否定しているって、一番否定しているのはシロウ自身なんだろう。

でもそれがなんだっていうんだろう？よくわからない、今さら何を言っているのか。

「だってシルヴィオはシルヴィオでしょ、私はそんなあんたについてったわけで、シロウを否定した覚えなんてないんだけど。というか、それがどうしたの、問題あること？便利でいいじゃん」

人生って楽しまなきゃ損だよ。そんな顔してちゃ楽しくないじゃん。

私が笑って言うと、シロウはやっと笑みを浮かべた。ああよかった、私が言ったことは間違ってなかったんだ。少しほっとしながら、私の腹の底でむくむくと気持ちが湧きあがってくるのを感じた。だって他人に強く出といて弱音吐くとか、なんだかそれは甘えにも感じる。気が強い顔しといて（いや、本当に気は強いんだが）ギャップありすぎ……！

「シロウってかわいい」

「は」

シロウは硬直した。その隙にシロウと壁に挟まれた環境から抜け出す。床に落ちていた書類を拾いながら彼の方を見ると、なんだかショックを受けたのか、未だに壁を見ている。面白い、勝った気分になった。

だって可愛くて仕方ない、私に否定するなとか。「ふ、」思わず笑ってしまった、おっといけない。後が怖いので口を閉じた。

なるほどこういう気持ちか。シスターが恋愛はタイミングだなんてことを熱く語ってたけど、わかったよシスター、自分の気持ちを伝えたくなった時――――つまり今がタイミングなわけだ？

「好きだよ」

あースッキリした。

私の脳内で常にひっかかっていた事項がするりと口から飛び出て、存外頭の中が軽くなった。あれがどうやら最近の頭の重さにつながっていたらしい。爽やかな朝を迎えたような清涼感が私の頭を包んでいる。私の顔もすがすがしい顔をしているだろう。

さあ、スッキリしたところで仕事しなきゃなあ。
シロウがまた書類溜めてるし、完成してる書類も各部に持ってかなきゃいけないし。

机に置いてあったぬるい紅茶を一口含み、まとめてあった書類を手にとって部屋を出た。勿論足取りは軽い、シスターにお礼を言いたくなったので、昼休みにクッキーでも焼いて持っていこう。楽しい気分になってきた、今日は買い物に行くのもいいかもしれないなあ。最近新しい服屋ができたらしいしな、シスターと行こうかな。アイはうるさいから連れて行かない。

色々考えていたらすっかり硬直したシロウのことなんて忘れていた。結局、どうしよう明日どう出勤するべき？と今さらなことに気づいて悩むのは、その日の夜、部屋でアイとトランプタワーを作っている時だった。

部屋に残されたシルヴィオが真っ赤な顔をして長い時間硬直していたなんて、勿論私は知らない。

それを発見したイジークが興味深そうな顔をしてシルヴィオを観察し、正気に戻ったシルヴィオに殴られて医務室送りになったのなんてもっと知らない。

自称魔法使いの情実

ここ1カ月、彼女には彼女が最も嫌う書類整理を押し付けている。ひーひーうるさい耳障りな泣き言言いながら、なんだかんだで書類に目を通して、まとめている彼女を見ながら思う。口を動かしながら手を休みなく動かしているなんて、日本人って器用だなと。彼女にだけは怒られるので言わないが、俺の仕事量は遠征を除いて彼女の二分の一の割合である。いや、俺がやっても進まないし。

休み時間になると、疲れ切ったのかふらふらしながら出かけて行く。おおよそ彼女が好きなシスターのところへ癒されに行くのだろう。時々「シスター、助けて……今なら神に感謝するから」と呟いている、書類整理ごときで病みすぎじゃあないだろうか。1ヶ月間仕事は書類整理だけって、やりすぎたかもしれない。

この1カ月で怪我は完治したのか、不自然な動きもなくなってきた。最初のころは痛み止めが切れると、本人は隠しているようだが少し動きがぎこちなくなった。最近はそれがないので、痛みもなくなってきたのだろう。

敵に油断するなんて馬鹿のすることだ。イカれてるとしか思えない。

ところで彼女はあの熱砂の地獄で、かなり派手にやらかしたようだ。

革命軍と某国はそれぞれ復興不可能なまでに追い込まれた、海軍

が手を貸さなければ食糧不足や人員不足になっただろう。革命軍も某国も、自分の国を人質に取られたようなもので、大人しく海軍に投降した。随分と鬼畜な、だけどよく練られた作戦だった。この駐屯所の人間も、今回の件で彼女から余計に距離を置くことになった。彼女が他人の命を奪うことに躊躇いはない。躊躇っては自分が死ぬと知っているから。自分の命をかけないと、他人も、神でさえも助けてくれないと分かっているから。

たくさんの命を奪って、恨まれることもあるだろう、俺も彼女も、他の”軍人”として生きるやつらも。だが生きるために殺すことと、金のために殺すこと、守るために殺すこと――――、一体なにが違うっていうのだろう。この3つに共通していることがある、それは人を殺すことだ。理由なんて何も変わらない、そいつが邪魔だったからこそ手を染める、その繰り返しに過ぎない。自分は悪くないと誰もが思っている、だからこそ戦いはいつまでたっても終わらない。

彼女の名前が近隣の諸国に轟いているのを知っているのだろうか、いや、知っているのだろう。そのために派手にやったに違いない。昔の仲間に会うためかと思ったが、どうやら牽制だったようだ。思いのほか彼女はこの島を気に入っているらしい。この駐屯所を狙っていた国は、ころっと対応を変えてきた。俺でさえぞっとした殺し合いだった、他国がどんな印象をこの島に抱くかなんて簡単に想像がつく。

……そのお陰で書類の内容変更などで枚数が増えたりしているのだが、もうこれは彼女の自業自得としか言いようがない。

ドクターの言葉のせいで開き直った俺は、部屋にいる彼女に対して、とりあえずスキンシップに励んでみた。勿論今までそんなことをした覚えはないので、彼女は面白いぐらいに真っ赤になった。日本人が初なのって本当なんだなあ、ガッチガチに固まって抵抗できないでいる。なんだ、こうやって意識させれば早かったかもしれない。もう基盤はできたし、逃げられないこの女に少しばかり同情する、くそ野郎にひっかかるなんて実に運が悪い。

可愛いな、抱きしめたいな、（自主規制）……したいな、そんな思いが体に出ていたのだろう、いつの間にか俺は彼女を壁に追いやって、手まで絡めている。彼女は冷え性じゃないんだろう、俺の指の温度が少しだけ、上がる。今はもう硝煙の臭いなんてしない彼女の香りに、香水なんてものをつけてもないはずなのに頭がぐらりと揺れた。

つい首筋にまでキスすると、いたずらがすぎたのか彼女は正気に戻ったように、蛙が潰れたような声を出した。それは女としてどうなんだ、と考える前に額に頭突きされて煩悩は見事にすっとんだ。

すごい痛いんだけど、これ、どうしてくれるんだ。

なんだかんだと言い合いをしていたが、（だってそう珍しく意識されると意地悪したくなる、俺の頭はミドルスクールのガキみたいだ、胸糞悪い）ついに彼女は暴言を吐き始めた。だが俺は彼女の減らず口をなんとかする方法を知っている。逃げようとしているのがよくわかったので、強硬手段に出ることにした。

それはつまり、おねだり作戦だ。

こいつは俺が弱気に出ると、必ず困惑するというのをすでに学習している。高慢でもなく自分勝手な言い分もせず、ただ相手を窺うように、俺の弱点に触れながら喋れば、こいつは硬直する。どうしよう、どうすればいいのか、なんて迷っているのが彼女の顔に書いてあるのを見て、俺は噴出さないように必死に無表情を務めた。変な顔をしていないだろうな。

あんまりに困り果てていたので、今日はこの辺にしとくかと体を離そうとした時だった。

「だってシルヴィオはシルヴィオでしょ、私はそんなあんたについてったわけで、シロウを否定した覚えなんてないんだけど。というか、それがどうしたの、問題あること？便利でいいじゃん」

こういうの、ミイラ取りがミイラになるって言うんだっけ。

思ってもみなかった言葉に頭をがつんと殴られたような気がした、だって、なんだこいつ、俺が欲しい言葉を言って何がしたいんだ。ちくしょう、俺がからかうつもりだったのに、頬が緩むのを止められない。彼女は笑っている、これは今日一日この駐屯地は平和に違いない。俺の機嫌は急上昇した。

その通り、人生は楽しまなくちゃ損だ。

それでもって、隣にこいつがいれば万々歳、俺の人生ハッピーだろうよ。

なんてことを考えていて、かなり油断してすっかり忘れていた。

今俺の手からすり抜けて行ったこの女が時折、核爆弾にも匹敵する、言葉の爆弾を投下するということを。

唐突に耳を打った言葉に瞠目した。
……こいつ今なんつった？

「えー……シルヴィオ？何してんだお前、そんな壁にへばりついて……」

きもいんだけど、と若干引いた様子のイジークの声が聞こえたので反射的にそいつを殴って、我に返った。どうやら意識が飛んでたようだ、部屋を見渡しても彼女はいない。なんてことだ、あいつ、書類持ってどっか行きやがった！

待てよ、何だこの普通な対応。書類がなくなっているということは、あいつは仕事を再開したということだ。特に慌てた様子もないし、いつも通りの静かな部屋を見ても、おかしなところなんてひとつもない。

「俺がかわいいだって！信じられない、なんてこった」
「は！？いや、お前がかわいいなんておれは思ったことないけどよ」
「うるさい！」
「え、逆ギレ！？」

もしかして”可愛いの”が”好き”って意味じゃあないだろうな。ああ、頭が痛い、なんであいつがあのタイミングで！俺が言うつもりだったのになんてことだ。

あいつ本当にわかってんだろうか、あんな男みたいな言葉使って、がさつでサボるのが好きで女らしい行動なんてあまり見ないし、ガキみたいに腹出して寝て、くそ真面目で初で変なところで鈍感で、二丁拳銃振り回してるようなくそ女を好きになる奴なんて俺ぐらいしかいないぞ。

このことをイジークに言うべきか、とそいつを見やれば、何かにやけている。

「シルヴィオ、耳赤いぜ」

……こいつ！本当に減給してやろうそれがいい。イジークは何やら感づいているようだ、そりゃそうか、俺が部屋でこんなんだったら何かあったと思うのは至極当然のことなのだから。

でも駄目だこいつに言ったらまたへたれとか言われるに違いない。あの女が変に初だから気使うんだよ、ああもういいや、彼女が”可愛いの”が”好き”だという意味だって知ったことか、勘違いさせるような事を言うあいつが悪い。やけくそになりながらイジークを押しのけてデスクについた。俺には大量の書類もとい、彼女の鬼畜な功績のしりぬぐいが待っている。これは今日までにやっておかなければ、明日は大変なことになるに違いない。

溜息を吐くと、少し落ち着いてきた。

「いいのか、行かなくて」

「いいさ、お前よりあの女の行動は知ってる」

「そーかい」

イジークは呆れたように首を振って、部屋に書類を増やして出て行った。少し書類持って行けよくそ野郎め。

なんであんなに焦っていたんだろう、別にあせらなくてもいいじゃないか。どうせ生真面目なあいつは明日には戻って来るんだから。俺は随分開き直っているらしい、ドクターみたいにイイ歳になってくると余裕が出て来るんだろうか。ドクターと一緒というのはとても気に食わないが、彼女が一体どんな顔して出勤してくるのか少し楽しみなのは本当だ。

自称魔法使いの情実（後書き）

情実：？個人的な利害・感情などが入りこんで公平な判断・処置ができにくい事情や関係。？いつわりのない気持ち。まごころ。

唐突2（前書き）

勢いでまとめて書いたので、色々間違った気がします。修正するかもしれません。

唐突2

私は今とても後悔している。あの時シロウに「好きだよ」と言ってスッキリしたのはいいが、なんで私はうっかり口が滑ったんだろう。どういう顔して会うべきだろうか、いや、どういう顔とかしなくてもいいんだけど。

昨日の夜、うっかりシロウに告白したことをアイに言ったが、

「やっとか！おめでてぇなあ、赤飯でも炊くか？」

などと言ってきたので、二度とあいつには頼らないことにする。あいつは自分の気持ちに正直なやつだ、きっと私がうだうだ悩んでいることを知れば、笑い飛ばすか呆れるか、くだらねえ、なんて言うかに決まっている。相談相手を間違った、シスターならもうちょっと真面目に話を聞いてくれたのかもしれないのに。

考えて考えて、明日考えればいいかという答えに辿り着き、いつの間にか量産していたトランプタワーをそのまま、人の部屋で我が物顔でベッドで眠るアイと一緒に眠りについた。狭いベッドなので、アイを蹴飛ばしたのはご愛嬌だ。寝相が悪いんだから仕方ない。そのことでキレたアイは、もうお前の話なんか聞くか！と悪態をついて今朝、部屋から飛び出して行ってしまった。しまった、アイがいなくなったら愚痴る人間がいなくなってしまう。

さて、どう出勤しようか。

それを考え始めて暫く、ようやくいつも通りでいいか、と結論を出したのは朝食の時間だった。海軍はいつも決まった時間に食堂が開く。この駐屯地では7時に朝食、１２時に昼食、１８時に夕食と

いった時間割だ。

胃に何かをいれなきゃ始まらない。

仕方ないから食堂に行くか、と重い腰を上げて着替えを始めた。

男くさい海兵たちがひしめく食堂に、アイの姿は見当たらなかった。もうすでに食べ終わったのだろう、ただでさえ少ない女海兵がいないせいか、余計にむさくるしく感じた。

中にイザベラを見つけたので、相席させてもらう。イザベラは中華っぽい定食を食べていた、これを作っている人間は、実は日本人であったりする。いつの間にかシェフになったらしいそいつのおかげで、この駐屯所で食べられる食事はおいしい。少ない食材で、それでも日本にいたときのような味だ、こんな味を食べられるのはここぐらいしかないだろう。

私もイザベラと同じものを頼んで、湯気の立つ小龍包にかじりつく。ああ、おいしい、この瞬間のために生きてきたような気がする。自分の世界に入っていると、イザベラが声をかけてきた。

「そういえば、少将と一緒じゃないんですか？」

「……」

忘れていたのにこの話題。イザベラは何も知らないからか、純粋に首を傾げている。確かに、確かにシロウと食事を取ることも多い気がするが、そこまで頻繁じゃない。一緒に食事をしているとき、イザベラがたまたま同じ時間に食堂に来ただけだろう。

「そんな四六時中一緒じゃないし」
「そうなんですか。でも、ちゃんと少将のご機嫌とってくださいね。書類が溜まるとあたしみたいな事務やってる海兵は困るんですから」
「それイザベラの都合だよね」
「そうですよ」

のほほんとして、結構言うな。シルヴィオが仕事しないことを無自覚に指摘している。たまに彼女は空気が読めないので、ようするに本人の前でもこういうことを言ったことがあるのだろう。シロウだから怒らないが、他の駐屯所では……。少し心配になる。

「だいたい、私が少将殿のご機嫌とりなんておかしい。イザベラがやればいいよ」
「無理ですよう、あなたの方が効果覿面のはずですから」
「その割に書類は溜まる一方なんだけどな」
「……えっと、それはですね、きっと努力が足りないんです！こう、掌の上で動かしてください」
「それは上司に向ける言葉としてどうなんだか……」
「いいじゃないですか、ちょっとぐらい」
「シロウ仕事ぐーたらだし、無理無理。言っても学習しないもん」

へっと嘲笑しながらラーメンをすすると、イザベラが口を金魚のようにぱくぱくしていた。変なものでも食べたのか、と訝しげに彼女を見つめていると、何か小声で言っているのが聞こえた。ここうるさいんだからもうちょっと大きな声で言ってもらわないと。仕方ないから唇の動きを見る。「うしろ、うしろ！」……あれ、嫌な予感しかしない。

もったいないけど最後まで食べないまま、箸を丼ぶりの上に置いて、早々に立ち去ろうとすると、がしっと強い力で肩を掴まれた。イザベラのばか、もう少し早く言ってくれよ！

「俺が、なんだって？」

耳元で低い声がした。

心の中だけで悲鳴を上げる。なんで今なんだろう、私なんにも心の準備もしてないんだけど。だらだら冷や汗が出るのを感じる、非常に振り向きたくないな。試しに手を振りほどこうと肩に力を入れてみるが、まったく動かない。この馬鹿力め、結局振り向くしかないじゃないか。

「あー……おはよう、ございまーす？」

「おはよう、朝から俺の悪口？元気だな」

にこ、と笑っているのに目が笑っていない。空気が凍るからやめてほしい。いつの間にかイザベラはどこかに行ってしまったようで、見渡してもいなかった。逃げやがった、あの女。

海兵たちが私たちの不穏な空気に気付いたのか、ちらちらとこちらを窺ってくる。やめろ、こっち見んな。視線だけで威嚇すると、少しひるんだようにまた食事を再開し始めた。どうしようかな、シロウいつも通りな気もするしな。口げんかでもしておこうか、と口を開いた時だった。

喉で言葉がつまった。口を開いたまま、その場で動けなくなる。私はシロウの口元を凝視し、その口を抑えようと手を動かそうとしたら、予想していたのか止められてしまった。やばい、これはやばいぞ。

シロウの口が、私の、名前、を模るように動いた。

音は喧騒に呑まれて消えた。それなのに私は標本のように動くことができなかった。喉が焼けつくように熱い、めまいが起こるような不安定な感覚に陥る。

――――今、ここで呼ぶのか。

今まで、私は名前を呼ぶことをよしとしなかった。自分が殺した家族を思い出すからだ、だけど家族が決めた名前は結局は私の名前でしかない。戦いを始めて2年ぐらい経った頃からは、すでに自分の名前に背徳感を感じないようになっていたのだが、シロウと初めて会った時に「名前を呼ぶな」と言ったことを、シロウはわざわざ今まで守ってきていたのだ。この世界に来てからも、書類上でも自己紹介でも、その名前を使っていたが、シロウが真正面から私を呼ぶことはなかった。

その、反動だろう。

「――――シキ」

ぞく、と背中が粟立った。

私のシキという名は、四季からきている。日本に訪れる四季のように、鮮やかで人の心を癒すような人になってほしいと、母がつけた名前だった。愛を感じるだけに、母を殺したすぐ後、その名前を呼ばれるのがきつくて、自分勝手な理由で名前を呼ぶなと言ったんだ。

その頃はシロウも生きるために利用する対象でしかなかった。だけど、今、呼ばれたとき。私の心はこんなに高揚している。その2

文字だけが甘く響いて、耳にこびりついて、離れない。あれ、名前ってこんなふうに聞こえるものだったっけ。この世界にきてから名前なんて別になんとも思っていなかった、のに、こんなに効力を発揮するものだなんて予想外だ。日本には言霊、なんてものがあったが、まさにそれだろう。言葉にはこんなにも力がある。

もっと名前を呼んで、

口に出す前に顔を引き締めた。今自分は何を言おうとしたんだ、やめてくれ気持ち悪い。照れるどころの話じゃない、こんなガキみたいなことで喜ぶなんて、私はいったいいくつだ。

「シキ、好きだ」

え、と思った瞬間にはすでに私は抱きすくめられていた。

シロウが囁くように零したのは、昨日私が言ったような、何の飾り気もない一言だった。だからこそその言葉にいくつもの意味を感じた。今思えば、そういう傾向はあった。私が気がつかないふりをしていただけで、怖かっただけで、ふとした瞬間に感じることはあった。私を見る、深い、緑の目。

このきっと傷だらけであろう腕に囲まれていることに安堵した。きっと、私たちはとても遠回りしたんだろう。こうやっているのが当たり前のように感じて、どうしようもなく泣きたくなった。広い背中に腕を回そうとしたところで、私は忘れてはならないことを忘れていることに気がついた。

「なあ、お前みたいな女らしくない女を好きになるやつなんて、俺ぐらいしかいないだろ？」

「いや、ちょ、あの、シロウ」
「なに」
「なにじゃなくって、」

ここで忘れてはいけないことがある。
ここが、食堂で、朝食の時間に他の海兵が集まっているということだ。

……やってしまった。

私は恥ずかしくて仕方なかった。今なら恥ずかしさで死ねる、戦場よりこっちのが精神的に遥かにキツい。他の海兵は「なんだ痴話喧嘩か、仲良くしろよ」「熱いね、部屋でやってくれ」とかなんとか言いながら、生温かい目でこちらを見ている。なんで私がこんな羞恥に震えなきゃならないんだ！

こいつ何考えてるんだ。シロウを睨みあげると、へらりと緊張感のない顔で笑い返してきた。何も考えてません、とかいう顔で腹黒いくせに。この野郎、と羞恥心と怒りが最高潮に達したら、逆に落ち着いてきた。そもそも抱きつかれているのが間違いだ、とりあえず腰にまわされた手を払いのけようとシロウの腕の中でもがいていると、思わぬところで一瞬ふっと力が抜かれて私の体がぐらりと傾いだ。

「、」

その隙を逃さないように、噛みつくような速さで唇が重なった。
予想外の出来事に、びしりと固まった私をいいことに、シロウは角

度を変えながら、子供にするような優しいキスを繰り返す。ご丁寧に可愛らしいリップ音をつけて、だ。

柔らかく、それこそ愛情を伝えるようにキスを繰り返すシロウの手が、ゆっくりと腰あたりを滑った。子供のころにその場所をよくくすぐられたという人は少なくないだろう、つまるところ私はそれがこそばゆかった。（他意がないからこその普通の動きが余計）

目も閉じずに硬直した私の脳がくすぐったさで活動を再開しはじめる。

気がつくとキスは深くなっていて、いつの間にか私の息まで奪われているんじゃないかという錯覚に陥るほど苦しくなっていた。熱い息が混ざる。げ、て、ていうか、この男舌入れてきやがった！ぬる、とした生温いものが口内に侵入して、

こ、これだから外人は……！

「痛っ」

「このばかたれ！」

なんか昨日も同じようなやり取りをした気がする。

あまりにシロウが自分勝手なことばかりしてくるので（だってここ食堂だし！公衆の面前で！日本人は慎み深いんだ！）思わず反射的にシロウの舌を噛んだ。口の中に血の味がしたところで、驚いたようにシロウが離れた。それを見逃さずに私は魔の手から逃げることに成功する。

口を手で押さえながら、ちらっと海兵たちを盗み見てみる。彼らは面白いものを見るかのようにガン見してきていた、特にイジーク。

アイはいないようだ。どうしようこれ明日には広まるんだろうなあ、そう考えるだけで頭が痛かった。なんでこんなことになったかというと。

全部シロウのせいじゃないか！

想いが通じ合ったとかそういう問題じゃあない、舌噛まれただけでいいと思えよアメリカン！

シロウが血のついた舌で唇を舐めたのが視界に入る。やつの口元がクっと釣り上がっていることに気がつくと、頭で考える前に体が動いていた。私がこうやって混乱するのを知っていて、あえて食堂で騒ぎを起こした、という顔だ！くそ、この野郎。もうそれは自分の最速だっただろう、という速さで、私は思い切り、殴るように振り上げた。

べちん、

間抜けな乾いた音が食堂に響くと同時に、食堂でどっと笑い声が起こった。シロウをからかうような声が聞こえたのを最後に、しっかり頬に攻撃をくらったシロウを放って、私は走って食堂を飛び出た。こんな場所にいられるか！久しぶりの全力疾走で仕事部屋ではなく自室に向かって走った。

もう暫く食堂に顔出せない……！

真っ赤になっているだろう顔を覆った。

唐突3

「シロウのぼけなす……！」

後から後からぼろぼろと流れていく涙を拭う。鼻水が出てきて、ちり紙をひっつかんで思いっきりかんだ。少しだけすっきりした。

結局、私はどうしていいかわからないだけだ。

逃げてしまったから。

後にも先にも、こんなに動揺することはないだろう。

ベッドに寝転がって、ちり紙を散らかしながら布団にもぐりこんでいる私はひどく滑稽だ。自分で笑えてくる。笑わないけど。目をつぶると変なことを考えてしまう。私の答えは決まっているのだ。それでも私はどうしたらいいかわからない。

だって食堂で告白とか！ないだろ普通、常識的に考えて！すべてが唐突すぎて、叩いてしまった上に逃げてしまったどうしよう、そもそも何で自分が泣いているのかもわからない、本当に何で泣いているんだろう、自分。そう考えたら涙が止まった。女は意味もなく泣きたくなる時があるんだ、そうだきっと。

それにしても恥ずかしくて仕方ない。あの時正常に反応していたらシロウを違う部屋に連れて行ったのに。いや、……そんな暇あったっけ？

考えていると、あの、生々しい、感触を思い出して赤面した。くそったれ、私は一体どんな反応をすればよかったっていうんだ。どこをどう考えても、いい方向に進まなかったのは間違いない。つま

りシロウが悪い。

「……ねえ、起きてる？」

控えめのノック。

別にノックなんてしなくてもいいのに、いつもしないくせに、そういうところを変に気遣うから顔を合わせづらいんじゃないか。私は思わずちり紙をゴミ箱に投げ捨てて、布団に潜り込んだ。今の顔は見せられない。泣いた後の顔とか、誰かに見られたくないものだ。

随分泣いてなかったのに、理由もなく泣くなんていつぶりだろう。中学以来じゃあないだろうか、精神的に不安定な頃ぐらいだ。でもこうやってうっかり引きこもって余計に顔を合わせづらくなったのも、泣いたのも、シロウのせいだ、私のせいじゃあない、と思いたい。

というか、シロウは私に思い切り叩かれたわけだが、それを彼がどのように解釈しているんだろう。拒絶されたように感じたのか、それとも反射的にやってしまったと分かっているのか。……後者であってほしい、私はこういうとき、ただの馬鹿みたいにうまく言葉にできないんだから。

静かにドアの開いた音がした。

「寝てるの」

「……寝て、ない」

「……そう」

ぎし、と音がした。シロウがベッドのはじに座った気配だ。

それから何を言うまでもなく、しばらく沈黙していた。

いたたまれない、どうにかしたいのに、どうにもできない感覚。どうしよう、何か喋らなければ。と考えていると、小さな声で何か聞こえた。布団の中だからくぐもって聞こえる。

「ごめん」

何そのごめんって。どういう意味。何を謝ってるの。

そんなごめんですまされるようなことなの。そうやってすましてしまえるほどのものなの。

つまるところ私が逃げていたのは、その気持ちがいつか色あせること考えてなのだ。結局自分本位で、臆病なのである。こんな私を選んだシロウも、そんなキチガイから離れられない私も、どうしようもなく馬鹿なのだろう。

むかついたので、私は起き上った。顔がどうなってるかなんて、今は気にしないことにする。少し驚いた顔をしたシロウを睨んで、胸倉をつかみ上げた。

「、」

こういうときは目を閉じるものじゃあないんだろうか。私も人のことは言えないが。緑の目と、私の一般的な茶色の目が合った。ゼロ距離なので、少しぼやけている。額に触れた金色の髪は、意外と

硬いことに気がついた。まあ、唇は、いわずもがな。

子供のようなキスだった。口と口を合わせるだけしか、私にはできない。羞恥心の問題というよりも、この年になってよくわからなかったからだ。

ざまあみろ、

顔を離して、少し笑った。

シロウが呆然としている姿なんて初めて見て、余計に笑えた。

ぐらぐらしていた気持ちがすっとしたような感覚になって、いつもの余裕が出てきた。なんだ、初めからこうすればよかった。シスターの言うとおり、自分の感情をそのまま表せば話は早かったのだ。いや、そう思っても、食堂では逃げる以外のコマンドは思いつかないが。ちくしょう、魔法使いめ、話をこじらせやがって。

「アンタってホント分かんないよね」

泣いてたんじゃないの、と顔をしかめたシロウに、私は満足して寝ることにした。布団に再びもどった私を見て、何か文句を言っているのが聞こえるが、聞こえないふりをした。

ああ、今日サボった分、明日の仕事はキツいだろうな。睡眠をしっかりとっておかないと精神的に死んでしまうかもしれない。

「ちょっと、それはないんじゃないか」

「うるさい、眠い」

「俺がどんな気持ちで言ったかわかってる？マイペースなやつだな、寝るな」

「知らない、眠い」
「ばかだな、何照れてんの」
私の髪を梳いた武骨な手が、耳に当たった。熱いんだから、やめてくれ。
ねえ、と囁いた声の方に目を向ける。おだやかに笑っていた。だけどいつもと少しだけ、違うように見えた。そうだ、これは男の顔だ。こいつは中性的なんかじゃなくて、たまに私を見ていた、目、で、
「もしさ、世界が平和になったら、結婚でもしようか」
「は」
えらく話が飛んだ。
……結婚ときたか、さすがにこの歳になると考え始めたものだが。シロウもいい歳だから考えたこともあるだろう、え、だけど今？というかこれプロポーズ？
思わず米神を抑えた。なんだかこれが癖になってきているような気がしてならない。
「平和になんてなるわけないじゃん」
つい私はいつも通りの減らず口を叩いてしまう。喜んでおけばよかっただろうか、いや、そういう問題じゃないと思いたい。だけどシロウはそう言うのが分かってたとでも言うように、機嫌良く続けた。

「じゃあ、この世界の国全部海軍に加盟したら、しよう」
「そんな急がなくても」
「気が変わらないうちにね、アンタ気まぐれだから」
「そんなに早く変わんないよ」
「どうだか……」

近くにいて落ち着くのはシロウだけだ、そんな変わるわけはない。何が不安なのか私には理解しづらいが、そう言ってくるのは嬉しかった。誰かに求められるのは悪くない。

結婚だって悪い話じゃあない、だっていつも通り、一緒にいられるってことだろう。と、軽く考えていた私が後悔するのは2年後のことである。

シロウが隣に寝転んだ。「もうちょっと寄って」ごろごろと壁際に転がる。こうして一緒に寝るのは久しぶりだ、懐かしくて笑ったのがわかったのだろう、シロウの控えめな笑い声が後ろから聞こえた。ああ、なんて落ち着くんだろう、急に本当に睡魔が襲ってきた。

今の雰囲気はただただ、私を包み込むように暖かくて、色ごとなんか一切なくて、どちらともそれを望んでいる。そんなことしなくても、私たちは一緒にいられるとでも言うように。こうやって緩やかな気持ちがだんだん大きくなっていって、そうして私もシスターみたいな馬鹿になるんだろう。

「シキ」

首だけで振り返ると、一瞬唇に触れあった。こうやって2人で寝そべるのもいいだろう、欠伸を噛み殺して、私たちはゆっくりと目

を閉じた。

2年後、驚異的な速さで大将に上り詰めた強運の男、シルヴィオ・ロウ・マルクは、大国、小国ともに制圧し、海軍中心の同盟を組んだ。直後、海軍の英雄と呼ばれた男は、海の男を待つシスターがいる古ぼけた小さな教会で、ささやかな式を挙げた。

戦いの時は鬼のような大将も、このときばかりは普通の男だったという。

唐突3（後書き）

動揺しすぎると泣きたくなるときってあります…よね？
理由もなく泣きたくなったり…って、ないですかね、ないのかな。
そういう理由でシキは泣いていました。その行動に特に意味は込めてないのですが蛇足です。

これでＣＲＥＳＣ．は一区切りです。最後の４行が書きたかった…！
これからゆっくりその後を更新していきたいと思います。
幸せらぶらぶが書いてみたい。

ここまでのよく登場する人物紹介。（前書き）

紅月の人物メモに近いです。もちろん読まなくてもいい蛇足です。

また思いついたら編集、ということを繰り返すつもりです。

＊こっそり（え）のほうにイメージ画がございます、注意してください。

ここまでのよく登場する人物紹介。

北川四季
（シキ・ロウ・マルク）

本編の主人公。最初から最後までシルヴィオに振り回される苦労人。本人はまあこんな人生も悪くないと既に達観している。人生楽しまなきゃ損、がモットー。苗字がここの設定で初めて出たが、結婚したので語呂の悪い名前になった。

戦いを始めた17歳の頃からシルヴィオを利用したり信用したりしつつ、生き意地汚く生き伸びてきたが、本来はお人好しで臆病者な、生粋の日本人。やるときには鬼畜なことだって平気な顔してやってみせるが、平凡に生きられれば幸せと感じている。デスクワークは病むほど嫌いで、基本的にはマイペースで、かなりのリアリズム。正義？悪？それって食べられるの、という感じ。

口はあまりよろしくなく、女らしくはない。シルヴィオと他の仲間たちとともにこの世界に来て、順応能力の高さを発揮。元の世界に思い残すことなんて塵ほどもなく、ちゃっかり海軍に在籍し、暮らし始めた、ら、25歳のとき、いつの間にかシルヴィオと結婚していた。

シルヴィオ・ロウ・マルク

アメリカで造られた人造人間。（詳しいことはファンタジーということですまします、なんでもありなんです…！）鉄から銃を作ったり、不思議な力を使える。ただ、相当の集中力が必要。

25歳の時に四季と出会い、それから四季以外見ていないキチガイ。その前まではわりと女性関係もあったりしたが、ここまでではなかった。他の気に入らない人間に至っては、無関心、または絶対

零度。自分を持っている人間は好きで、イジークやドクターなどは親しい関係。なんだかんだで四季に振り回されつつ、海軍に在籍してからは裏でうまいこと四季を逃がさないように画策しはじめる。しかし結局最後の最後まで手を出せなかったへたれでもある。
海軍に入ってからは階級うなぎ登り。実はなんやかんや力を使いつつ、うまいこと出世。四季にプロポーズしてからは必死に仕事に勤しんだ。気がつけば2年で大国小国を圧倒し、海軍本部の重鎮である大将にまでなっていた。急な昇進で海軍に恐れられているというのを通り越して、すでに海軍の運営にかかわっている。
３３歳のとき、やっと四季と結婚するまでこぎつける。

シスター

四季やアイがよく通う教会のシスター。名前はシアナ・レイザルト。誰にでも優しく、第3者の視点で物事を見ることに長けている女性。時には厳しいことも言う、母親のような人物で、島の住民にも好かれている。
３１歳独身、海に出た海賊の恋人をずっと待っている。

アイ
（実は名前設定あり。東堂愛）

日本で戦っていた頃の仲間。何の因果か同じ海兵になり、同じ駐屯所に派遣されて四季と再会した。日本ではあまりかかわらなかったが、話してみると四季と合うことが分かり、今では一番仲がいい。口が悪く素行も悪いが、色恋沙汰は好物。

イジーク

海軍本部で一般兵として働いていたが、（シルヴィオにつっかか

るのが好きな）とある中将といざこざを起こし、雑兵をさせられていた。自分に正直で、言いたいことはハッキリ言うタイプ。本部に足を運んだシルヴィオにうっかり見つかり引き抜かれることに。
小さい島に勤務することになったが、前に比べると格段に待遇がいいし他の海兵たちも楽しいため、ここに来てよかったとしみじみ感じている。シルヴィオとは仲が良く、相談したり相談されたりのいい関係を築いている。四季を捕まえるための手伝いも（渋々、だが少し面白がって）していた。

ドクター

名前はリヒダンシュリイン・アヴァシュミド。噛みそうな名前なので、妻以外にはドクターと呼ばれている。９８歳現役。８０歳の妻と仲良く暮らしている。
薬物の調合が好きで、怪我をしている人間をみると治したい衝動が抑えられない医者病である。人をからかうのが好きで、シルヴィオのあることないことの噂も全てドクターが元凶。シルヴィオのことは昔の自分を見ているようで、彼に助言しつつ、いつも微笑ましく応援している。（シルヴィオは嫌がっている）

イザベラ

海軍本部の事務をしていた女性。２０代と若いが、空気を読めないこと以外は有能なので重要視されていた。基本的に明るく、朗らか。仕事が好き。意外と自分本位のところもある。本部に足を運んだ（書類が溜まって四季に小うるさく怒られていた）シルヴィオにうっかり見つかり、本人の意思に関係なく引き抜かれる。
島に来てからは、本部よりも書類管理を任され、意外と生活に順応している。

グレアム

シルヴィオのことが嫌いで嫌いで仕方ない、未だに階級が変わらない海軍中将。なにかにつけてシルヴィオを陥れようとするが、いつも失敗に終わっている。柔軟な考え方はできない人だが自分なりの正義感は強い、ようするに頑固なオヤジ。推定４２歳。

ちなみに、四季がこの世界に来た時は２１歳。海軍に入ったのは２２歳のとき、という設定です。あれ、年齢間違ってそうで嫌だな。

海軍１（前書き）

結婚したすぐ後の話。

海軍1

シロウとの関係は特に歪むこともなく、いつも通りゆるい関係が続いていた。

だが彼はここ2年特に忙しく働き（私にまで書類が回ってこないぐらいだ、驚くどころの話じゃない）階級の話はよくわからないが、大将という座を勝ち取り海軍本部の重鎮にまでなってしまっていた。そのお陰で仕事も増えるし、本部に足を運ぶことも多くなっていた。1か月遠征に行ったりなどはざらだ。

それでもこの島に居座るのは、私がいるからなんだろう。

遠征には私もついていくが、私とシロウのやる仕事は違うので、シロウと話すことはほぼないに等しい。シロウは大将なので表立って仕事をして、私たち海兵はその補佐だからだ。

シロウは私と接する時間が少ないことを気にしているようで、本部に長く居座ることはない。むしろ本部をこの島に設置してしまおうか、なんておかしなことを言っている。やめてくれ、島が汚れる。

シロウが海軍を動かせる地位になってから、あれよあれよという間に大国小国が海軍に加盟していった。この国の海軍も世界規模になり、陸軍と海軍に分けられることになった。私とシロウなど、この駐屯地の人間は海軍のまま、前とやることは変わらない。不法漁や海賊を監視するための海の巡回、商船の警護など、仕事が減ったという実感はない。他国の内部紛争に関わることがなったことぐらいか。

とはいっても、最近は大きな事件もなく、平和である。

海軍に加盟すると、海軍がその加盟国の領海を合法的に監視することができる。そうすると不法な行いはできなくなり、各国間のいざこざが減ったのだろうと勝手に推測している。この海軍の国はかなり大きいので、（シロウたちのおかげで軍部の力もついた）逆らいたくないというのも本音だろう。言うことを聞いておけば、困った時に援助すると海軍が公言している。なんたら協力条約とかいうのを結んでいるらしい。

しばらく平和な日々が続くと、シロウも今まで通り島に腰を落ち着け始めた。私もシロウについていって他国と条約を結びに行かされるのだが、最近はやっと落ち着いてきたなと感じている。

本部に駐屯所の予算や他国との関係を報告しに行っていたシロウが、急に帰って来たことがあった。1週間はかかると踏んでいたので、何か不具合でもあったのだろうかと構えたが、彼が持っているのは一枚の紙切れだった。

なんだそれ、訊く暇もなく気がついたら婚姻届に印鑑を押していた。あれ、と考えている間にその紙はどこかに行ってしまった。そして気がついたら結婚していた。シロウの予告通り、この世界がある程度平穏な雰囲気に包まれた途端結婚してしまった。あれ、私が考える暇はどこにいったんだろう、マリッジブルーって何のこと？

それからささやかだが教会で結婚式を挙げた。

アイもそのときばかりは嬉しそうに祝福してくれて、あたしの恋愛も協力しろよと言ってきた。さて、アイに協力してもらった覚えがあっただろうか。その時の結婚式はドクターやシスターが島の住民に『幸運の男』が結婚すると言いふらしたらしく、島中が祝福してくれて、今に至る。あの時は本気で恥ずかしかった、結婚っていうものに実感がなかったということもあるが、嬉しさ2割気恥かしさ8割だ。なんだこれ、私が結婚とか何かの冗談かな。

結婚して後悔したことがある。それは、シロウの過剰なスキンシップのせいだ。

結婚してからというもの、あいつは事あるごとに私に触れようとしてくる。スキンシップが苦手な私からしてみれば、それは必要がないことだ。手繋ぐぐらいでよくないか、とも思うが、男と女の感性は違うのである程度までは黙認している。まあ、ほら、一応好きだし、悪くはない。人前では勘弁してほしいので容赦なく殴り飛ばすが。

「シキ」
「何」

夕方、久しぶりにシロウと出かけることになった。とはいっても、夕食を食堂ではなく外で食べよう、という話になっただけなのだが。シロウは外に出ている時、必要以上に私に触れようとしない。私が本気で嫌がることを知っているからだ、そこまで空気が読めるなら、今ここでも空気を読んでほしかった。

「子供が欲しいんだけど」

ぶほっ、

水を噴き出しそうになって、必死にこらえたら鼻がつんとした。

た、確かにそういう歳ではあると思うが、今、このタイミングで言うことかな。シロウを見ると、にこにこと上機嫌な笑顔を振りまきながら私の返事を待っていた。どうせなら私に考える暇をくれ。

シロウとは一緒に寝たりしている。健全な意味で。

私たちは2年付き合っているが（このお付き合いというのも変な話なのだが。付き合って何が変わったって、スキンシップが増えたぐらい）なんと、一度も”そういう”ことをしていない。笑える話、中学生もビックリ、健全なお付き合い中（結婚しても）である。私があまり慣れていないことを知って、シロウが配慮しているんだとは思うが……コウノトリさんが来るわけもなし、子供が欲しいとは”そういう”ことをしたいってことだろう。え、まさか作り方知らないなんてことは……ない、よね。

「……あのさ、シロウ」

「ん」

「言い方間違ってない？」

誘い方というかなんというか。なんか色々飛ばして要望を言われたような気がして仕方ない。子供が欲しいっていうだけなら、スラムの養子でも引き取ればいいし、逆に私とシロウの子供が欲しいっていうなら、”そういう”ことをしなきゃならない。

考えていると、何か間違ってないか、と気づく。

なんで私こんなこと考えなきゃならないんだろう、こういうのって流れっていうか、雰囲気って言うか、そういうもので行為をして、その産物が子供じゃないんだろうか。そのことを詳しく分析している自分自身に頭を抱えた。

ここは人気のない、少し古風な感じの酒場だ。それだからまだ私の精神が保てていたようなものの。壮年の店主が、くすっと笑ったのが目に入った。ちくしょう、聞いてやがる。困っている私を見て余計に笑って、かつ自分は関わらない位置にいる。私もそこに行きたい。

「じゃあ、」

「あ、やっぱ待って言わなくていい、とりあえず食べて」

シロウが口を開いたのをさえぎる。ものすごく嫌な予感がした。パスタを咀嚼しながら、どうやってこの店から出るまでにこの話題をぶりかえさないかを試行錯誤したが、どれもいい案じゃない。というかシロウが黙って食べればいいだけの話じゃないか。

のんきにお茶をすすっているシロウはきっと私が混乱するのをわかってやってるから、もうどうしようもできない。偏頭痛になりそうなのは気のせいかな、あれ、なんで私はこいつに振り回されているんだろう。

「そういや明日から暫く本部に行くことになった」

シロウが嫌そうに言った。実際言いたかったのはこのことだったのだろう。シロウが本部に行くのは今に始まったことじゃないので、適当に頷こうとしたが、続いた言葉に喉がつまった。

「で、その間お前にここの駐屯地を任せたいんだ」
「ごほっ、えほっ、」
「大丈夫？」
水を喉に流し込む。
「大丈夫じゃない。で、なんでそんなことになったの」
「半年ぐらい新人っていうか、新参者？の教習まかされてさ」
半年。今までで最長じゃあないだろうか、そうか、そんなにいないのか。そう思うと少し寂しいきがする。
「面倒な仕事だし、あのくそ中将がうまいこと回した仕事だし、適当に切って帰ってくるつもりだけど」
「あー……」
「週1で帰ってくるから」
「それは大将としてどうなの」
そうなった時の新参者の反応が手に取るように分かる。反面教師でどうかマトモな海兵になってほしいものだ。
週1で帰ってきてくれたら、そりゃ私は嬉しい。この駐屯所の仕事を私一人で請け負わなくてもいいし、それに、なにより一人で仕事をするのは嫌だ。
「分かった、いってらっしゃい」
お決まりのセリフを言えば、なぜかシロウが本当に嬉しそうに笑った。

――――その夜？

そりゃあ、決まってるだろう。

新婚として健全なことをしたとだけ言っておくことにする。アイ、うるさい。笑うなよ！別に流されたわけじゃない……と思いたい。シロウのせいだし、うん、仕方ないことなんだ。（正直混乱してた上に恥ずかしくてよく覚えてないけど、朝起きた時に隣で他人が寝てるっていうのは生々しいもんだな……）

修道女の昔話（前書き）

シスターの海賊との昔話です。
勢いで書いたので改稿するかもしれません。

修道女の昔話

わたしは小さな島の孤児院で育った。３歳で親に捨てられて、たまたまわたしを見つけた孤児院のマザーに拾われた。両親はこの島の人間じゃなくて、島の中を探してもいなかったらしい。運がよかったのだろう、それから１２年間、その孤児院で暮らした。

マザーは素敵な人だった。

動作はたおやかで上品な、大人の女性。怒るときは怒って、褒める時はこれ以上ないほどに褒めてくれる、本当の母のようだった。マザーのおかげで、色々なマナーなど上品な仕草が身についたと言ってもいい。孤児らしくない孤児たちだったからか、この島の住民もわたしたちにとても優しかった。

わたしたちが笑うと、マザーも嬉しそうに笑って、そんな単純な幸せがある毎日。この世で一番幸せな孤児院だと幼いながらに感じていた。

わたしには親に捨てられたことなどどうでもよく、孤児ということに何の不満もなかった。ずっと他の孤児たちとも仲良く暮らしていて、大人になってちゃんとした場所で働けるまで、それが続くものだとばかり思っていた。だけど、

１５歳になったばかりの夜、突然マザーが死んだ。

本当に突然だった、もしかしたら何かの病だったのかもしれない。マザーが倒れてから、寄付金も少なくなり、孤児が少し働く程度じゃまかなえなく、孤児院はつぶれてしまった。幸い、孤児はわたしが一番年下で、ほとんどがもうすぐ成人だったから、すぐにちゃん

とした仕事を探すことになった。
ところが私はまだ15歳で、身元の保証人もいなかった。だから仕事が見つかるなんてこともなく、かといってわたしを拾ってくれるような、精神的にも懐も裕福な家庭は存在しなかった。

ふらふらと食事にありつくこともできずに、路上で生活し始めてから数日。気の毒に思ったらしい住民が、島の隅にある教会を紹介してくれた。もしよかったら、そこのシスターに頼んでみようかと。そこへ行けばシスターになる以外の道はないが、わたしにとってそれは嬉しい申し出に違いなかった。

そこのシスターになって3年半ほど経った頃だろうか。あの人に出会ったのは。

修道女としての作法や、神への祈り方などを一通り覚えたときだった。この教会は菜園をしていて、そこの作物と寄付金で成り立っている。わたしは昔から土いじりが好きで、好んで菜園の世話をしていた。今日は花でも植えてみようかしら、きっと華やかになるわ。そう思って花の種を埋めていたとき、後ろから声をかけられた。

「ここのシスター？……あのさ、悪いんだけどちょっとだけ訊いていいか」
「はい？」

振り向くと、ばつが悪そうに頭をかいている、見た目20代後半ほどの男性がいた。ぼろぼろのシャツに、8分丈のぶかぶかのパンツ。腰紐にはカトラスをさしていた。ぱっと見物乞いのようだったが、それにしては筋肉がついている、と観察していて気がついた。

――――この人は、海のにおいがする。

「うふふ、あの時道を訊いてきたのよね。小さな島なのに迷うなんてどうかしてるわ」

今も方向音痴は変わらないわね、と言えば、男は顔を真っ赤にしながら「少しは治った！」反論したが、手で顔を覆ったあたりを見ると図星なのだろう。

彼の名前はシゼル。彼は陽気な海賊だった。

よく笑い、いつも楽しそうに色々な話を教えてくれる。あの島ではどんなご飯がおいしいか、こんな名物があった、仲間がこんなことをしでかした、などだ。聞いているのが面白くて、どれだけ聞いても飽きなかった。むしろもっと聞きたいと、彼が船へ変える度に考えていた。海賊といえば無法者、という意識が根付いていたので、わたしはいつまでたっても彼が海賊だという気がしなかった。

「こんなに長い時間、この島にいていいの？」

「いいんだよ、他の仲間もバカンス気分だしな」

シゼルが頭として動く海賊船は、ここ1カ月この島に滞在していた。そんな短い期間なのに、わたしは彼のことが好きになっていた。彼もわたしのことを好きになってくれた。思えば、一番最初道を訊かれたときから始まっていたいたんだろう。何度も何度も愛をささやいて、それでも私は彼がいつか海に行ってしまうことを知っていた。彼もちゃんと分かっていた。

彼らがこの島で滞在しているのは、仲間の一人が壊血病になったので休養のためにここに来たのがきっかけだった。壊血病とは、野菜などの栄養が不足して起こる、海の上では最も恐ろしいとされる病だ。その仲間というのも、2週間ほどで回復したそうだ。だけどシゼルがここにいるのは、そう考えるとわたしは少しだけ嬉しくて、少しだけ悲しかった。

シゼルたちは、どのあたりにあるかはわたしには分からないが、ずっと北の方にある彼らの街を海賊につぶされたそうだ。寒い地域で、野菜も中々育たず復興も困難だった、だから彼らは『外』に目を向けたのだという。そうやって彼らが”海賊”として出稼ぎに行き、同じ海賊を襲って生計を立てているらしい。稼いだ財宝（彼は宝といっていたけど、実際はどんなものなのかわたしには想像もつかない）を街の復興のために使っていると、彼は誇らしげに言っていた。

まるで義賊だ、わたしはそれを聞いた時、わたしの中の海賊とかけはなれていて笑ってしまった。

でも、そうやって彼らが守りたい素敵な街なら、一度でいいから見てみたいとも思った。そうやって夢みるのが楽しくて、悲しい。彼らにはきちんと帰る場所がある、ここでは、ない。彼らと一緒に行けたら、どんなにいいだろう、どんなにしあわせなんだろう。考えても仕方のないことだとわかっているのに。

「ねえシゼル、この島にはまだ海軍の駐屯所はないけれど、建設されるのが決まったわ」

「……知ってる」

彼はもう少しいるつもりだったようだが、潮時だった。海軍と海賊は敵同士であって、わたしは海軍に守られるべき一般市民にすぎなかった。シゼルはいつもの陽気な笑顔を消して、眉を顰めた。今にも泣きそうな顔に、わたしは目をそむけた。

「なあ、シアナ、お前も」

「だめよ、それ以上は言わせないわ」

人差し指を彼の唇にあてた。

驚いたようにシゼルが閉口し、さえぎられたことが気に食わなかったのか、むっとしたような顔をした。そんな顔をしたって言わせてあげない。きっとわたしが彼と言っても足手まといになるだけ。逃げ足も遅いし、体力もない、そしていざとなったとき人を殺すこともできない。

「シアナ」

シゼルの顔が少しだけ、歪んだ。そんな顔を見たいわけじゃない、どうせなら二人でずっと笑っていたい――――

ゆっくりと、名残惜しむように、シゼルがわたしに口づけた。わたしも答えるように、彼の首に腕をまわした。ふと香った海のにおいが、いとしくて、煩わしかった。視線が交差して、熱い吐息が重なるほどの近さで、シゼルが囁く。

「俺はいつか、ここに戻ってくる。国を直したら、だからその時は――――」

その時は。

その時はきっと、

「またわたしに会いに来て」

そして今度こそ連れて行ってくれる？

こんな誓い、いつだって塗り替えられる陳腐なものだ。
だけどそれがあなたとわたしを繋ぐなら、この小さな銀のロザリオに誓う。
このちっぽけな教会であなたを待っているから、どうか、せめて、あなたも覚えていて。

海軍2

シロウが本部に出かけてからというもの、私の目の前には書類が積まれていた。こんな薄い紙っぺらが山のようになるなんて、一体何枚あるんだろうかと考えたが、気が遠くなる気がしたのでやめた。

そろそろ目疲れでぼやけて見えにくくなってきた、目頭をもんで、溜息を吐く。休憩時間まだかな、シロウ帰って来ないかな。いや、まだ一昨日行ったばかりなんだけど。週1で帰ってくるとか言っていたが、それも本当かどうかは怪しいところだ。アレは一応海軍を動かしている人間の一人なんだから、そうそう自分勝手な行動はとれないだろう。考えれば考えるほど憂鬱になってきた。

「いくら旦那が出かけたからってシケた面すんなよ、陰気がうつる」
「アイ、私はどちらかというとこの書類のほうが気に食わない」

執務室に無理やりひっぱりこんだアイは、なんだかんだ文句をいいながらも書類整理を手伝ってくれている。内容は彼女が見ても分からないので、分類別にわけてもらっているのだ、これだけでだいぶ手間が省ける。

「てゆーか、なんでアタシがこんなことしなきゃなんだよ。休暇中なのに！」
「後で晩御飯おごるからそんなこと言わないでよ……」
「それぐらい当たり前だ！くそっ、そもそもコレ、お前のせいで増えてるんじゃねえか」
「必要な措置だったと思うんだけどなあ、やっぱ面倒なことなんてやらなきゃよかったかもしんない」

「後悔するならすんなっつーの！」

どし、と重い腕を動かして印鑑を押す。これがまた疲れるんだわ、かすれないようにしなきゃだし、そもそも私は細かい作業が苦手だったりするから。

そう、アイの言うとおりこの書類は私が指揮を取った、例の砂漠での抗争の影響が出ている。この駐屯所にこそ被害はないが、ぼろ雑巾になり果てた某国と革命軍も海軍のものとなったので、本部被害と一緒のことになってしまったからだ。

予算の変更、被害状況、食糧支援、街の再起。

他の島や国からの援助申請。

見たくもなくなるたくさんの問題が押し掛けてきているのである。

2年でたいぶ落ち着いたが、それでも街は生きている。常に問題が解決し、起こる状態なのだ。シロウがいる時はこの書類の2分の1ほどだったというのに、やっぱり1人だと紙は減らない。どうしたもんかと頭を痛めていると、また書類が1枚運ばれて来た。

「砂漠の国ハルダからの貿易依頼なんですけどー」

それもまたこの島には重要な話だ。まったく、収集がつかない。どれが優先順位が上か頭の中で組み立てながら、アイに書類を渡したイジークに声をかけた。

「3時から会議開くから、各部の代表を会議室に集めて。後は例のうるさい中将を呼んでくれる」

「えええ、俺グレアム嫌いなんだけど、マジで俺がするわけ？」

「ハルダの管轄はあの人だしね。グレアムって名前だったんだ、へ

ええ。そうなんだ」
「ちょっと、話聞けよ。アイ、お前がやってくれ」
アタシもあの人嫌いー、と言ったアイも随分やつれている。声に覇気がない。それを見ると私までやる気がなくなってくる。2人して溜息を吐いていると、イジークは「わかったよ」と不承不承ながらも部屋を出て行った。

結局のところシロウに階級を抜かれてしまったグレアム中将は、相も変わらずシロウと仲が悪い。いわゆる犬猿の仲ってやつなんだろう、かみ合わない人たちだ。イジークも過去に中将と問題を起こしたようで、会いづらいらしい。仕事と割り切って頑張ってもらいたいものだ。

「……？」

ふと目にとまった文字があった。

この世界は一部の極地を除いて、英語に似たニュアンスの言語が世界共通語となっている。ぐねぐねとした文字は覚えるまで消えてしまえなんて思っていたものだが、今はもう慣れたものだ。
この世界で今主流となっているタイプライターで打たれた文字列ではない場所。羊皮紙の左下の隅に、明らかに後で慌てて書き足したような、インクが滲む走り書きでその文字は書かれていた。

――――Ｉｏ　ｖｏｇｌｉｏ　ｉｎｃｏｎｔｒａｒｅ

どこかで見た文字だ。

一枚の紙に書かれたその一言を、自分の頭の中で何度も何度も繰り返す。乾燥してきた目を瞬かせて、もう一度視線で文字をなぞる。どこの言葉だったか、ひっかかりはあるのに思い出せないというのは気持ちが悪い。

だが、そう、これは簡単な問題だった。”この世界の文字ではなく”” 日本語でもない”。それはつまり、向こうの世界での――――、

ころり、と右手から羽ペンが転がり落ちた音を聞いてはっとした。

「……どうしたんだよ、疲れたのか？」

「いや、……うん、そうかもしれない」

「？」

アイは怪訝な顔をして、また作業に戻った。

インクが書類に飛び散って、大変なことになってしまった。だけどそれを気にするほど、私に余裕はなかった、それほどに答えは簡単だったのだ。簡単な答えすぎて、考えたくもないことに違いはない。

ゆるりと無線に視線を投げる、シロウに言うべきだろうか。そうやって考えて、私は私に疑問を持った。どうして考えたのか？本来なら言うべきだ、言わなければならないことなのに。私はどうして躊躇ったのだろう。

そして今も、無線機に手を伸ばせずにいる。吐きだした空気が少

し震える。紙の差出人は”ネロ・ロッシ”、砂漠の国ハルダの北西の鍛冶屋から。

聞いたこともない名前だが、”ロッシ”という苗字には少し聞き覚えがあった。確かイタリア人に多い苗字だったはずだ、だとすると、この一文もイタリア語の可能性が高い。読めなくても、意味は大体分かった。これはシロウではなく私宛の文書に模した手紙だ。おそらく私の名前をどこかで拾ったのだろう。

なんで。

どうしてだ、シロウは”私の仲間”しかこの世界に送っていないんじゃないのか。何かの冗談か、偶然か、事故であってほしい、嫌な想像がぐるぐると回る。もしこれが本当に”そう”なら、もう一人のシルヴィオがいてもおかしくない。もし、もし、もし――――昔みたいなことが起こったら？私はそれを繰り返すことができるのか？だめだ、こんなことを考えていても何の解決にもならない。分かってはいても、じっとりと滲んだ汗はどうにもできない。私は、かすかに震える手を、もう震えないように握りしめるしかできない。

私の被害妄想であってほしい、この差出人が独りであってほしい。できれば私の知らないイタリア人の”味方だった”人であってほしい。

私の名前宛ということは、少なからず私はこの差出人に関わっているはずだった。もしかしたら私は差出人の知人を手にかけたのかもしれないし、当人を殺そうとしたのかもしれない。確かなのは、この文字を書いた人間は私のことをよく思っている人間でないことである。

私はこの文字を無視することができる。

大きくなった海軍に手を出す人間は少ない、少数ならなおさらのことだ。大丈夫だ、今まで大きな出来事がなかったということは、もう一人の魔法使いはこちらに来ていない。大丈夫、いろんな可能性を考えて、常に情報網を広げているが、そんな話も入ってきていない。それを踏まえて考えると、この、今の私の安寧を切り崩すような小さなほころびを無視したとしても、特に何も支障はないのだ。さらに言えば、この差出人、ネロ・ロッシと一生会わなくともすごせていけるほどの地位は持っている。シロウに言えば、それは確実となる。私自身、彼に伝えたことに安心し、きっとネロ・ロッシという名前さえ薄れていくだろう。

だけど、

私はその紙を、アイに見られないようにさりげなく錠付きの机の中に入れた。

そして無線機に触れないまま、会議のために席を立った。

海軍3

「シキさん？」

はっと我に返ると、会議に参加していた隊長が私の顔を怪訝そうにのぞきこんでいた。いつの間にか握りしめていた書類はしわくちゃで、もう使えそうにもない。随分ぼうっとしてしまっていたらしい、私を観察する目がいくつもあった。

「体調が優れないのですか？」

「ああ、いや、もう大丈夫。続けよう」

心配そうに言ってきた隊長に片手を上げて答える。

そう、今は自分のことを考えるべき場所じゃない、違うことを考える場所だ。ここは海軍で、私はこの島を任されたんだから。そうは分かっていても、頭の中にはいつだって”あの一言”がぐるぐると巡って、終わりのない思考を続けている。

逃げたい、と言えばシロウはいつだって助けてくれる。だけど、逃げれば、その事は一生私を追いかけて来ることになるだろう。彼の手にいつまでも縋りついてはいけないとは分かっている、シロウがそう思っていてもいなくても、私は考えることをやめられない。私は臆病で、私の周りの者が崩れて行くのが見ていられないから。

だから。

私はハルダに行くことにした。名目上はハルダと貿易関係を築く

ため。実際私はハルダの国王とその秘書に面識があるから、うまくいかないことはないだろう。会議は終盤で、ハルダについて説明をしに来ていたグレアムは自分の管轄の国へ帰って行った。つまりこのことはグレアムも承諾済みなのだ。

「ハルダには私だけで行く、あんまり多くても大事になるだけだしね。市民に反感をもたれることだけは避けたい」

「ちょっと待ってくれ、じゃああんたが行かなくてもおれが行けばいいだろ？あんたがここを空けたらよくないんじゃないか、シルヴィオだって、」

「イジーク、今お前に発言権はない」

むっとした顔のイジークは私の容赦ない一言に口をつぐんだが、何か文句をいいたげなのは確かだ。この会議室にいる隊長たちと、各班の代表は残らず不満そうな顔をした。

代表がこの島からいなくなるなんて、彼らからしたら迷惑以外の何物でもない。そう言いたいんだろうが、私は我儘を通せる地位にいた。まったくくだらない私情に他ならない、彼らには悪いとは思うが、少なくとも一週間は開けることになる。その間にシロウが帰ってくることはないだろう、忙しくて1カ月はこの島に帰れないとぼやいていたのを思い出す。

運がいい、彼が帰るまでに事を終えられそうだ。

「どんないきさつであれ、私はハルダと縁がある。なら私が顔を向けることが筋でしょ、今、この島の代表は私なんだから」

ハルダとこの島は平等でありたい。

そう言えば、イジークは嫌そうな顔をしながらも視線をそらした。他の連中も、そういうことなら…、それで貿易が上手く行くなら…と顔を見合わせている。よし、言いくるめた。イジーク以外は単純

で助かる。

「この島を一週間は開けるけど、そう事件も起こらないでしょ。いつも通り仕事をしていてほしい、頼むよ」

この疑問にとっとと決着をつけなければ。潰すなり生かすなり、早い方がいい、この島に危険があるものを放ってはおけない。

なぜシロウに言えないのか、本当はわかっている。この問題はきっと、あのシロウでさえ傷つくだろう。思い出したくもない苦しくて、つらくて、生きている実感さえ消えて行く日々。今こうして温い温度に浸っているからこそ、余計に堪える。

偶然知った私が、うまく片付けられたらそれでいい。何も問題ないじゃないか。彼に言うのは大きな問題になりそうだと判断してからでいい。これをシロウに隠しぬけるかどうかは定かじゃない、だから彼と会うまでに終わらせるべきだ。

もしかして在日のイタリア人だったかもしれない、それでも、私が好かれているとは思わない。アズマやサトウのような私を支持する人は希少なのだ。私はそれを当たり前だと思っている、だって、私は中枢にいた人間の顔と名前しか記憶していないんだから。殺した人間の顔なんて、家族ぐらいしか覚えていない。

1時間ほど医療の話や本部の移設の話などをしていたが、結局まとまらずすぐに解散になった。こうなる気はしていたので、もともとハルダへ行く準備してあった荷物を取りに部屋に戻ろうと廊下を歩いていると、イジークに声をかけられた。

「あんたがハルダに行くっていったら行くんだろうけどよ、あのグレアムがあんたに許可を出したのもおかしな話じゃないか？グレアムだったら自分が行くっていいそうなのに」
「そんなことは分かってるよ」
「え？」

そんなことは分かってるんだ。

今回私に任せられたのは海軍の貿易のことだけじゃなく、向こうの世界の人のような気がしてならない。海軍は向こうの世界を認知しているんじゃないか、と考えないこともなかった。でもそれだったらシロウが真っ先に情報を仕入れるだろう。
そう考えたところで、私は足を止めた。

もしシロウが私のように、隠していたんだとしたら？

――――まさか。首を振って歩きだす、まさか、そんなことあってほしくない。私は自分勝手だ、自分自身は嘘を吐いても平気な顔をしていられるのに、嘘を吐かれるのはこんなにつらい。それが分かっているのに私は嘘を吐くのをやめられない。やめよう、考えたくもないことだ。

「シロウには言わないでくれるかな」
「ハルダに行くこと？……どうしてだよ、おれにそんなこと頼むな」

やめてくれよ、バレたらおれが殺されるだろ、とイジークが肩をすくめたのを見て溜息を吐く。こいつは全面的にシロウの味方だったのを思い出して、どうしたものかと考える。

「ハルダに、何かあんのか？」

「……それを言ったら、イジークは黙っていてくれる？」
「あんた、本当に何を隠してるんだ？シルヴィオに隠し事するのはやめたほうがいいと思うぜ」
「イジーク」
不審げに眉を顰めるイジークに、つとめて明るく囁く。
「今ここで腹をぶちぬかれるのと、黙って仕事をこなすのと、どっちがいい？」
顔を真っ青にさせたイジークの腹に鉄の塊を押し付ける。暫く沈黙が落ちたが、イジークは両手を上げた。この男は勘の鋭いやつだ、私がどんな事を隠しているかおおよそ予想がついているような気がする。シロウとどれだけ仲がいいか知らないが、少し前から、この男には向こうの世界を知っているようなふしがいくつかあった。面倒なやつだ。
「この駐屯地は任せたからね、それじゃ」
足がこんなに重いのも久しぶりだ。頭が鈍く痛むのも、そんなにおいなんかしないのに、硝煙と血の匂いが鼻にこびりついているような気がするのも。
ふと、やさしい緑の目を思い出した。今、彼は何をしているんだろう。

自称魔法使いの重枷

遅くなりそうだった新人研修になんとかキリをつけて、想定していたよりもひと月も早く駐屯地に戻ることができた。ほっとしたのもつかの間、久しぶりに帰る駐屯地は本部とちがってこざっぱりしていて、何か異変を感じた。空気の重い――――どこか落ち着きのない海兵たちが、うろうろと暇を持て余している。

「……？」

それをぼんやり見ていると、俺に気付いた一人が目で見て分かるぐらい顔を輝かせた。なんだよ気持ち悪いな。

「大将が帰ったぞ！」

声高に叫びながら廊下を走る一般兵につられて、他の兵士たちも安堵の表情を浮かべた。

何かあったな、と確信しながら廊下を歩く。

この本部よりあきらかに短いはずの廊下の長さにさえ苛立ちを感じる、何を苛立っているのだろう、思わず寄っていた眉間の皺をほぐす。ぞわぞわと肌が震えるような、この感覚には覚えがある、この感覚がするときは決まって悪いことが起こるんだ。

思えばその感覚は、戦うときによく似ている。戦慄、慟哭、硝煙と爆音が入り混じった戦場で感じる、快感にも似た、腹から背筋まで這う冷たい感覚。

少し長くなった金髪をかきあげて気を紛らわしながら思考する。

さて、この駐屯地に何があったか。別に、シキが自分勝手な行動をしない確信があったわけじゃない、むしろ彼女は自分がこうだと決めたらそれを貫く節がある。ばかなやつだ、大事なことなら、特に言おうとしない。

本当に縛り付けておきたいぐらいだ、そうしたら俺はいちいちハラハラしなくても済む。この駐屯地だけでは、彼女の枷としては軽かったか？どうして勝手な行動をするんだ、あの女を怒鳴りつけてやりたい。何を隠すために俺に何も言わず、何をしている？こんな海兵を不安にさせてまで。

開いた執務室の中に、彼女の姿はどこにもなかった。
放置された無線機がひとつ、シキの机の上に残されている。

「――――」

握ったドアノブが音を立てて崩れ落ちた。鉄の残骸になったそれを蹴飛ばして、無意識に英語で悪態を吐く。
静かな部屋に、人の気配はどこにもない。それもしばらく前からだ、積み上げられた書類にわずかに埃がついていることから、シキが何日か前に出かけたらしいことは推測できた。

暫くその場に立っていた。

風で小さく音を立てる窓をぼうっと見て、存外冷静な頭がどうしたものかと考え始める。だが、続いた仕事の疲労からか、何も思いつかない。腹の中に何かを飼っているかのように理解できない感情が渦巻いているのを吐きだそうと、重い溜息を吐く。

「シルヴィオ」
「イジーク、どういうことだ」

自然と低くなった声で、いつの間にか後ろにいた友人に問う。イジークには言ってあった、あの女が勝手なことをしでかさないように。馬鹿なことをしないように。

振り向くと、彼は苦い顔をしていた。別にイジークだけが悪いわけじゃないとは分かっている。彼女の不安を”覆い切れなかった”、俺の責任でもあるからだ。落ち着け、と自分に言い聞かせる。焦ってもいい考えは何も浮かばない、落ち着け。

「ハルダに行った」

グレアムも許可した、おかしな話だろ。
そう呟くように言ったイジークは何か、そう、勘付いていた。この男は鋭く、賢い、そしてしたたかである。そういうところが気に入っていた、だけどこの時ばかりは苛立って仕方ない。

この男は、わかっていて、シキを止めなかった。

この時ばかりはよく喋るイジークも言葉少なだった。この男も、

どうしていいかわからないのだろう。やり場のない感情、寂寥感、焦燥。炭色の目を見てすぐに分かった、この男は、迷っている。おそらくは、このまま海軍にいて、俺についていくかどうか。そう迷うほどの違和感が、今、海軍に漂っているのか。

「……場所は？」

「特定の場所は知らない、”名目上”はハルダとの貿易のために行ったんだ」

それを聞いた俺は彼女の机の引き出しを引っ張りだした。何かがあると分かってやったわけじゃない、ただ手掛かりになるものがあるという、単なる勘にすぎなかった。不快な埃の臭いが鼻をかすめると同時に、わずかにシキのにおいがした。

彼女は、そう、ここにいなくちゃならない。だが、”もうひとりの俺”のように誰かを操るなんてことはしたくない、うまくいく人生なんて味気ないものだ。強い意志携えた目をしていないシキは、シキじゃない。

俺はもう一人の俺以上に、この力を持て余している。――――小さな罪悪感のために。それが正しいことかどうかなんて、俺次第だ、それでもそう考えるほどに俺はこの世界で大きな存在になりすぎて、そのくせ平凡で矮小な存在である。

それこそ俺の方が、シキという枷が必要なほどに。

「おい、シルヴィオ」

次々出て来る紙を乱暴にかきだすと、イジークが咎めるように驚いたような声をあげた。うるさいやつだ、少し黙っていられないの

か。どうしたらいいか逡巡しているイジークを放って、作業を進める。イジークの件は後だ、減給してやると心に決めている、それだけで済んでいいと思えよ。

一番上、二番目――――そして、錠のついた3番目で手を止める。

そうか、これか。これが、

俺は迷わず錠を引きちぎる勢いで引き出しを開けた。木製の引き出しの一部分が欠けて木くずが宙に散る。無理やり壊された錠が床に落ちる金属音が、静かな部屋に響いた。

三番目の引き出しの中身は少なかった。特に重要とされる金銭関係の書類が数枚、軍備関係が三枚。そして一枚だけ、他のものとは雰囲気の違う紙が不自然に、底に敷いてあった。随分と古い紙の書類だ、日焼けしたような薄い黄色に変色している。

「……ハルダの、鍛冶屋」

呟いて、裏面を見る――――

”見覚えのある文字”に舌打ちをした。

海軍４

浮かない気持ちでハルダの土を踏む。陽がだんだんと落ちてきたためか、急に温度が冷やかになる。賑やかなはずの街の人間はすでにまばらになっており、帰宅する人ばかりが目に付いた。

素肌を出したような恰好じゃ風邪をひくどころか、凍死してしまうだろう”夜”が近付いてくる。そんな静かな夕暮れ時に、私は情報収集をしていた。しだいに息が凍り、足元から芯まで冷えてきた。裏地に毛皮がついたローブを羽織りなおし、手に息をふきかける。

１週間前の夜にあの駐屯地を出て、今日の早朝からハルダをぐるぐると回っている。

情報が入り乱れる酒場、賭場に滑り込み、自分の知りたい情報だけを抜き出していく。私は情報を引き抜くのが得意だ。力がない代わりに悪知恵ばかり働くと、アイがぼやいたのを思い出す。この悪知恵についてきたくせに、よく言う。

最近は”陛下”のいい噂話がよく出回っており、それに気分が浮上するが、すぐに凋んでいくのが自分で分かった。意味もなくため息を吐きだす。無理やり押し切って海軍を出てきた罪悪感と、焦りがずっと頭の中を回っている。

どうしても私の頭の中を金髪がよぎるのだ。彼だったらきっと、いつでも私の腕をひいてくれるから。愛してくれるから。会いたい、会いたくない。私の考えを聞いてほしい、聞いてほしくない。いつの間にか彼のことばかりだ。

ハルダの貿易についての話は前日に終わっている。

もともと書状を送り合う仲だったので、お互いが印を押すだけでよかったのだ。会議の後に、アズマがどうせなら城に泊っていけばいい、と言ったが、当然それを断った。ハルダの王城というものにも興味があるが、それはまた次の機会にお願いしたい。

はたして私は違和感なく、アズマやサトウの目を見ながら、それを言えたのだろうか？

よく覚えていない。

私は一つの事に集中すると周りが見えなくなる、ことはない。と、自分では思っていた。だけど今回ばかりは焦って仕方がない。最近は凡ミスをして他の兵士が首を傾げているし、その度言い訳するのにも疲れてしまっている。

――――自分自身が揺らぐほどに、私は今の生活がほんとうに言葉にできないほど大事で、好きで、手放したくない。壊されるのが怖い。

ざらりと砂ぼこりが私の頬をなめる。

そろそろ宿をとらないと、と考えながら砂でざらついた髪を梳かす。ふと目についた看板にふっと息を呑む。熱くもないのに、じわ

りと汗がにじんだ。しばらくして、息を止めていたことに気づいて、深呼吸をする。
風でゆらぐ木の看板に彫ってある、かろうじて読める文字に目を向けた。
あ、と小さく声が漏れた。
――――鍛冶屋、だ。
別にこの鍛冶屋が当たりというわけじゃない、貿易国家ならいくらでも鍛冶屋はあるし、さっきまでも何件も鍛冶屋を見て回ってきて、ハズレだった。それなのに今、なぜか私には確信があった。
ゆるい風が吹くと、何かが鼻をかすめた。唐草と鉄さびを混ぜ込んだような臭い。

古い木の扉をくぐるまでもなかった。
小さく開いた隙間に見えた、金色に、泣きたくなった。
なんでこんなところにいるんだ。

赤黒く汚れた床の上に、膝を吐いた男がいた。シロウの顔立ちに良く似た、色素の薄い男だ。「この、殺し屋め、ちくしょう、しんじまえ、くそ、くそ、しにたくねえよ」血反吐の混じった声で、呪いの言葉を吐いていた。血走った目が、私をとらえる。
「シキ……！お前だけ、は、許さねえ、ぞ」

何度も何度も見てきた、死んでいく者の目で、シロウじゃなく、私を射抜く。「あ、お、俺の、妻を、お前が、殺したん、だ」許さない、許さない、許さない。壊れたように叫ぶ男をぼんやりと眺めながら、私はこの国へ何をしにきたんだったか、と考えた。

この男に呪いの言葉を投げかけられるため？

私に背を向けるシロウを見るため？

――――違う。

許さない、と男は叫んだ。

じゃあ、どうやったら許されるの。許す許さないの問題なの。この男だって、私の仲間をいたぶって殺したくせに。そんなもの見つけられるわけがない、戦争なんて、秩序と矛盾をぐちゃぐちゃにまぜっかえしたような”世界の出来事”なのだ。その渦中にいて、生きていくのに必死でお互いを殺しあったのに、どうしてお互いが共通の”正解”を見つけられるというんだろう。

シロウは私のほうを振りかえらなかった。

だから、どんな顔をしてこの男を眺めているかもわからない。

己を嫌う他人を見ると、自分の嫌な部分を見ている気になる。血反吐を吐きながら呪う言葉が耳にこびりつき、命を乞う声が昔の自分と重なる。その度に、嫌に理性的な感情が私自身を凍らせる。私は聖者でもないし、綺麗ごとを言えるほど死を知らないわけじゃない。

ぐしゃり、と男が倒れこんだ音が、変に遠くに聞こえた。この空間だけが隔離されたように、動けない。冷たい風が吹き抜けるのに、

時間が止まっているようだった。

「シキ、ごめん。本当は、失敗してたんだ」

それだけで私は理解してしまった。
彼はこの世界に来てからずっと隠してきたんだ。

こうやって、そう、”こうやって”。
私たちの敵がこの世界で生きていることを、私が知らないように。
ぬるい壁の中で、私が笑って、シロウと、アイと、それからシスターたちと、あの小さな島で幸せに生きていけるように。

ゆっくりと振り返ったシロウに、私は何も言えなかった。

何を言えばいいか分からなかった。
何を言えば、シロウに近づけるか分からなかった。

例えばこの男のことでもいい、この血だまりのことでもいい。
私が無断でハルダに来たことを謝ってもいい。
何か、何か言わなくちゃと思えば思うほど、私の喉からは何も出てこなかった。

シロウのこんな顔を見たいわけじゃなかった。
色んな感情が混ざった、どこか悲しそうな、二度と見たくないと願っていた顔だった。
彼が私を大切にしてくれているのは分かっている、常に心配してくれているのも、愛してくれているのも。ちゃんと分かっていると

思っていた、なのに知らなかった、私が彼の優しさの範囲内でずっと過ごしていたこと。

少し考えれば想像はついた。
時折彼が独りで出かける理由も、グレアムや海軍の態度だって、少なくとも勘付いては、いたのに。

海軍で起こっている不自然なことを私は知っている。本部にだけ、かすかにどこか漂う不信感。グレアムの態度と目でうすうす感づいていた、あの仄暗い目は誰かを殺そうとする目だ。そしてシルヴィオの”魔法”の失敗。

関連付けていいものだろうか、ねえ、シロウ。

どうして話してくれなかったんだろう。

いくら私に教えたくなかったからって、そりゃない。私も同じぐらいシルヴィオが大事なのに、そこのところをこの男は本当にわかっていない。私だって力になれたはずだ。別に全部じゃなくたっていい、掌を見せあって、隣を歩いていけるはずじゃないのか。

「シルヴィオ」

結局私の口から出たのは、彼の名前だけだった。

シロウは私の腕を引っ張りこんで、強く抱きしめた。肩口に顔を

埋める形になった私は、考える。同じ海軍の服を着ているのに、どこか硝煙の臭いがするのはいつからだっただろうと。こんな小さなことにも気付かなかったなんて、私はばかだ。たぶん、平気な顔して獲物を振り回す癖に、一度懐に入れた人間にとことん甘い彼に、当然ながら私は甘え切ってしまっていたんだろう。

「――――シキ」

小さく、耳元で名前を呼ばれるのと同時に、骨が軋むぐらい強い力をかけられた。シロウも何を言えばいいのか分からないのだろう、何かを願うような、訴えるような、そんな乱暴な抱きしめ方だった。ふわりと香った、いつもと同じシロウのにおいに少しばかり安堵した。

痛い、胸が苦しい、だけど私はこの痛みを拒絶できない。
それどころか、私も力を込めて彼を抱きしめた。
私の言葉に表せない感情まで伝わったらいいのに。

「シキ、ちゃんと話すから。だから帰ろう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8197j/

ＣＲＥＳＣ.

2010年10月12日00時44分発行